20 世紀前半アメリカにおける
日系人の図書館意識
－アメリカ化の視点から－

筑波大学
図書館情報メディア研究科
2014 年 3 月

向後　直美

目次

目次 1
1. はじめに 3
1.1. 研究背景 3
1.2. 卒業研究の結果と課題 4
1.3. 研究目的 4
1.4. 研究方法 5
1.5. 先行研究 5
1.6. 用語説明 6
1.7. 論文の構成 7
2. アメリカにおける日系人の状況と日系人の同化 9
2.1. アメリカにおける日系人 9
2.2. 日系人排斥運動 13
2.3. 帰化権と同化 18
3. 公共図書館におけるアメリカ化運動と移民サービス 23
3.1. 移民サービスとアメリカ化運動の関係 23
3.2. *Library Journal* にみる移民サービスとアメリカ化運動 28
4. 日本語新聞にみられる日系人の図書館意識 43
4.1. アメリカで発行された日本語新聞の概要 43
4.2. 日本語新聞の量的分析 44
5. 日本語新聞の内容分析 50
5.1. アメリカ公共図書館に対する認識 50
5.2. 日本語図書館に対する認識 54
5.3. アメリカ化運動と図書館 61
5.4. 日系人の読書の意義と実態 64
5.5. 日本語新聞に見る日系人の図書館意識 71
6. 考察 78
7. 参考文献一覧 83
謝辞 90

図表番号

図 1　サンフランシスコ領事館内の日本国籍離脱者数の推移 17
図 2　*Library Journal* に掲載された移民サービスに関する記事数（1900 年-1929 年）..... 29
図 3　外国生まれの者の居住人口数推移（1890 年-1930 年）..... 30
図 4　*Library Journal* に掲載された移民グループ別記事数の割合（1900 年-1929 年）..... 32
図 5　外国生まれの者の母語別人口数（1910 年）..... 33
図 6　*Library Journal* に掲載された移民グループ別記事数の比較（1900 年-1929 年）..... 34
図 7　*Library Journal* 掲載のサービス内容別記事数（1900 年-1929 年）..... 35
図 8　日本語新聞における図書館等関連記事 46
図 9　日本語新聞（1906 年-1929 年）における基準項目別の記事数 47
図 10　日本語新聞（1906 年-1929 年）の基準項目別の割合 48

表 1　カリフォルニア州における日系人人口数 10
表 2　カリフォルニア州主要都市の日系人人口数（単位：人）..... 10
表 3　1 世と 2 世の最終教育歴比較 11
表 4　日系人 1 世の職業の変遷 12
表 5　1900 年から 1925 年までの日本からアメリカへの移民数 15
表 6　アメリカ化運動の変遷 24
表 7　移民サービス内容分類表 29
表 8　*Library Journal* 掲載の州別移民サービスに関する記事数（1900 年-1929 年）と外国出身者の分布（1920 年）（抜粋）..... 31

1. はじめに

1.1. 研究背景

2012 年の統計によると、日本の在留外国人は、中長期在留者と特別永住者を合わせて 203 万 8,159 人である [1]。外国人が日本に一定数居住している事を反映して、日本の図書館においても外国人へのサービスの必要性が強く認識されるようになってきた。1998 年には日本図書館協会が『多文化サービス実態調査 1998』を行い、図書館の多文化サービスの実態を明らかにしている。つづいて 2003 年には日本図書館協会内に多文化サービス研究委員会（現：多文化サービス委員会）が発足し、実践報告が掲載された多文化サービスのマニュアルを作成している [2]。しかし、日本図書館協会は全国的な多文化サービスの実態調査を 1998 年以降行っていない [3]。このように、日本の公共図書館の多文化サービスは実施されているものの、実態調査が行われていないことから、公共図書館の多文化サービスに対する意識は未だに低く、充分行われているとはいえない。

一方で、アメリカ公共図書館の外国人に対する図書館サービスの歴史は 1900 年前後まで遡る事ができる。その背景として、20 世紀前後に起こった「新移民」の大量流入が挙げられる。この現象は、アメリカ全土に大きな影響を与え、1900 年から 1920 年代まで、主に移民に対してアメリカ化運動が盛んに行われるようになった [4]。新移民は、経済的に貧しい人々であり、同化が困難であると理解されていた [5]。そのため、このような移民が大量に移住したことに対するアメリカ社会の不安がアメリカ化運動に現れたのである。

この流れはアメリカの公共図書館にも現れていた。公共図書館における組織的な移民に対するサービスは 1900 年から始まったとされており、当初から移民のアメリカ化を目的としておこなわれていた。図書館員にとってのアメリカ化とは、英語の教授と市民権獲得の支援であり、移民が英語を獲得することにより市民権獲得が速やかに行われると考えていた [6]。

そのような社会環境の中で、日系人のアメリカ化はどのように行われていたのだろうか。日系人自身の働きかけとして、アメリカへ出国する前やその船中でアメリカの習慣やアメリカと日本の違いなどを学んだ [7]。アメリカ側からの働きかけとして、20 世紀初頭のカリフォルニア州では、プロテスタント各派が「キリスト教化はアメリカ化」のスローガンのもとに日系人に対する宣教を行っていた [8]。

このように、市民団体が日系人に対しアメリカ化を行っていた状況の中、アメリカ化を移民サービスの中心としてとらえていた公共図書館に対して、日系人はどのような意識を持っていたのだろうか。

1.2.　卒業研究の結果と課題

筆者は卒業研究において、1900 年から 1910 年にかけてサンフランシスコ市立図書館（San Francisco Public Library）における日系人に対する図書館サービスについて、主にサンフランシスコ市立図書館の図書館年報と図書館議事録を用いて文献調査を行った。分析の枠組みは、川崎良孝の提唱した黒人差別の枠組みである「制度的差別」と「実質的差別」を採用した。「制度的差別」とは、政府の行為や法律によって生じた制度的な図書館利用での差別や隔離と定義され[9]、「実質的差別」とは、行政の行為や法による影響ではなく、私人や何らかの要因から結果として生じる差別や隔離と定義されている[10]。

この枠組みを用いると、サンフランシスコ市立図書館では、日系人に対して、制度的差別はなかったが、実質的差別が存在した可能性があるとの結論を得ることができた。制度的差別を受けていなかった理由は以下の通りである。まず、公的文書から、日本語図書を所有していたことが確認できた。さらに、有色人種や日系人に対して区別してサービスを行うという旨の記述がなされていなかったため、図書館へのアクセスという点に関して制限はされていなかったと考えられる。

一方、実質的差別の存在の可能性を指摘した理由は以下の通りである。日本語図書のニーズはあったのが明らかであったにも関わらず、移民人口比を含めて他の移民と比較しても、日本語図書の冊数は各言語より少ないことが明らかになった。しかし、図書館年報や図書館議事録では日系人について直接言及されている箇所が見当たらず、日系人の図書館意識を明らかにすることができなかった。

1.3.　研究目的

以上を踏まえて、本研究の目的は以下の通りである。まず、日系人に対する図書館サービスを分析するために、アメリカ全土の移民サービスの傾向を当時アメリカで発行されていた図書館関連誌から明らかにする。次に、日系人の図書館に対する意識について、アメリカ化運動を軸に日本語新聞を用いて言及する。20 世紀前半のアメリカ公共図書館における移民サービスはアメリカ化運動に重点を置いていた。しかし、娯楽の提供、イベント開催などアメリカ化運動以外の機能もあったと推測される。収集した記事の内容によって、日系人がアメリカ化運動を図書館に期待していたかを分析する。同時に、日系人は図書館に何を求めていたのかについても考察する。

先行研究と卒業研究の結果、サンフランシスコ市に現存しているアメリカ側の当時の資料には、日系人に関する記述がほぼ見受けられなかった。そのため、日系人自身が作成した資料から当時の公共図書館に対する意識を探ることにより、公共図書館の日系人の対する意識を明らかにしていく。

1.4.　研究方法

本研究は文献調査を行う。対象期間は 1900 年から 1929 年、対象地域はサンフランシスコ市を中心とした地域である。サンフランシスコ市を中心とした理由として以下の 2 点をあげる。

①サンフランシスコ市には日本人街が存在し、アメリカ本土に日系人が移住してきた初期の頃から日系人人口が多く、その後も一定数の日系人が居住していた。

②サンフランシスコ市はサンフランシスコ学童隔離問題に代表されるように、日系人排斥運動が活発に行われた都市であった。

これらの点から、サンフランシスコ市を調査対象とすることは最適であると判断した。

文献は、サンフランシスコ市で発行されていた日系人向けのコミュニティ新聞『日米新聞』と『新世界新聞』を分析の対象とする。両紙において図書館、読書欲や情報提供に関する情報を抽出し分析する。対象期間は、先行研究からアメリカ化運動が盛んであったとされる 1900 年から 1929 年を対象とした。

1.5.　先行研究

移民に対する図書館サービスを歴史的に俯瞰したものとして、ハーネス・マクマレン（Haynes McMullen）の「アフリカ系アメリカ人および先住アメリカ人以外のエスニック・マイノリティに対するサービス（”Service to ethnic minorities other than Afro Americans and American Indians”）」がある。これは、1900 年から第二次世界大戦までの移民サービスを当時のデータや論文をもとに分析し、この時期の図書館状況や社会状況を明らかにしている [11]。しかし、エスニック・マイノリティといえどもドイツやイタリアなどのヨーロッパ系移民に対する内容が中心となっており、アジア系移民に関しての言及は少ない。

アメリカ公共図書館の移民サービス研究として、小林卓の「今世紀初頭のアメリカにおける移民へのサービス」をあげる事ができる。20 世紀前半の移民サービスに関して、当時アメリカ社会で流行していたアメリカ化運動の動きと関連付けて移民サービスの特徴を明らかにしている。特にアメリカ図書館協会（American Library Association）で組織された「外国出身者サービス委員会（Committee on Work with the Foreign Born）」の活動を中心に分析を行っている [12]。しかし、移民サービスに関して量的な分析や移民の出身国別のサービスに関する分析は行われていない。加えて、マクマレンの論文と同様に日系人に対する図書館サービスについての言及はほぼなされていない。

一方、日系人の図書館利用について取り上げられた研究はまだ少ない。日系人の図書館利用について言及した初期の論文は、有色人種問題を最初に取り上げた論文でもある、ウ

ィリアム・ヤスト（William F. Yust）が 1913 年に発表した「黒人と黄色人種はどうか？」（“What of the black and yellow race?”）である。そこには「図書館によく来る日系人は多くなかった。彼らのほとんどが学生であり、借りられた本は学校の課題に関係している」[13]と、人数は多くなかったものの、日系人は図書館を利用していたという記述がある。また彼は、「いくつかの地域では、彼らは平均的な高校生より見識があり、丁寧で、頭がよい」[14]と日系人を評価している。確かに、日系人排斥運動が行われていた時期であっても、アメリカ市民の個人的な日系人に対する印象は「丁寧で真面目」というものであったことからも [15]、ヤストの評価は適切であったといえるだろう。ヤストは続けて「黄色人種は図書館で明らかに問題になっていない一方、黒人には問題があったことが明らかである」[16]とも述べ、その後は当時の黒人問題について言及し、日系人に関する詳細な記述は見られない。

さらに、日系人の図書館意識に関する研究も同様にまだ少ない。アメリカの強制収容所における日本語図書館について研究した、アンドリュー・ウェルトハイマー（Andrew Wertheimer）の『1942 年から 1946 年のアメリカ強制収容所における日系人コミュニティ図書館』（“Japanese American community libraries in America’s concentration camps,1942-1946”）では、アメリカ西海岸における日系人 1 世と 2 世の図書館利用と、アメリカ強制収容所内に設置された日本語図書館の設立過程や運営方法から、特別な状況下における日系人の日本語図書館に対する意識を明らかにしている [17]。個々の強制収容所の状況などにより、図書館の状況は異なっていたが、トパーズ日本語図書館を利用していた人々にとって、トパーズ日本語図書館は公共の場であり、利用者の必要とする情報や情報を得る手段へのアクセスを提供した場であると結論づけている。日系人の日本語図書館についての意識について言及した研究ではあるが、強制収容所内の日本語図書館という特別な状況下について言及したものである。

よって、本研究では、日系人が通常に生活を送っていた時期を中心に、日系人の図書館に対する意識を明らかにする。当時、移民に対して積極的に取り組まれていた運動であるアメリカ化の視点から図書館を分析する事により、当時の移民サービスの状況を新たな側面から見ることができることに加え、日系人のアメリカに対する意識を踏まえて考察できると考える。

1.6. 用語説明

「アメリカ化」とは、大きく分けて「内的」と「外的」の 2 つの意味合いを持っている。「内的アメリカ化」とは、「同化主義」とも表現され、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて高揚した新移民の国民化を指す [18]。これに対し、「外的アメリカ化」は近年の外国におけるアメリカ化、民主主義の導入、大衆消費社会への変化、アメリカの大衆文化の浸透などの減少

を指す[19]。本研究では前者の「内的アメリカ化」をアメリカ化として議論する。

19 世紀末から 20 世紀初頭にアメリカ全土でアメリカ化が注目された。各時期によってアメリカ化の捉え方は異なるが、主に白人アングロ・サクソン系プロテスタント（WASP）の思想や生活様式への同化という意味で使われている。これを目標とした活動を「アメリカ化運動」と呼ぶ。アメリカ化は同化の強制という性格が強かったが、移民は排斥を逃れるために積極的にアメリカ化に同調した[20]。

本研究で、「帰化権（naturalization）」と「市民権（citizenship）」という単語が現れる。1934 年に編纂された平凡社の『大辞典』では、「市民権」を「法の制定・国家政治に参興する権利、生命・身体・財産に対する不可侵、言論・集会・結社・出版等の自由。能力に応じて官史に任用せらるるの権利等の如き国民として有する基本的権利の義に用いらる」[21]、「帰化権」を「一定の条件を備ふるものが帰化をなし得る権利」[22]と定義している。一方、合衆国憲法修正第 14 条（Fourteenth Amendment to the United States Constitution）は、アメリカで市民権を得る 2 つの方法を規定している。アメリカ国内での出生に基づく市民権獲得と、帰化による市民権の獲得である[23]。そこで、本研究では帰化権を「市民権獲得の権利」とし、市民権を「国籍」と同義であるととらえることとする。

1.7. 論文の構成

本論文は結論を含めて 6 章から構成されている。

第 1 章では本論文の概要および先行研究について述べる。第 2 章では日系人移民の歴史と状況を、流入期から第二次世界大戦によって強制収容所に拘束されるまでの動きを概観する。第 3 章は *Library Journal* を用いてアメリカの移民サービスについてアメリカ化運動という視点から量的に分析する。加えて、*Library Journal* で取り上げられた日系人に対する議論についても言及する。第 4 章は、まず、アメリカで発行された日本語新聞を概観したうえで、『日米新聞』『新世界新聞』を用いて図書館やその他のキーワードで収集した記事を量的に分析する。第 5 章では引き続き両新聞から収集した記事を用いて、KJ 法を用いて質的分析を行い、日系人の図書館意識を明らかにする。第 6 章では、本研究の結果と考察を行った。

---

[1] 法務省入国管理局，「平成 24 年末現在における在留外国人数について（速報値）」，法務省, http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00030.html,（最終アクセス日：2014 年 1 月 16 日）

[2] 小林卓，杉本ゆか，「『図書館利用に障害のある人々』へのサービス」，図書館界 61(5)，日本図書館研究会, 2010, p484-485

[3] 小林卓，高橋隆一郎，「図書館の多文化サービスについて」，『情報の科学と技術』59(8),

社団法人情報科学技術協会, 2009, p398
[4] 松本悠子, 「アメリカ人であること・アメリカ人にすること」, 『思想』(884), 岩波書店, 1998, p52-75
[5] 松尾弌之, 『民族から読み解く「アメリカ」』, 講談社, 2000, p128-131.
[6] Jones, Plummer Alston. Jr, *Libraries, immigrants, and the American experience*, University Microfilmes International, 1999, p10-11
[7] 田中景, 「20 世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業」, 『社会科学』(68), 同志社大学人文科学研究所 p307-322.
[8] 松本, 前掲書, 1998, p52-75
[9] 川崎良孝,『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会 ： 理念と現実との確執』, 京都大学図書館情報学研究会, 2006a, p31.
[10] 同上
[11] McMullen, Haynes, "Service to minorities other than Afro Americans And American Indians.", *A Century of service*, Chicago, American Library Asociation, 1976, p42-61
[12] 小林卓, 「今世紀初頭のアメリカにおける移民へのサービス」, 『社会教育学・図書館学研究』(17), 東京大学教育学部社会教育学研究室, 1993, p23-33
[13] Yust, William F. "What of the Black and Yellow Races?", *Bulletin of the American Library Association* July, 1913, p159.
[14] *Ibid*
[15] マックウィリアムス, ケアリー著／鈴木次郎・小野瀬嘉慈共訳, 『アメリカの人種的偏見：日系米人の悲劇』, 新泉社, 1970, p22.
[16] Yust, *op. cit*, 1913, p159.
[17] Wertheimer, Andrew, *Japanese American community libraries in America's concentration camps, 1942-1946*, University of Wisconsin, Madison Ph.D.Dissertation, 2004, 246p；アンドリュー・ウェルトハイマー, " 「アメリカの強制収容所内での文化空間の創造」, 『日本図書館情報学会誌』54(1), 2008, p1-13
[18] 油井大三郎, "総説　世界史の中のアメリカニゼーション", 油井大三郎, 遠藤泰生編, 『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』, アメリカ太平洋研究叢書, 東京大学出版会, 2003, p3-9
[19] 同書, p11-13
[20] 同書, p5-6
[21] 平凡社編, 『大辞典第 11・12 巻』, 平凡社, 1953, p263
[22] 平凡社編, 『大辞典第 7・8 巻』, 平凡社, 1953, p362
[23] "Amendments to the Constitution of the United State of America", U. S. Government Printing Office, p28-30, http://www.gpo.gov/fdsys/pkg/GPO-CONAN-1992/pdf/GPO-CONAN-1992-7.pdf, (accessed 2014-1-16)；藤倉晧一郎, 「アメリカ市民権の喪失」, 『同志社アメリカ研究』2, 同志社大学, 1965, p22-23

2.　アメリカにおける日系人の状況と日系人の同化

日系人の図書館意識を議論するにあたり、その前提となる日系人移民の状況を見る必要がある。第２章ではまず、アメリカにおける日系人の状況を 1900 年から 1940 年を中心として概観し、つづいてサンフランシスコ市を中心とする日系人排斥運動、それに付随して帰化権とアメリカへの同化に関して検討する。

2.1.　アメリカにおける日系人

最初の日本人移民労働者集団は、1868 年（明治元年）にハワイへ渡った「元年者」と呼ばれる 148 人の移民と言われている [1]。その後 1885 年に日本とハワイ王国で条約が締結され、1894 年までの間に約３万人が「官約移民」としてハワイへ渡った [2]。官約移民とは、ハワイと日本の政府間で結ばれた移民協約に基づいて政府が派遣した日系人移民のことである。官約移民制度は 1894 年にハワイ王国が崩壊したことにより自然消滅したが、政府に代わり、民間の移民会社が労働者の募集と海外送出を行った。当時移民会社の営業について、国の規制や規則がなかった。このため、海外での労働条件や賃金を偽ったり、高金額の手数料を請求したりという詐欺まがいの事件も頻発していた [3]。しかし、1896 年に日本で移民保護法が制定されたことにより、移民会社の活動内容が法的に定められ、日系人移民はある程度保護されるようになった。アメリカがハワイを合併した後は、合衆国法が契約労働者の入国を禁止していた影響により、ハワイへの契約労働移民は終結した [4]。

ハワイでの官約移民が始まったのと同時期である 1880 年代中ごろから、日系人はアメリカ本土への移住が始まり、玄関口であった西海岸のサンフランシスコ市に人口が集中した [5]。アメリカ本土への初期の移民は勉学をする目的で渡航する留学生が中心であった。なぜなら、当時の日本国内では、アメリカで新しい学問を学ぶ重要性を知的指導者が説き、移民を奨励していたからである [6]。しかし、ハワイへの契約労働移民が終結した影響により、アメリカ本土へ日系人が大量に流入し、移民の性質は留学生から労働者移民へと変化していった。

当時の日系人は日本では小作・零細農業に従事していた者が多く、副業を加えても生計を立てられない者が、アメリカで数年間労働し、日本へ帰国することを目的とした「出稼ぎ」としてアメリカへ渡った [7]。つまり、日本国内においても社会的経済地位の低い者がアメリカへ移住したといえる。加えて、日清戦争後の青年層を中心とする海外進出志向の上昇、戦後のインフレーションによる生活難も移住の要因となった [8]。日系人移民流入の初期は、出稼ぎ思考をもつ日系人が多数を占めていたが、1908 年をきっかけにして移民としてアメリカに定着する。これらの点については次節で詳しく説明する。

続いて、表 1 は 1880 年から 1940 年までのアメリカ本土における西海岸の州を中心とし

た日系人移民数である。西海岸の中でも、カリフォルニア州が最も多く、期間を通してアメリカ本土居住する 50%前後がカリフォルニア州に移住していることがわかる。1920 年はカリフォルニア州に居住していた日系人はアメリカに移住していた全日系人数の 64.9%にのぼる。

表 1　カリフォルニア州における日系人人口数

年度	カリフォルニア州日系人数（人）:A	アメリカ移住全日系人数（人）:B	A/B（%）
1880 年	86	140	61.4
1890 年	1,147	12,027	9.5
1900 年	10,151	24,282	41.8
1910 年	41,356	72,030	57.4
1920 年	71,952	110,848	64.9
1930 年	97,456	238,312	40.9
1940 年	93,717	226,826	41.3

（出典：Spickard, Paul, *Japanese Americans：the formation and transformations of an ethnic group*, Rutgers University, 2009, p176-178）

つづいて、カリフォルニア州内における主要都市の日系人人口数を表 2 に示した。

表 2　カリフォルニア州主要都市の日系人人口数（単位：人）

地名	1900 年	1910 年	1920 年	1930 年	1940 年
サンフランシスコ市	1,781	4,518	5,358	6,250	5,280
サクラメント市	1,209	1,437	1,976	3,347	2,879
ロサンゼルス市	204	4,238	11,618	21,081	23,321

（出典：Spickard, Paul, *Japanese Americans：the formation and transformations of an ethnic group*, Rutgers University, 2009, p184）

資料により日系人移民数は様々であるが、ポール・スピッカード（Paul Spickard）によると、表 2 に示したように、1900 年の段階で最も多いのはサンフランシスコ市であった。その後もサンフランシスコ市に日系人は一定数居住していたが、1910 年にはロサンゼルス

市の日系人人口とほぼ同数になり、1920 年には完全に逆転する。これは、1906 年に発生したサンフランシスコ大震災や日系人排斥運動の影響により、サンフランシスコ市に居住していた日系人がロサンゼルス市に移ったためといわれている[9]。

最後に、日系人の教育レベルと就業状況についてみてみよう。アメリカに労働者移民として移住した日系人 1 世は肉体労働者としての移民が主流を占めていたため、教育のレベルはあまり高くなかった。しかし、2 世の教育程度はかなり上昇している[10]。

表 3　1 世と 2 世の最終教育歴比較

教育レベル		1世（%）	2 世（%）
初等教育	中退	7	0
	修了	34	2
中等教育	中退	10	6
	修了	32	56
高等教育	中退	11	21
	修了	6	13

（出典：田中圭治郎, 『教育における文化的同化』, 本邦書籍, 1986, p5）

表 3 は、第二次世界大戦中に西海岸からシカゴに移住させられた約 2 万人の日系人に対する任意抽出の調査結果である。 1 世では、初等教育で教育を修了している人が修了・中退を含め 41%であるのに対し、2 世になるとわずか 2%のみである。中等教育までの教育を受けた 2 世は中退・修了を含め 62%、高等教育になると中退・修了を含めて 34%であり、13%もの人が高等教育を修了している。これは、 1 世と比較すると明らかに 2 世の教育レベルが高いといえる。

日系人の就業状況は、後述する 1908 年の紳士協定を境に移民の性質が変化した影響を受けて変動してきた。1908 年以前は、「出稼ぎ」移民が中心であり、彼らは日系人監督の下に組織されている集団に加入し、鉄道農夫や農園労働者として雇われた。都市内の日系人は家事使用人や日系人向けの小売業に従事していた[11]。反面、1908 年に締結された紳士協定により、日米の往復が困難になると、日系人は出稼ぎ的思考から永住土着的思考に変化し、アメリカで家庭を持つ人々が増加した[12]。加えて、日系人排斥運動の影響から地方に人口が流れ、農業を行う人々が増加した。サクラメント平原地域を例にあげると、1904 年に 907 人だった日系人人口は 1918 年には 4,655 人に増加していた。耕地面積についても 1905 年

に 37,777 エーカー（約 151 ㎢）だった耕作面積は 1918 年には 116,512 エーカー（約 466 ㎢）に増加している [13]。表 4 に 1 世の職業の変遷をまとめた。1964 年から 1966 年の間に、ハワイとアラスカ以外のアメリカ在住の日系人約 1 万 8 千人の中から、居住地域の割合と合致するように系統的標本抽出法を用い、1,047 人の日系人 1 世に対してインタビュー調査を行った結果である [14]。これは、1 世に最初にアメリカで就いた仕事、2 番目に就いた仕事、生涯にわたって就いていたと彼らが判断している主たる仕事を示している [15]。

表 4　日系人 1 世の職業の変遷

	初職（%）	第 2 職（%）	主たる職業（%）
専門的労働	2	1	4
経営者・所有者的労働	3	12	28
書記・販売的労働	5	5	2
農業関係労働	42	42	45
職工長的労働	1	3	4
熟練工的労働	7	8	2
家事労働・サービス業	20	15	5
その他の労働（農業関係を除く）	20	14	10

（出典：Levine, Geno N., *The Japanese American community*, Praeger, 1981, p30）

表 4 によれば、初職、第 2 職、主たる職業として最も割合が多いのが、農業関係労働である（いずれも 40%以上）。これは、渡米後のどの期間においても日系人 1 世の職として最も選択されていたといえる。

日系人 1 世は生涯変わることなく農業関係に従事した者が多いが、その間同じ地位に留まっていたのではない。日系人 1 世は初期の未熟練農業労働者から最終的に土地所有者となり労働環境が向上していた [16]。これは職業の変遷にもみることができる。初職で家事労働・サービス業は 20%と高い割合をしていているが、これは、英語を身に付けるために白人の家庭に住み込んだ者が多かったからである。その後、より良い労働環境を求め農業関係労働や経営者・所有者的労働に転職したといえるだろう。

つづいて、表 4 が示すように、主たる職業として経営者・所有者的労働が 28%おり、農業関係労働に次いで比率が高い。これは、都市での小規模店舗経営の多さを示すものである。後述する外国人土地法の影響により農村地域を追われた者のうち、都市でこの職に就

いた者が多かった[17]。特に、経営者・所得者的労働に従事しているものの約 35%がサンフランシスコ市、約 30%がロサンゼルス市に集中していた[18]。

以上のことから、日系人 1 世は農業関係労働者や鉄道工夫、家事使用人などの中流から下層の職業に従事していたといえる。また、彼らは同じ地位に留まっていたわけではなく、徐々に地位を向上していったことが伺える。加えて、サンフランシスコ市やロサンゼルス市において小規模店舗経営者が多いことを特徴としてあげることができる。

2.2. 日系人排斥運動

日系人移民の流入以前から、サンフランシスコ市では中国人排斥運動が行われていた。中国人移民排斥運動は、中国人と類似の日系人がハワイ併合に伴い増加した際、即座に日系人排斥運動が起こった一因ともなっている[19]。中国人は帰化権が認められないことに加え、1882 年には制定後 10 年間中国人移民のアメリカ渡航を禁止するという中国人排斥法が制定された[20]。それまで開放的な移民受け入れ態勢を維持していたアメリカで、この法律は移民の渡航・入国を制限する目的で制定された最初の法律であり、以降この先例が日系人に対しても適応されることとなる[21]。これらを背景にして、中国人に代わり増加しはじめた日系人が排斥の対象となっていった。

しかし、1900 年までは排斥運動といっても嫌がらせ程度のもの、散見的、局地的なものであったが、1900 年にシアトルにおいて開かれた排日集会とそれに続くサンフランシスコ市で開催された同様の集会から組織的な排斥運動が開始された[22]。1900 年にサンフランシスコで流行した伝染病は日系人と中国人が原因であるとして、サンフランシスコ市は中国人街と日本人街を隔離する政策をとった。そこで、日系人は自分たちの利益を守るために「在米日本人協会」（Japanese Association of America）を設立した。これに対抗してサンフランシスコ労働組合が排日集会を開いたことが組織的な活動の始まりである[23]。さらに、東洋人のアメリカ本土への大量流入はアメリカの社会的、経済的側面を脅かすという理由から、1905 年にはアジア人排斥連盟（Asian Exclusion League、のちの日韓人排斥連盟＜Japanese and Korean Exclusion League＞）が設立された。同連盟は積極的に各地で反日集会を開催したり、サンフランシスコ市議会に日系人排斥法案の提出を依頼するなどの排日活動を行った[24]。加えて、この時期は日本が日露戦争で勝利し、太平洋において強力な国家として台頭した時期でもある。これは、東アジア地域を将来市場および勢力拡大の対象の地と考えていたアメリカに衝撃を与え、アメリカが日本に対し危機意識を持つようになった[25]。このような社会状況で 1906 年「日本人学童隔離問題」が発生した。

「日本人学童隔離問題」とは、1906 年に起きた、日系人学童を公立学校から退学させ公立東洋人学校へ通わせる、という主旨の隔離命令から発生した一連の問題を指す[26]。

1906 年、サンフランシスコ大震災が起こったことをきっかけにサンフランシスコ学童隔離は実行されることとなった。被害の少ない公立学校に学童が集中し、安全に使用できる学校施設が極端に不足しているという理由から、教育委員会はすべての中国人・日系人・韓国人の子どもをチャイナタウンにある東洋人学校に通わせることを決定し、実行した[27]。

公立学校に通っていた日系人 93 人は 1906 年 10 月 15 日月曜日付で退学させられたが、日系人は東洋人学校へ通いはせず、復校までのほぼ 5 カ月は自宅に待機したり、一時的に日本語学校へ通った。一方、この決議に含まれる 23 人の中国人、3 人の韓国人、1 人のアラスカ人は抵抗することなく一般の公立小学校を退学した[28]。この人数比からも明らかなように、この決議は主に日系人を対象にしたものだったといえよう。全市 76 校のうち、45 校は地震の被害を受けておらず、全学童 2 万 5 千人中、市全体でわずか 93 人しかいない日本人学童を隔離することは、隔離理由として挙げられた問題の解決にならないことは明らかである。つまり、この隔離問題は人種差別が原因であるといえる。

学童隔離問題発生初期はサンフランシスコ市という地方における教育行政の問題にすぎなかったが、次第にアメリカと日本の外交問題へと発展していった[29]。当時の大統領であったセオドア・ルーズベルト（Theodore Roosevelt）は問題解決のため日本政府と交渉を重ね、ハワイなどを経由してアメリカ本土にやってくる日本人渡航者の制限をするという 1907 年移民法改正により学童隔離を解消させた[30]。

1907 年の移民法改正を受け、1908 年に林董外務大臣とトーマス・オブライエン（Thomas O'Brien）駐日大使との間で「紳士協定」（Gentleman's Agreement）が結ばれることとなった。日本政府は熟練、未熟練に関わらず、労働者への旅券を発行しないこととした。例外として、再渡航するアメリカ移住の労働者、またはすでにアメリカに住んでいる労働者の両親、妻、子どもには旅券の交付ができた[31]。この影響により紳士協定の効力が発しないうちに入国しようとする日本人が 1907 年と 1908 年に増加したが、紳士協定の効力が発した 1909 年には移民数が激減している（表 5）。

表 5　1900 年から 1925 年までの日本からアメリカへの移民数

年度	移民数	年度	移民数
1900	12,626	1913	8,281
1901	4,908	1914	8,929
1902	5,325	1915	8,613
1903	6,990	1916	8,680
1904	7,771	1917	8,991
1905	4,319	1918	10,213
1906	5,178	1919	10,064
1907	9,948	1920	9,432
1908	7,250	1921	7,878
1909	1,593	1922	6,716
1910	1,552	1923	5,809
1911	4,520	1924	5,801
1912	6,114	1925	723

（出典：飯野正子,「米国における排日運動と一九二四年移民法制定過程」, 津田塾大学紀要（10), 1978, p32）

第 2 章 1 節で触れたように、紳士協定は、数年間の労働を目的に渡米していた移民の出稼ぎ的思考を永住土着的思考に変えた [32]。アメリカ在住者の家族の入国は許可されていたため、妻子を残して渡米した者は妻子をアメリカへ呼び、独身者は「写真花嫁」と呼ばれる写真の交換だけで入籍した女性をアメリカへ呼びよせた [33]。1910 年代は写真花嫁の全盛期であり、加えて日系人女性の多くが出産適齢期であったため出生数も増加した。これらの影響で、1910 年以降は紳士協定を締結したにも関わらず日系人人口が増加した。この状況に、一度落ち着きかけていた日本人排斥は再燃した。排日論者は日系人が労働者となって賃金低下に影響すると主張した [34]。この運動が激化したため、農地では日系人を農地から追いだす「外国人土地法」の制定という形がとられた。同法は、アメリカの帰化法（Naturalization Act）に「東洋人は、帰化権を有す」と定められていないことを利用し、「帰化資格のない外国人のみの土地所有を禁止する」とし、実質的に日系人 1 世の土地所有を禁止した法律である [35]。また、日本政府は 1919 年に写真花嫁の渡航を禁止した [36]。

このような社会状況の中で、1924 年、アメリカ連邦議会は紳士協定を一方的に破棄し、日系人移民の全面禁止という移民法（Immigration Act）を制定した [37]。この移民法には、日系人という言葉が使用されていないものの、内容的に日系人を対象としていたため、排日移民法と呼ばれている [38]。この結果は排日論者にとって完全な勝利であり、アメリカによる日系人拒絶の絶頂期に達したといえる。これらの状況の中、1 世は 2 世の将来に望みを託した。

排日移民法が制定されたのち、2 世は日米間の相互理解を深める「懸橋」「楔」となるように育てるべきという考え方が主流となった。この考え方を普及させたのは 1 世の中で広く尊敬されていたとされる安孫子久太郎であり、彼を中心とし 1 世の識者の間に広まっていった[39]。2 世がこの役割を果たすには、日本についての知識を高めることが必要であった。2 世教育のため日本語学校が多数設立された。1923 年時点でカリフォルニア州には日本語学校が 55 校設置されていた。運営組織別にその内訳をみると、28 校が日系人組織によって独立した運営を行っており、残りの 27 校中 10 校が仏教系、6 校がキリスト教系、所属不明なものが 11 校存在した[40]。

そもそも、日本語学校は 1902 年にキリスト教徒であったケイゾウ・サノ夫妻が設立した「日本小学校」が始まりとされている[41]。翌 1903 年には仏教会が「明治小学校」という名前で日本語学校を開校している。明治小学校はサンフランシスコの日本総領事である上野喜三郎や地域の指導者らに支援を受けていた[42]。この当時の日本語学校はカリキュラムや教科書が日本の小学校と同じであり、教育目的も子どもたちをアメリカ国民としてではなく、「日本臣民」として教育することにあった[43]。しかし、1910 年代に入り、第一次世界大戦の影響でアメリカ化運動が盛んになると、アメリカの生活や習慣に適応させるような教育方針へと変化した。今まで利用していた文部省発行の教科書から、新たな教育方針に即した教科書を作成するなどの動きが起こった[44]。さらに、外国語学校規制の動きを受けて、1920 年カリフォルニア州日本人教育会第 9 回総会において、アメリカ人からの非難を避ける目的で日本人教育会を日本語学園協会、日本語学校を日本語学園へと名称が変更された[45]。協会の目的も「本協会に連絡する各学園は米国公立学校の精神に基づき、善良なる市民教育の補助をするにあり」[46]とアメリカへの同化を目的とした学校であることを強調している。

そのほか、様々なコミュニティ活動が 2 世を中心に行われるようになった。彼らの情操教育の一環として野球やバスケットボールの 2 世リーグが組織されるなどした[47]。また、前述の安孫子が発行人である『日米新聞』は 2 世の日本見学旅行を主催し、選抜された日本見学団の団員に対し日本への特別旅行の費用を負担した。この例に倣って、他の日本語新聞や団体も 1925 年以降独自に 2 世の日本見学旅行を主催した。この経験を通し、実際に「日米間の懸橋」として活躍する 2 世も現れた[48]。

このように、1900 年代は出稼ぎ思考が中心だったこともあり、2 世の教育は日本国民となるためのものであったが、アメリカ化運動を契機に教育方針が変化したといえる。2 世が日米間の懸橋となり、アメリカのよき市民となるよう 1 世は教育に力を注いでいたが、2 世に関する問題も発生していた。主に二重国籍と帰米 2 世問題が挙げられる。

まず、二重国籍の問題である。出生地主義の原則に基づいて、アメリカで生れた人は誰

でもアメリカの市民権を取得できる。したがって、2 世はアメリカ市民であった。一方、日本の法律は父系の血統により国籍の取得を決定したため、父親が日本人である全ての 2 世は、自動的に日本国籍が得られることになっていた [49]。しかし、白人間には 2 世が 2 つの国の国籍を所持しているということは不誠実であるという倫理観が存在した [50]。加えて、アメリカ的教育を施すべきであると考えていた 1 世の影響もあり [51]、2 世は二重国籍のうちアメリカを選択した。図 1 はサンフランシスコ領事館内の日本国籍離脱者数の推移である。

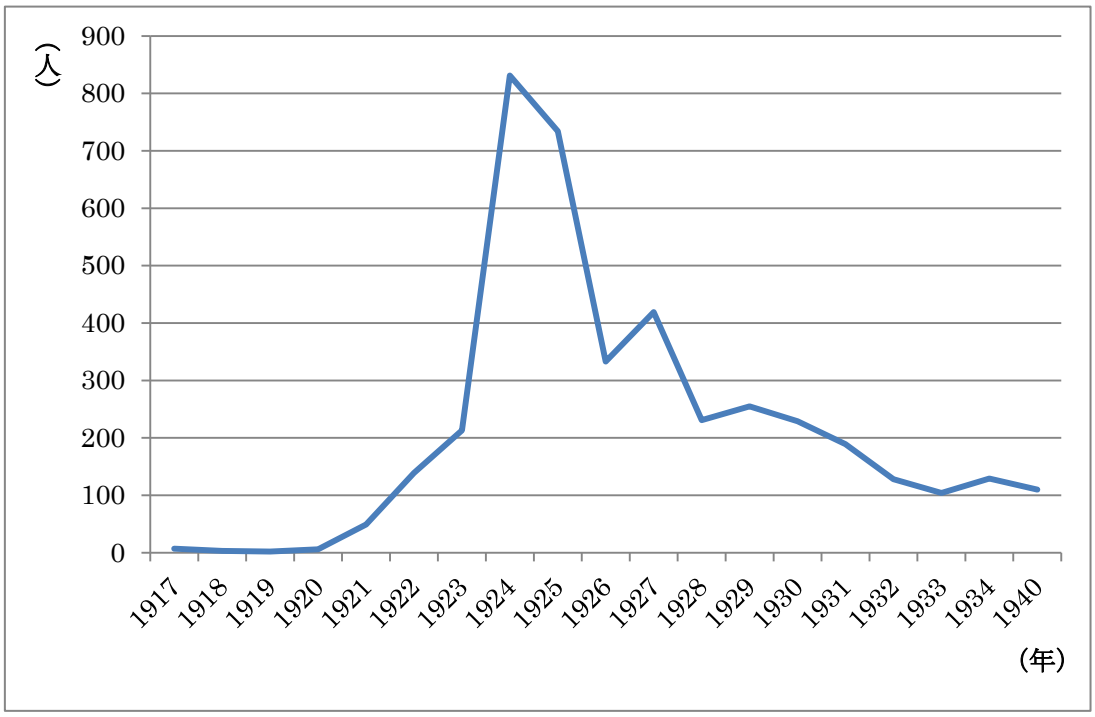


図 1　サンフランシスコ領事館内の日本国籍離脱者数の推移

（出典：岡元彩子, 『アメリカを生き抜いた日本人』, 日本経済新聞社, 1980, p111）

1916 年に、満 17 歳未満の者は、申請手続きで日本国籍を離脱できるよう日本の国籍法が改正された。しかし、17 歳以上は日本での兵役義務を果たした後でなければ日本国籍の放棄申請が許可されなかった。しかし、1924 年には 2 世の要望を受け、出生後領事館に届け出の無いものは日本国籍を有せず、年齢関係なく本人の意思で日本国籍を離脱できることとなった [52]。1924 年と 1925 年の日本国籍離脱者が他の年と比べて多いのはこの法律改正が理由であると考えられる。

その後、2 世は 1929 年にジャパニーズ・アメリカン・シティズンズ・リーグ（Japanese American Citizens League、以下JACLと記す）を設立した。JACLの目的として、市民権の行使、2 世の国籍離脱促進、善良な市民の養成、職業問題解決、日米親善、中国系市民と

の連携をあげていた[53]。これらの目的のもと、日系人 2 世はアメリカ市民としての権利の保護を目指した。

つづいて帰米 2 世問題である。彼らの大多数は幼児の時に日本に帰り、両親の故郷で育った。2 世を渡日させた理由として、両親にアメリカ永住の決心がつかず日本に帰ったか、あるいは日本へ帰国することを予測して子どもを故郷に送ったという 2 点が挙げられる。このような 2 世は日本人として教育されたため、アメリカへ帰った時は「帰米 2 世」となった[54]。

1930 年代に成人した帰米 2 世は満州事変が起きた後、日本での兵役を逃れるため大挙してアメリカへと渡った。幼少期から日本で育った帰米 2 世は日本的であり、英語を話すことが困難であった。そのため、帰米 2 世はアメリカで仲間の 2 世からも疎外され、アメリカ社会全体からも疎外され、社会的に孤立した[55]。

このような状況の中、満州事変を受け日米関係は国際的に悪化し、1941 年以降に起こった日系人の強制収容へと繋がっていく。2 世間での衝突があったものの、アメリカ国籍の選択や、JACL の活動から、アメリカ人としての意識が高かったことがうかがえる。アメリカ人であろうとする 2 世に反するように、1 世が 2 世に対して日本に関する知識を得ることを奨励していたことは注目すべき点であろう。

2.3. 帰化権と同化

これまでみてきた日系人排斥運動や差別法の多くは、外国人土地法にみられるように日系人 1 世が「帰化不能外国人」であるという定義を基に日本人差別を正当化していた。アメリカの法律では、帰化に関して、1874 年に編集された『合衆国改訂法令集（The Revised Statutes of the United States)』の第 30 章「帰化」にて「本章の諸規定は、自由白人の外国人と、アフリカ生まれの外国人、およびアフリカ人を祖先とするものに適用される」[56]と記されているのみであり、東洋人については一切言及がされていない。そのため、日系人は帰化権を否定されていたといえる。

日系人 1 世である小沢孝雄は、1914 年にハワイの連邦地方裁判所へ提出した帰化申請が却下されたことを受け、この状況を改善するため、アメリカに対し裁判を起こした[57]。この判決は 1922 年の連邦最高裁判所によって決着がつけられる。彼は、東洋人は帰化不能であると明言されているわけではないため、帰化権を持つ権利があると主張した。彼はカリフォルニア大学（University of California）で法律を専攻し、家族も含め教会に通い、家庭でも英語を話し、「同化力」が高く、帰化法に記された資格を備えていたと思われた。しかし、アメリカ連邦最高裁判所は「白人及びアフリカ系以外の外国人」に限り帰化権を認めるという人種的な基準に基づいて却下したため、裁判は小沢側の敗訴で終わった[58]。

さらに連邦最高裁判所は 1925 年のトヨタ訴訟に関する判決を下した。これは、1918 年に改正された帰化法の第 4 条 7 項の規定「21 歳以上にして、今時戦争中に、合衆国の陸海軍、海兵隊、沿岸警備隊に服務せしフィリピン生まれの者、及びその他のいかなる外国人も、法定居住期間（5 年）を満たすことなく、帰化の申請をなすことができる」を基に復員日系兵士が帰化権を求めた裁判である。しかし、連邦最高裁判所はフィリピン人以外のアジア人は条文の「いかなる外国人も」には該当しないと狭く解釈し、訴えを退けた [59]。この判決により 1 世の帰化は実質ほぼ不可能となったが、1935 年に連邦議会が「退役外国人兵士帰化法」を制定したことにより、第一次世界大戦に従軍した者に限り日系人にも帰化権が認められている [60]。

このほかにも日系人は外国人土地法における小作権や土地所有権に関する裁判を 30 件余り行っているが、そのほとんど全ての規定が連邦地方裁判所と連邦控訴裁判所を含む連邦下級裁判所で合法と裁定され、日系人側は敗訴している [61]。以上、みてきたように、日系人差別に直面し、帰化権も得ることができなかった。しかし、アメリカに同化できない人種とレッテルを張られながらも、日系人はアメリカへの同化を積極的に行おうとしていた。アメリカに同化するためにどのような取り組みが行われていたのだろうか。

日系人はアメリカへの同化を行うためにアメリカ化運動に同調した。1908 年の紳士協定を受け、永住土着思考を持った日系人は日系人のアメリカ化を目指したのだ。例えば、日系人に対して永住を推奨していた安孫子久太郎は、出稼ぎ的思考がアメリカの習慣やしきたりに無関心でいる原因となっていると考えていた。安孫子はこの無関心さが日系人排斥運動に繋がっていると考え、日系人にアメリカ化を強く奨励していた [62]。特に、第一次世界大戦中にアメリカ化運動が盛り上がりを見せると、その全米的な動きを取り上げ、日系人の側からそれらの動きとの連帯が積極的に説かれるようになった [63]。

日系人自身が自発的に行っていた運動は以下のものにみることができる。まず、写真花嫁に対する教育をあげる。写真花嫁としてアメリカへ移住する女性達は出国前に横浜基督教女子青年会渡航婦人講習所にて、アメリカの生活様式を疑似体験しながら、模範的な在米日本人家庭のあり方について学んだ。講習は日本人とアメリカ人講師の両方により、無料で提供されていた。さらに、渡米に関する情報をまとめた栞も発行されていた。例えば、横浜YWCAは『渡米婦人の心得』という栞を発行しており、旅行の準備から上陸に至る行程を身なりや所持品、行動、態度の面において特に注意を払う点を指導している [64]。

つぎに、アメリカ本土での取り組みを見てみよう。アメリカでは、各地の日本人会が中心となってアメリカ化運動が行われていた。その一例として矯風運動がある。問題とされていた衛生問題、日曜労働、女性労働に関して、日本人会などは「日曜日はやすめ」と題したパンフレットを積極的に配布するなどして日系人へ指導を行った。特に重要視された

のが賭博防止運動であった。当時、中国人によって多くの賭博場が経営されており、そこを多くの日系人が利用していたことが問題となっていた。賭博を防止することにより、同化可能性を強調することができると考えられていた[65]。

一方、アメリカから日本への働きかけは、充分になされていなかったといわれている[66]。その中で、キリスト教プロテスタントの各派は「キリスト教化はアメリカ化」のスローガンのもとに日系人に対する宣教を行った。キリスト教を広めるとともに福祉活動を行っていた。例えば、英語教育、家事労働などの就職斡旋、1920 年代になると共働きの親のための託児活動などを行っていた[67]。特に、サンフランシスコ市では、基督教青年会を設立し、形成発展に尽力したアーネスト・アドルファス・ストージ（Ernest Adolphus Sturge）が熱心に日系人に対してアメリカ化運動を進めていた[68]。

以上のことから、本研究の分析対象時期である 1900 年から 1929 年は、日系人がアメリカに同化するために意識改善、環境改善に加え、2 世教育も含めて積極的に取り組んでいたといえる。それにも関わらず、1 世が帰化不能外国人とされていたのは人種的差別であったといえるだろう。こうした状況の中、少なくとも日系人排斥を払拭し、快適な生活を送るために、日系人指導者層は日系人のアメリカ化を進めようとしていたと考えられる。

---

1 東栄一郎, “第 10 章アメリカ合衆国の日系社会と日系人”,『アメリカ大陸日系人百科事典』, 明石書店, 2002, p370.
2 イチオカ, ユウジ著／富田虎男ほか訳, 『一世：黎明期アメリカ移民の物語』, 刀水書房, 1992, p49.
3 同書, p56
4 東, 前掲書, 2002, p371
5 阪田安雄, 「衝突点へ向かう機動：明治期における日本人のアメリカ出稼１」, 『大阪学院大学国際学論集』3(6), 大阪学院大学, 1992, p148.
6 同上
7 児玉正昭, 「明治期アメリカ合衆国への日本人移民」, 『社會經濟史學』47(4), 社会経済史学会, 1981, p89-94
8 同上
9 飯野正子, 「米国における排日運動と一九二四年移民法制定過程」, 『津田塾大学紀要』(10), 1978, p10
10 田中圭治郎, 『教育における文化的同化』, 本邦書籍, 1986, p5
11 J. F.スタイナー著／森岡清美訳, 『人種接触の社会心理学：日本人移民を巡って』, ハーベスト社, 2006, p110-111
12 ウィルソン, R., ホソカワ, B.著／猿谷要訳,『ジャパニーズ・アメリカン』, 有斐閣, 1982, p127.
13 深豊幸, 「ヴァレンタイン・スチュアート・マクラッチーとカリフォルニア州日本人移民排斥運動：1910 年代後半を中心に」, 『同志社アメリカ研究』 (40), 2004, p74-75.
14 Levine, Geno N., *The Japanese American community*, Praeger, 1981, p18
15 *Ibid*, p29-30
16 山本剛郎, “職業からみた日系人社会”, 『北米日本人基督教運動史』, 同志社大学人文

科学研究所, 1991, p790-791
[17] 同上
[18] 日米編輯局編, 『日米年鑑 11 巻』, 復刻版, 日本図書センター, 2002, p117-142.
[19] マックウィリアムス, ケアリー著／鈴木次郎・小野瀬嘉慈共訳, 『アメリカの人種的偏見：日系米人の悲劇』, 新泉社, 1970, p30
[20] 賀川真理, “第 1 章 20 世紀転換期のサンフランシスコ市政とアイリッシュの進出”, 『サンフランシスコにおける日本人学童隔離問題』, 論創社, 1999, p37
[21] 阪田, 前掲書, 1992, p171
[22] 飯野, 前掲書, 1978, p8
[23] マックウィリアムス, 前掲書, 1970, p 32
[24] 賀川, 前掲書, 1999, p50-51
[25] 飯野, 前掲書, 1978, p9
[26] 賀川, “第２章日本人と公立学校分離教育”, 『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 2005 p69-70
[27] 賀川, 前掲書, 2005 p70
[28] 賀川, 前掲書, 1999, p122-123
[29] 同上, p296-297
[30] 上原要佐, 「日米関係の日系アメリカ人への影響」,『経営情報学部論集』, 9(1), 1996, p24
[31] ウィルソン, 前掲書, p126
[32] 東, 前掲書, p374
[33] ウィルソン, 前掲書, p127
[34] 太田孝子, 「排日運動下におけるシアトル穂高倶楽部（II）:「写真結婚」と「外国人土地法」を中心に」, 『岐阜大学留学生センター紀要 2000』, 2001, p4-5
[35] 蓑原俊洋, “第 1 部 第 1 章 カリフォルニア州の排斥運動”, 『排日移民法と日米関係』, 岩波書店, 2002, p45
[36] 太田, 前掲書, 2001, p4-5
[37] 飯野, 前掲書, 1978, p22
[38] 田中, 前掲書, 1986, p83
[39] イチオカ, ユージ “『第二世問題』1902 年—1941 年”, 『北米日本人基督教運動史』, 同志社大学人文科学研究所, 1991, p750
[40] Asato, Noriko, *Teaching Mikadoism*, University of Hawai'I Press, 2006, p59-61
[41] *Ibid*, p44-45
[42] *Ibid*
[43] 田中, 前掲書, 1986, p83
[44] Asato, *op. cit*, 2006, p48-49,58-59
[45] 田中, 前掲書, 1986, p83
[46] 新日米新聞社編, 『米国日系人百年史』, 新日米新聞社, 1961, p119
[47] 東, 前掲書, 2002, p374
[48] イチオカ, 前掲書, 1991, p752-753
[49] 同書, p734-735
[50] 岡元彩子, 『アメリカを生き抜いた日本人』, 日本経済新聞社, 1980, p111
[51] イチオカ, 前掲書, 1991, p741
[52] 岡元, 前掲書, 1980, p112
[53] 同上, p112-113
[54] イチオカ, 前掲書, 1991, p760
[55]岡元, 前掲書, 1980, p114-115
[56] *The Revised Statutes of the United States second edition*, fovernment printing office,

1878, p380,
http://memory.loc.gov/cgi-bin/ampage?collId=llsl&fileName=018/llsl018.db&recNum=1
(accessed 2014-1-16)

[57] 竹沢泰子, “第四部 国際環境と反響：アジア人移民の帰化権問題と「人権」”, 『日米危機の起源と排日移民法』, 論創社, 1997, p232-235.

[58] 同上

[59] 大谷泰夫, 『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』, 世界人権問題叢書, 1997, p17

[60] 同上

[61] 同書, p19

[62] イチオカ, ユージ, “安孫子久太郎”, 『米国初期の日本語新聞』, 勁草書房, 1986, p203-213

[63] 広部泉, “3 章　アメリカニゼーションと「米化運動」”, 『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』, アメリカ太平洋研究叢書, 東京大学出版, 2003, p73

[64] 田中景, 「20 世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業」, 『社会科学』(68), 2002, p311-316

[65] 広部, 前掲書, 2003, p75-80

[66] 同書, p75

[67] Spickard, Paul, *Japanese Americans：the formation and transformations of an ethnic group*, Rutgers University, 2009, p59-60

[68] 吉田亮, 『アメリカ日本人移民とキリスト教社会』, 日本図書センター, 1995, p22

3.　公共図書館におけるアメリカ化運動と移民サービス

日系人の公共図書館意識を検討するにあたり、当時のアメリカ全土の公共図書館における移民サービスに関する取り組みについて*Library Journal*を用いて分析する。*Library Journal*とは1876年に設立されたアメリカ図書館協会（American Library Association）の正式な機関誌であり、同年に月刊誌として*American Library Journal*という題で創刊された[1]。1877年には*Library Journal*と改名し、現在も刊行され続けている。1920年からは隔週で発行されている。同誌は図書館と書誌的事項の領域において意見を交換する、図書館関係者のコミュニケーションツールとしての機能を持っている[2]。したがって、*Library Journal*は、アメリカ公共図書館が全国的に組織化された当初より、アメリカ図書館界で着目すべき課題や議論を取り上げてきたといえる。

ついては、まず、公共図書館の移民サービスとアメリカ化運動に関する先行研究を概観した上で、*Library Journal*における移民サービスの傾向について検討する。

3.1.　移民サービスとアメリカ化運動の関係

3.1.1.　アメリカ化運動

アメリカ化とは、大きく分けて「内的」と「外的」の2つの意味合いを持っている。「内的アメリカ化」とは、「同化主義」とも表現され、19世紀末から20世紀初頭にかけて高揚した新移民の国民化を指す[3]。これに対し、「外的アメリカ化」は近年の外国におけるアメリカ化、民主主義の導入、大衆消費社会への変化、アメリカの大衆文化の浸透などの減少をさす[4]。本研究では前者の「内的アメリカ化」をアメリカ化として議論する。

また、アメリカ化運動とは、上記の「内的アメリカ化」を実現するために行われた運動である。アメリカ化運動をアメリカ全土に普及させるきっかけとなった「北アメリカ市民リーグ」の中心的指導者であったフランセス・ケラー（Frances A. Kellor）は、社会秩序再編のために新移民が「アメリカの理念を日常生活の中で理解できる」[5]ようにすることがアメリカ化運動であるとしている。ただし、アメリカ化運動は統一された1つの運動ではなく、各地で同時期に「アメリカ化」を標榜して行われた運動の集合体であった[6]。

アメリカ化運動が行われたのは20世紀始めのほぼ20年間であり[7]、中でも1910年代半ばから1920年代初頭にかけて最も活発であった。一説によると1921年前後に、30以上の州と数百の市がアメリカ化の方策を導入し、最高潮期であったとされている[8]。その理由についてはいくつか説明がなされている。まず、19世紀末から20世紀初頭にかけて新移民と呼ばれるイタリア、ポーランド、ギリシャ、ロシア、そして西海岸ではアジアから多くの移民が流入したことである[9]。この移民は北西欧からの「旧移民」と違い、文化や風習が異なる移民であった[10]。つぎに、ヨーロッパにおける第一次世界大戦の勃発は、交戦国の

双方側の出身者が居住するアメリカ社会において、アメリカに対する忠誠を浸透させるためにアメリカ化が強く唱えられる一因となった。さらに、ロシア革命勃発の影響で、社会主義思想の高まり、それに危機感を抱いたWASPがアメリカ化運動を推進したのである[11]。

アメリカ化運動は、以上のような理由で移民の同化を目的として行われてきた。詳細に見ていくと、アメリカ化運動の性質は第一次世界大戦をはさむ時期により目的が変化している。表 6 はアメリカ化運動の変遷を表したものである。

表 6　アメリカ化運動の変遷

時期	組織	対象	内容
第一次世界大戦前	自発的組織	移民	労働環境の整備：労働に対する公平な賃金、余暇の確保 コミュニティの改善：教育、余暇の改善、平等
第一次世界大戦中	連邦から地域までの様々なれビルの行政	全アメリカ人	節約、健康、衛生管理、共同体の維持。 教育活動として民主主義、義務と奉仕を説く
第一次世界大戦後	自発的組織＋行政	アメリカ化可能と判断された人	「国を守るための保険」、英語教育の強制、外国語学校への規制

（松本悠子, 「アメリカ人であること・アメリカ人にすること」, 『思想』(884), 岩波書店, 1998, p52-78 より筆者作成）

各時期によってアメリカ化運動の中心となった組織やアメリカ化運動の対象者も変化していることがわかる。注目すべき点は「対象」と「内容」から読み取れるアメリカ化運動の特質である。第一次世界大戦前はアメリカ化とは必ずしも同化、強制を意味するものではなかった。移民の多くは労働者であったため、労働環境の整備が重要な課題であった[12]。戦時中のアメリカ化運動は、民主主義やアメリカの理念が重要視され、教育活動として行われていた。さらに、移民の文化を全て否定するものでは必ずしもなかったことが特徴としてあげられる[13]。ところが、大戦後になると、アメリカ化は移民を助けるものではなく、アメリカを守るためのものに変質した。英語教育の強制、外国語学校への規制が強化され、アメリカ化運動はアメリカ化の強制という性格に変化した[14]。対象者もアメリカ化可能と判断された人に限られるようになる。それは、1924 年に改正された移民法でアメリカ化を達成することが困難な人々の入国が禁止されたことからもわかる。

このように、アメリカ化運動は移民の救済から教育活動、同化の強制と推移したのである。以上に見てきた動きの中で、アメリカ化運動に見られる教育的側面に着目したのが公共図書館であった。

3.1.2. 移民サービスとアメリカ化運動

公共図書館がアメリカ化運動を意識していたことが読み取れる論文は、移民に対し母語で書かれた図書の提供の必要性を初めて明言した 1894 年の*Library Journal*の「アメリカ図書館の外国語図書」（“Foreign book in American library”）が最も早いとされている[15]。この論稿で、ニューヨーク州レノックス図書館（Lenox Library）の図書館員であるアクセル・ジョセフソン（Aksel G. S. Josephson）は、移民のアメリカ化を進め、よい市民になってもらうために、移民の母語で書かれた図書（以下、母語図書と記す）を図書館は提供していくべきであると指摘している。さらに、移民は母語図書を読むために図書館を訪れるようになり、その後アメリカに関する図書も読むようになるだろうと主張している。

ジョセフソンの主張は他の図書館員からも支持を受け、1898 年には「外国人住民の利益のために外国文学を図書館は買わないのか？」（”Shall public libraries buy foreign literature for the benefit of the foreign population?”）にて、ミネソタ州ミネアポリス公共図書館（Minneapolis Public Library）のグレーシア・カントリーマン（Gratia Countryman）が外国語図書の必要性を述べた[16]。彼女は、ミネアポリス図書館の外国語図書のコレクション状況と、移民サービスの状況に触れ、ジョセフソンが述べたように外国語図書のコレクションはアメリカ化を妨げるものではなく、助けるものであると主張している。

上記 2 つの論文から、移民サービスの導入が検討されはじめた 1890 年代後半より、公共図書館はアメリカ化を意識して移民サービスを行っていたことがわかる。ただし、公共図書館は、母語図書の提供が移民自身の文化の享受や移民に対する娯楽の提供を目的としていると考えていなかった。アメリカに関する図書の提供を通し、公共図書館もアメリカ化運動の一部を担うことを目的としていたといえる。

これらの論文が*Library Journal*に掲載されて以降、1900 年代に母語図書の提供に関する議論が活発になり、移民に対する母語図書の提供はアメリカ化を視野に入れた移民サービスの 1 つとして定着していった。その後、1910 年代から 1920 年代を中心に様々な移民サービスが発展していく。1910 年代、1920 年代の移民サービスに関して図書館情報学研究者の小林卓は「今世紀初頭のアメリカにおける移民へのサービス」で次の 5 つを挙げている[17]。

①移民の母語によるアメリカの歴史、政治、市民生活に関する図書の提供

②市民権取得目的の学習資料、学習の場の提供

③英語学習のための資料提供（母語による英語学習書や、英語によって書かれた「初

級本」等）

④英語教室の図書館における開催

⑤移民の母語によって書かれた読み物や文学書の提供

当時の移民に対する図書館サービスは、上記 5 点を中心に各図書館で行われていた。さらに、1917 年にはアメリカ図書館協会が外国出身者サービス委員会（Committee on Work with the Foreign Born）を設立した。同委員会の活動は、各地域の図書館ならびに図書館以外の機関との連携、調整、協力と各図書館で図書選択を行うためのツールとなる各国語の図書リストの作成であった [18]。これらの取り組みにアメリカ化運動がどのように影響していたのだろうか。

公共図書館のアメリカ化運動について、ハーネス・マクマレン（Haynes McMullen）は、公共図書館は他の自発的組織や社会福祉機関と同様に移民に対しアメリカ化運動を行っていたが、「アメリカ化」という言葉の意味が 1915 年を境に変化したと指摘している [19]。マクマレンは、英語教育と市民権獲得教育を通し移民のアメリカへの忠誠心を確かなものにすることが重要であり、公共図書館はそれを行うにふさわしい機関であったと述べている。1910 年代の図書館員にこのような考え方があったため、成人移民に対して簡単な英語で書かれた図書の提供が強調されていたとマクマレンは考えていた [20]。

つづいて、プラマー・オルストン・ジョーンズ（Plummer Alston Jones）は第一次世界大戦後、母語か簡単な英語かに関わらず、アメリカの歴史、文化、法律、工業、法律、農業、習慣に関する図書の需要が高まっていたことを指摘している [21]。さらに、1920 年代のアメリカ化運動は成人教育という側面が強まり、公共図書館は移民や民族に関係なくアメリカ的な理念を教育することを目指した [22]。このように、年代によってアメリカ化運動の目的は変化していた。

さらに、彼は公共図書館のアメリカ化運動が他機関と協力して行われていたことを事例を挙げて言及している。例えば、カリフォルニア州のロサンゼルス公共図書館（Los Angels Public Library）は、1897 年からロサンゼルスセツルメント協会（Los Angeles Settlements Association）に本の支給をはじめている [23]。ニューヨーク公共図書館（New York Public Library）は 1915 年に地元の社会福祉局と協力し、移民向けに公衆衛生についての講義を行った。ニューヨーク州のバッファロー公共図書館（Buffalo Public Library）は 1917 年に帰化管理局（Naturalization Bureau）とポーランド市民保護協会（Polish Citizen Protective Association）とともに、英語習得支援を行った [24]。アメリカ化運動はアメリカ公共図書館でのみ行われていたのではなく、他機関と協力して行っていた。

加えて、外国出身者サービス委員会の設立目的も、移民に対してアメリカの理念、習慣、英語の教育と市民権獲得のための支援をあげている [25]。移民出身者サービス委員会の活動

内容は、各図書館の問題点を文書やALA大会のラウンドテーブルで解決すること、図書リストの作成、移民サービスに関する論文の発表であった[26]。

一方、ステファン・スターン（Stephen Stern）は公共図書館でアメリカ化運動を行う際、移民の文化保持に関して当時から懸念されていたことを示している[27]。1910年代の図書館員は移民が芸術・文化の面でアメリカに貢献していることや[28]、移民の教養は母国の豊かな伝統によって身に付けられたものであることを指摘している[29]。これを受け、スターンは図書館員の間でも移民のアメリカ化を支援すると同時に、移民の文化を維持する必要性を感じていたと考えている[30]。

以上のことから、分析対象期間の移民サービスについて2点を特徴としてあげることができる。1点目は、移民サービスが導入されはじめた当初から図書館員はアメリカ化を意識していたということである。母語図書の提供を行う理由にも現れているように、母語図書の提供は移民に対して教育を行うためのきっかけであると図書館員は考えていたといえる。しかし、実態は移民にとっては娯楽としての図書だったのではではないだろうか。アメリカ公共図書館が出現した当初、大衆文学の提供に関する議論が行われた。この時期に主流を占めた主張は、利用者が学習のための図書を読むきっかけとして大衆文学書を収集すべきである、との考えであった[31]。しかし、実際には学習のための図書を手に取るようになる人は限られており、大衆文学が多く利用されていたという統計から、大部分の利用者は大衆文学書を楽しむために公共図書館を訪れていたといわれている[32]。移民に対しても同様の実態が起きていた可能性は高い。

2点目は、図書館の移民サービスもアメリカ全土で起こっていたアメリカ化運動の影響を受けていたという点である。第一次世界大戦後に、英語教育の強制、外国語学校への規制など、アメリカ化の強制という色合いが濃くなると、公共図書館においても英語教育に重点が置かれるなど、社会のアメリカ化運動に大きく影響を受けている側面が見受けられる。しかし、1920年の*Library Journal*において、強制的なアメリカ化はアメリカ化ではないとする論文が掲載された。例えば、新聞や自由な演説の抑圧、英語教育やアメリカ的人間観などの強制、アメリカの視点のみの歴史教育などはアメリカ化ではないとしている[33]。外国出身者サービス委員会の委員長であったジョン・フォスター・カー（John Foster Carr）は、母語図書はアメリカ化を阻害するという意見に対し、母語図書を読むことこそアメリカ化の一歩として重要であると述べている。カーは公共図書館で母語図書を利用する移民はいずれアメリカの歴史や市民権などについての図書を読むようになると考えていた[34]。このことから、強制的なアメリカ化運動に対して公共図書館は注意を促していたことがわかる。つまり、公共図書館は、当時社会で議論されていたアメリカ化運動に影響を受けつつも、一部には強制的な移民のアメリカ化には批判的な者がいたといえるだろう。

3.2. *Library Journal* にみる移民サービスとアメリカ化運動

3.2.1. 収集・分析方法

Library Journal に掲載された記事・論文の中から、移民サービスに関して議論している記事を 1900 年から 1929 年まで調査した。調査対象は *Library Journal* の 25 巻 1 号（1900 年 1 月）から 54 巻 24 号（1929 年 12 月）までの計 468 冊である。

抽出方法は以下の通りである。⑴インデックスで、1-①「外国人サービス」（“foreign service”）、1-②「アメリカ化」（“Americanization”）、1-③「移民サービス」（“immigrant service”）、これら 3 つのキーワードを含む記事・論文を収集する。⑵各号の目次から、1-①、1-②、1-③に加えて、2-①各移民グループに対して言及している記事・論文、2-②各地域の図書館状況が記述されている記事・論文、2-③図書館の成人教育（”adult education”）、拡張サービス（”extension service”）に関する記事・論文を収集する。インデックスと目次を両方用いるのは 2 重チェックを行い、見落としを防ぐためである。⑶記事収集後は内容を検討し、移民サービスに関する内容のもののみを最終的なデータとして抽出する。

分析方法は以下の通りである。記事ごとに「地域」「移民グループ」「サービス内容」を明らかにし、それを量的に分析した。「サービス内容」は、各図書館が実際に移民に対して行っている図書館サービスのことであり、先行研究をもとにカテゴリ化している。

第 3 章 1 節でも触れたように、小林は、「①移民の母語によるアメリカの歴史、政治、市民生活に関する図書の提供、②市民権取得試験のための学習資料、学習の場の提供、③英語学習のための資料提供（母語による英語学習書や、英語によって書かれた「初級本」等）、④英語教室の図書館における開催」[35]を移民サービスとして挙げている。これらはアメリカ化に焦点を置くサービスであるとしている。さらに小林は「⑤移民の母語によって書かれた読み物や文学書の提供」[36]もアメリカ化の枠組みに位置づけられるとしている。その理由として、母語図書は図書館利用の習慣がない移民を公共図書館に通わせ、英語の本を読むきっかけとしての役割を果たすためと述べている [37]。しかし、この理由を鑑みると、実際には娯楽として機能していた可能性が高い。そのため、本研究ではアメリカ化のためのサービスとそれ以外の移民サービスの中間に位置すると考える。

つづいて、マクマレンは公共図書館の移民サービスの中でも、英語教育を目的とした簡単な英語で書かれた図書の提供サービスや市民権獲得を目的としたアメリカに関する情報提供サービスをアメリカ化運動の一環であるとしている [38]。

以上を踏まえて、移民サービス内容を表 7 のように分類した。

表 7　移民サービス内容分類表

アメリカ化運動	その他
・英語学習資料提供 ・英語教室 ・母語アメリカ情報提供 ・英語アメリカ情報提供 ・市民権獲得支援	・図書リスト ・母語図書提供 ・展示 ・その他

（筆者作成）

小林が挙げた移民サービスを基礎に、明らかにアメリカ化を目的として行われた英語学習資料提供、英語教室、母語アメリカ情報提供、英語アメリカ情報提供、市民権獲得支援を「アメリカ化運動」、娯楽目的かアメリカ化目的か判別がつかないものを含めた、図書リスト、母語図書提供、展示、その他を「その他」と分類する。

3.2.2.　結果・分析

はじめに、1900 年から 1929 年までの 30 年間の移民サービスに関する記事の推移をみる。

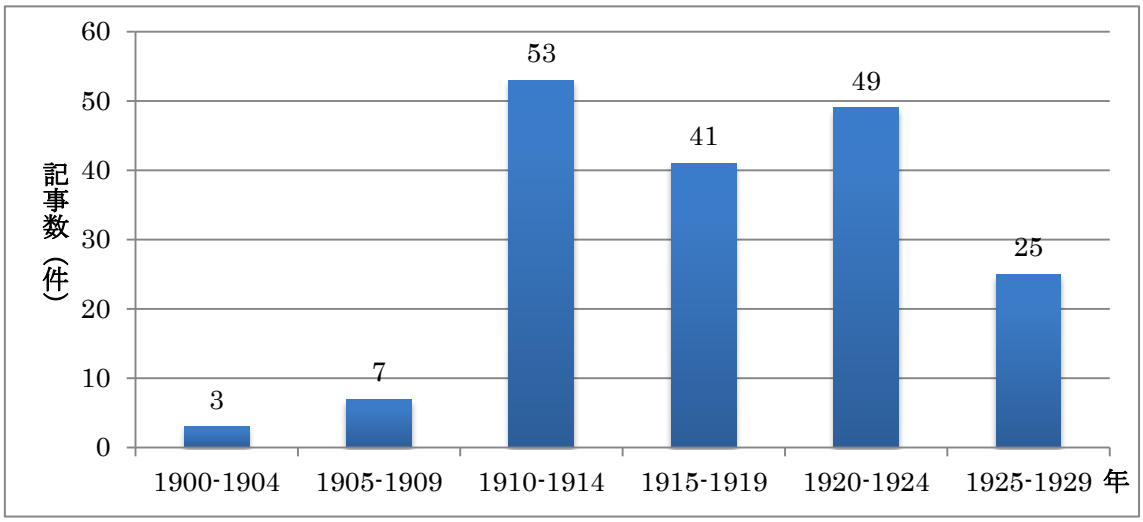


図 2　*Library Journal* に掲載された移民サービスに関する記事数（1900 年-1929 年）

（筆者作成）

図 2 より、1910 年前半に急激に移民サービスに関する記事が増加していることがわかる。1910 年代後半には記事数が減少するものの、1 つの記事中に様々な地域の移民サービスの

実戦例が報告されていた。1920 年代前半に再び記事数が増加するが、その理由として 1920 年に「アメリカ化運動」の特集が組まれ、多くの記事が掲載されたためである。しかし、1920 年後半には記事数が 25 件にまで減少している。アメリカ化運動が最も注目されていた時期が 1910 年代半ばから 1920 年代初頭であるため、公共図書館の移民サービスの取り組みとアメリカ全土で行われていたアメリカ化運動の盛り上がりの期間は一致している。つまり、1910 年代前半で移民サービスに関する記事が増加した理由として、アメリカ化運動の盛り上がりを挙げることができるだろう。

さらに、移民人口にも注目したい。図 3 は 1890 年から 1930 年までのアメリカに居住していた外国生まれの人口数の推移である。

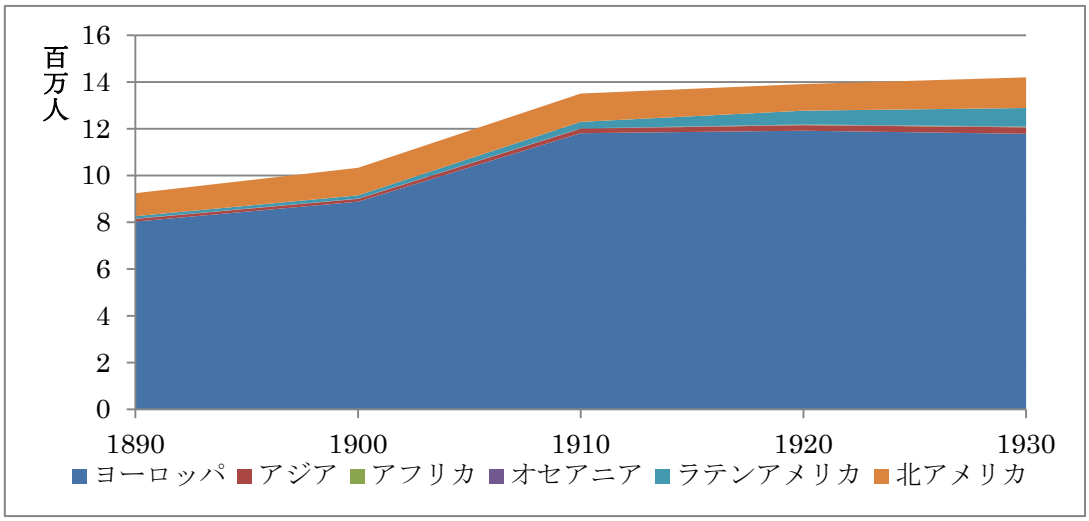


図 3　外国生まれの者の居住人口数推移（1890 年-1930 年）

（U.S. Census Bureau, “1.Nativity of the Population and Place of Birth of the Native Population: 1850 to 2000”, *Historical census statistics on the foreign-born population of the United States: 1850-2000,*より筆者作成）

1900 年から 1910 年にかけて外国生まれの者の居住人口が増加していることがわかる。移民の増加を受け、公共図書館が移民サービスの必要性を認識した結果が記事数に現れたと考えられる。1920 年代に、記事数が減少しつつも一定数取り上げられていた理由は、図 3 からもわかるように移民がアメリカに定着したからだろう。1890 年と 1920 年を比較すると、アメリカに居住していた外国生まれの者は約 1.7 倍に増加している。公共図書館は地域住民へ向けたサービスを中心に行っていたため [39]、1900 年代より 1920 年に*Library Journal*の記事数が多いのは移民人口が関係しているといえる。1920 年代の移民サービスに関する記事の減少として次のことが考えられる。成人サービスや拡張サービスが注目さ

れはじめ、アメリカ化に関する議論が移民に限定したものではなくなった[40]。そのため、記事内で移民に対する言及が減少したと考えられる。

つづいて、州別に記事数を見ていく。論文末の付録 1 は 1900 年から 1929 年の記事中で移民サービスの事例が取り上げられた地域を模様分けしたものである。さらに、表 8 はその中で上位の州を抜粋したものである。論文末の付録 2 は 1920 年の外国出身者の全体数を 100%とした際の外国人出身者の分布割合である。

表 8　*Library Journal* 掲載の州別移民サービスに関する記事数（1900 年-1929 年）と外国出身者の分布（1920 年）（抜粋）

州名	1900 年代	1910 年代	1920 年代	合計	外国出身者分布(%)
ニューヨーク	7	23	6	29	20.3
マサチューセッツ	0	15	7	22	7.8
カリフォルニア	0	6	3	9	5.4
ミズーリ	0	5	0	5	1.3
インディアナ	0	4	1	5	1.1
ミネソタ	0	3	2	5	3.5
オハイオ	0	2	3	5	4.9
イリノイ	0	4	0	4	8.7
ニュージャージー	0	3	1	4	5.3

(筆者作成)

付録 1 と表 8 から、まず、移民サービスに関する記事には、北東部からの報告が多いことがわかる。中でもニューヨーク州は、移民サービスの議論が現れはじめた 1900 年の段階から報告されている州である。次いでマサチューセッツ州が続く。これら上位 2 州とは大きな差があるが 3 番目に西海岸のカリフォルニア州があり、同州は西海岸の中で唯一複数回移民サービスの事例を報告している州でもある。さらに、付録 2 からもわかるように、西海岸の中で 5.4%と最も割合が大きい。つまり、カリフォルニア州にアジア系移民を始めとして移民が多く移住していたため、複数回にわたって移民サービスの事例が報告されていたと考えられる。他にも、外国人出身者の分布割合が大きい州ほど移民サービスの事例が報告されている。特に移民サービスに関する記事数が 29 件と最も多いニューヨーク州は、外国人出身者の分布割合も最も多く 20%であった。反対に、分布割合が 1%未満の州は移民

サービスに関する記事がほとんど報告されていない。このことから、移民サービスの実施には各地域によって差があり、移民の多い地域において同サービスが発達していたといえる。また、ニューヨーク州とマサチューセッツ州が他の州より事例数が多い理由として、ニューヨーク公共図書館やボストン公共図書館など、図書館界をリードする立場である図書館があったことも考えられる。

さらに、移民グループ別に記事数を見ていく。*Library Journal* では各記事とも移民グループを明確に定義せず、「言語別」「出身国別」など統一性がなく用いられている。一方、アメリカ図書館協会の委員会である外国人出身者サービス委員会では「言語別」に移民グループを取り扱っている。そのため、本研究では移民グループを言語別の集団として以下分析する。

まず図 4 は、1900 年から 1929 年までに移民サービスの事例として取り上げられた移民グループごとの記事数の割合である。*Library Journal* で報告されていた移民グループは 50 以上に上るため、先行研究で多く言及されているグループ、記事数が多いグループ、アジア系を抜粋し、その他は「その他」としてまとめた。1 つの記事に複数事例が取り上げられているものは各移民グループでカウントしているため、記事が重複しているものもある。延べ数は 384 件であった。

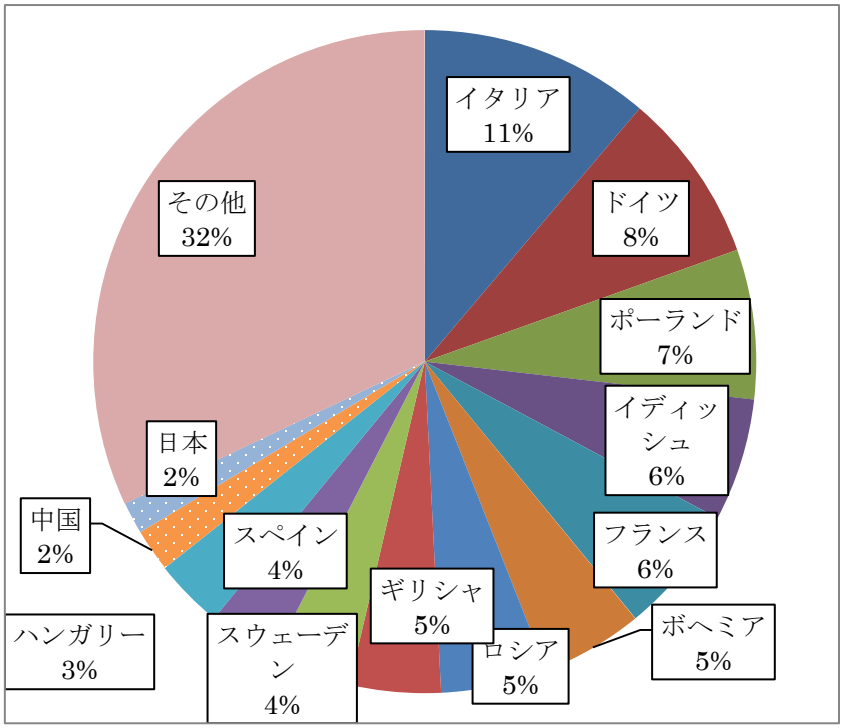


図 4　*Library Journal* に掲載された移民グループ別記事数の割合（1900 年-1929 年）

（n=384）（筆者作成）

図 4 から、ヨーロッパ系移民に関する移民サービスの事例報告が多いことがわかる。その他に含まれるヨーロッパ系移民も含めて収集記事の約 92%がヨーロッパ系移民に関する移民サービスの事例報告である。その中でも新移民として分類されるイタリア系移民やポーランド系移民、第一次世界大戦で敵国であったドイツ系移民に関する記事が多いことから、アメリカで排他的傾向にあった移民グループもサービス対象として認識されていたことがわかる。一方アジア系移民は中国系と日系を含めても記事数の割合が 4%と少ない。日系は 2%（6 件）で、うち 4 件がカリフォルニア州の移民サービス事例だった。日系人に対する図書館サービスは特定の地域で行われていることがわかる。

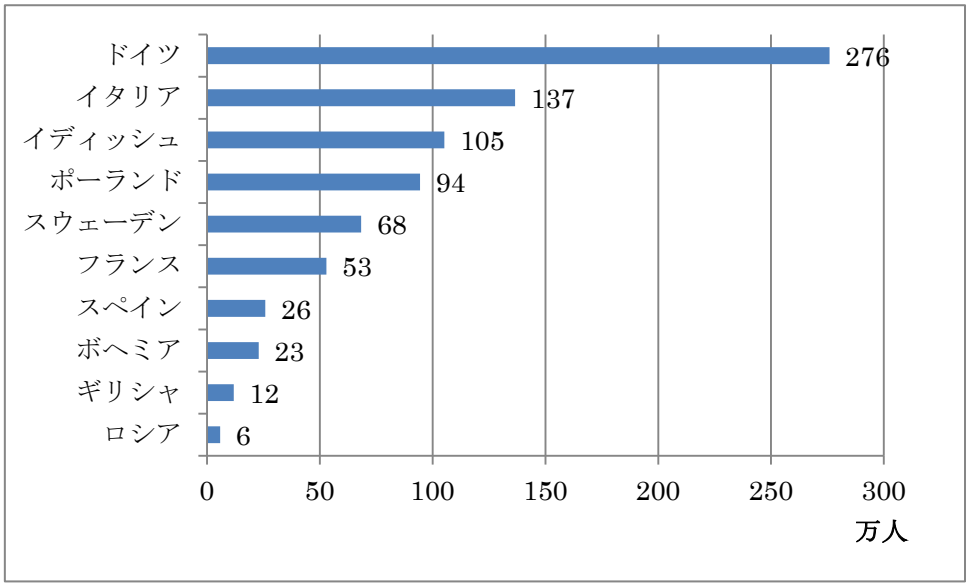


図 5　外国生まれの者の母語別人口数（1910 年）

（ U.S. Census Bureau, “Statistical abstract of the United States”, http://www2.census.gov/prod2/statcomp/documents/1921-02.pdf, (Accessed 2014-2-13) より筆者作成）

つづいて、図 5 は 1920 年のセンサスに掲載された外国生まれの者の母語別人口数である。外国生まれの者の国別人口数であると、図 4 で取り上げた移民グループの中で 1920 年のセンサスに掲載されている移民グループを抜粋している。図 4 と図 5 と比較すると、基本的には人口の多い移民グループに移民サービスが行われていたことがわかる。つづいて、日系人とロシア系を比較する。1920 年当時アメリカに移住していた日本生まれの日系人は 8 万 1,502 人であったのに対し、ロシア系は 5 万 8 千人と日系人より少ない人口数であった。しかし、図 4 では日本に関する記事 2%（6 件）、ロシア系に関する記事 5%（20 件）と、取り上げられている記事の割合はロシア系の方が大きい。記事数で比較しても、

ロシア系は日系人の 3 倍以上の記事が掲載されている。輸送費用や言語の点を鑑みると、両者ともに母語図書の提供や図書館サービスが困難であったことが予想できる。日系人の方が人口数が多いにも関わらず、記事数が少なかった原因は、日系人が帰化不能外国人だったことが影響していると推測できる。つまり、アジア系の移民サービスの事例報告が少ない原因として、輸送費用と言語の他に、ヨーロッパ系移民と異なり、中国系、日系ともに帰化不能外国人であったということが考えられる。

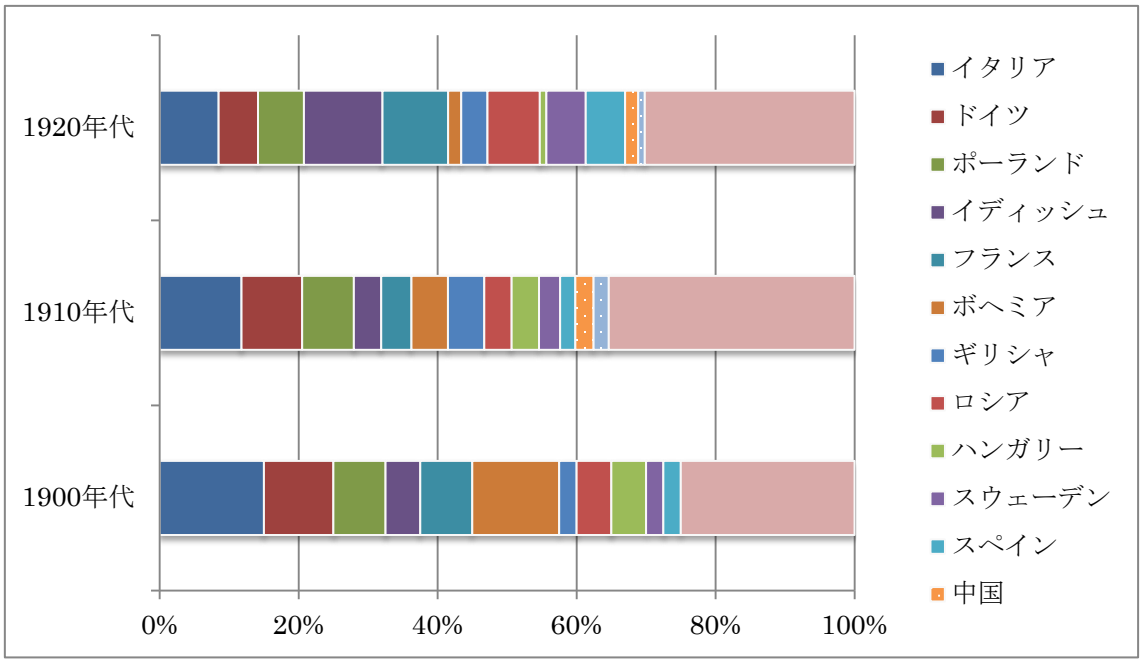


図 6　*Library Journal* に掲載された移民グループ別記事数の比較（1900 年-1929 年）

(筆者作成)

図 6 は 10 年ごとの移民グループ別にまとめた記事数の割合である。1900 年代はヨーロッパ系、特にイタリア系とボヘミア系 [41]移民に関する割合がそれぞれ 15%（6 件）と 12%（5 件）と高い。これは、1900 年代にイタリア系、ボヘミア系移民が増加したことと、当時ボヘミア系が多く流入していたニューヨーク公共図書館が主に事例を報告していたことが理由として考えられる。1880 年から大量流入しはじめたイタリア系は、外国生まれの者以外も含めると 1900 年代にはアメリカ全土で 200 万人以上になっていた [42]。

しかし、1910 年代は代表的な移民グループ以外の記事も増加しており、1920 年代になると、それまで割合が小さかったイディッシュやロシア、スペイン系移民グループを取り上げるようになった。1910 年代には様々な移民グループについて検討されており、1920 年代になると、1900 年とは別の移民グループが注目されていたのだといえる。しかし、注意し

なければならないのは、アジア系の移民は 30 年間通して他の移民グループと比べ記事数が少ないという点だ。主流ではなかった移民グループに対する図書館サービスの提供について決して活発な議論はなされてこなかったといえる。もちろんアジア系移民に対して移民サービスを行っていないわけではないが、移民サービスに関しても白人中心であったと考えられる。

最後に、移民サービスの内容について見ていく。図 7 は 1900 年から 1929 年までの移民サービスの内容を 5 年ごとにまとめた記事数を示した。前述した移民サービス内容分類表に基づくと、英語学習資料提供、英語教室、母語アメリカ情報提供、英語アメリカ情報提供、市民権獲得支援が「アメリカ化運動」（ドット模様部分）、図書リスト、母語図書提供、展示、その他が「その他」（無地部分）に分類される。

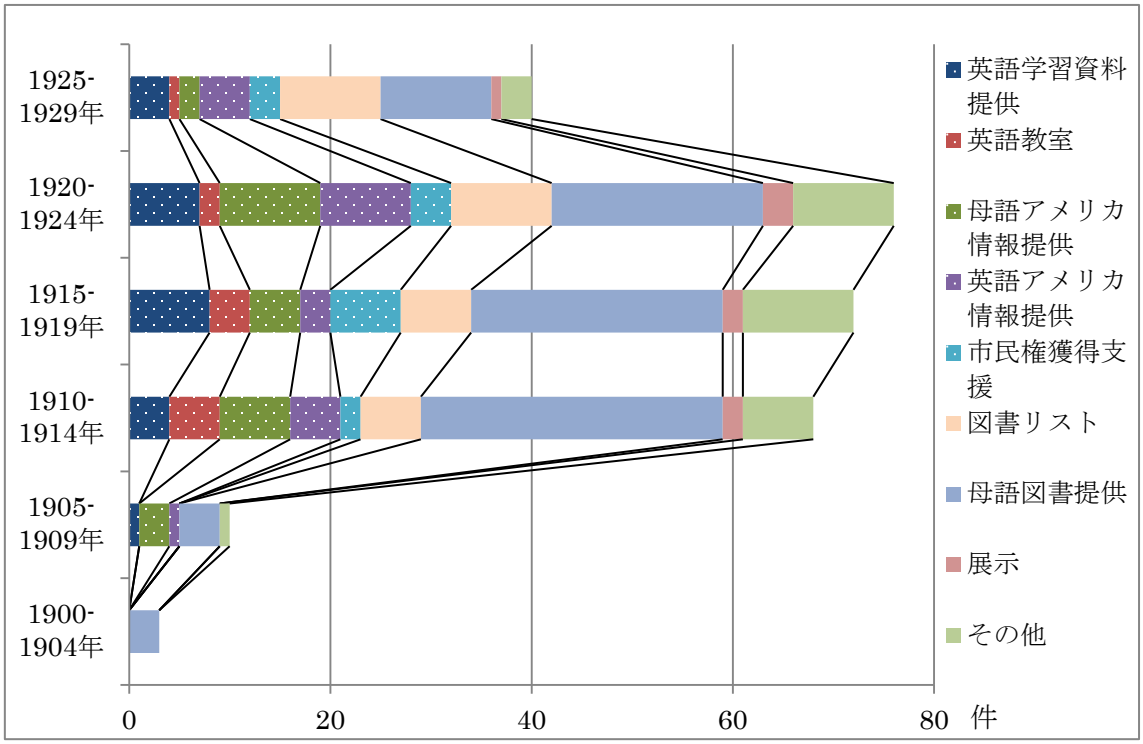


図 7　*Library Journal* 掲載のサービス内容別記事数（1900 年-1929 年）

（筆者作成）

まず注目すべき点としては、母語図書の提供に関する記事である。1900-1904 年から唯一議論されている移民サービスであり、1900-1904 年 3 件、1905-1909 年 4 件、1910-1914 年 30 件、1915-1919 年 25 件、1920-1924 年 21 件、1925-1929 年 11 件と各時期で最も多い。つまり、30 年間を通じて母語図書の提供が移民サービスの中で最も議論されていたといえる。コレクション構築は公共図書館の最も基本的な機能であること、さらに移民サー

ビスの中でも導入しやすいという理由から移民サービスの１つとして奨励しやすく、事例も多くあったのだと考えられる。「その他」（無地部分）の中で唯一図書リストに関する議論が 1910-1914 年から増加を続けている。その理由は、外国出身者サービス委員会の活動の 1 つとして、移民に向けた図書コレクションを構築する際の目安となるように各言語に対する図書リストを作成、*Library Journal* で発表するという活動をおこなっていたからであろう。

つぎに、「アメリカ化運動」（ドット模様部分）に焦点を当てる。図 7 から 1910-1914 年 23 件、1915-1919 年 27 件、1920-1924 年 32 件と、1910 年代前半から 1920 年代前半にかけてアメリカ化運動に関する移民サービスの記事（英語学習資料提供、英語教室、母語アメリカ情報提供、英語アメリカ情報提供）が徐々に増加している。この傾向は、アメリカ全土で行われていたアメリカ化運動の動向と一致している。つまり、社会の風潮と同様に公共図書館でもアメリカ化運動に関する議論が盛り上がっていたといえる。「アメリカ化運動」に関する記事の中で特に英語・母語に関わらずアメリカ情報の提供に関する主張は 1900 年代から現れており、各時期においても一定の件数が報告されている。「アメリカ化運動」の中でも奨励されていたサービスであったと考えられる。

さらに、英語学習資料提供と英語教室、市民権獲得支援に着目する。1900 年代より移民サービスに関する記事の中に英語学習資料提供が含まれていた。1910-1914 年には 4 件に増加し、英語教室に関する記事も現れる。資料提供は公共図書館の役割として明確であるため、英語学習資料提供は、増加した移民に対して学習資料提供の役割に注目した結果であるといえる。また、アメリカ公共図書館が設立された当初から、公共図書館は教育機関の 1 つであると考えられていた [43]。そのため、英語教室に関する議論が出現したと考えられる。しかし、1910-1914 年の英語学習資料の提供に関する記事数が 4 件、英語教室に関する議論が 5 件とほぼ同数であるのに対して、1920-1924 年には、英語学習資料の提供に関する記事 7 件、英語教室に関する議論は 2 件というように英語学習資料の提供に関する記事が一定数で推移しているのに対し、英語教室に関する議論は減少傾向にある。このことから、英語に関する支援は資料提供を中心に呼びかけられていたと推測できる。ただし、1924-1929 年は双方共に記事数が減少している。こうした英語教育に関する議論のほか、1910-1904 年には市民権獲得支援に関しても議論が始まる。これらは、前述したマクマレンの図書館におけるアメリカ化運動の取り組みと合致することがわかる。

以上のことから、分析対象期間における移民サービスの特徴として以下の点を挙げることができる。まず、移民サービスにおいて母語図書の提供が最も議論されていた内容であったということである（図 7）。英語学習資料やアメリカ情報提供も多く取り上げられていたことから、図書館のコレクションに関する内容であったことが注目を集めた一因だと考

えられる。このような状況は、アメリカ全土のアメリカ化運動の状況とは逆の立場をとっていたと考えられる。1906 年に改正された帰化法では、英語を話せない移民に市民権を与えないとした [44]。さらに、第一次大戦後には英語教育の強制、外国語学校の規制などが行われている [45]。つまり、アメリカは言語の統一によって移民のアメリカ化を行おうとしていたといえる。それにも関わらず、公共図書館が母語図書の提供を推奨していたということは、強制的なアメリカ化には消極的だったと考えることができる。さらに、2 節でふれたように、*Library Journal*でも強制的なアメリカ化はアメリカ化ではないと論じられており、強制的なアメリカ化には批判的なものもいた。公共図書館は「言語面」における強制的な移民のアメリカ化に対して否定的だったといえよう。

次に、アジア系移民に関する言及が少ないことである。これは、公共図書館が移民サービスとして取り組んでいたといえども、白人中心のサービスを行っていたことを類推させる結果である。公共図書館のアメリカ化運動に関して、先行研究で指摘されていた英語学習資料の提供と市民権獲得支援以外にも英語か母語かを問わずアメリカ情報の提供は公共図書館の取り組みの中でも重要な要素であることが分かった。

3.2.3. 日系人への図書館サービス

これらのアメリカ公共図書館の状況の中、日系人に関してはどのように言及されてきたのだろうか。分析対象期間内で日系人に関して言及した記事は 6 件である。そのうち 5 件が 1910 年代の記事であった。また、6 件のうち 3 件がカリフォルニア州、残り 3 件がニューヨーク州と地域に偏りがあることがわかる。カリフォルニア州で日系人に関して言及した記事が多い理由は、他の地域より日系人の居住率が高かったためであると考えられる。ニューヨーク州が多い理由としては、ニューヨーク公共図書館の先進的な取り組みが *Library Journal* でよく取り上げられていたからだと類推できる。その結果、多くの移民に関する記事がニューヨーク州で取り上げられている。

はじめに日本に関する記述が現れたのは、1911 年 5 月に掲載された「ニューヨーク公共図書館の新しい建物（”The new building of the New York Public Library”）」[46]と、同号で掲載された「ニューヨーク公共図書館（”The New York Public Library”）」[47]である。改築されたニューヨーク公共図書館は新たに東洋のコレクションのための特別な部屋を設置した。その中に価値ある日本の印刷物（Japanese prints）が所蔵されたという内容であった。

次に日本に関して取り上げられたのは翌 1912 年 1 月の「カリフォルニア州オークランド公共図書館（”Oakland (Cal.) F. L.”）」である。これには簡潔にオークランド公共図書館が日本に関する写真を所蔵していたことが報告されている [48]。

つづいて、1915 年 4 月の「外国人サービス（”Foreigners work with”）」で日本に関する

内容が記述された。

> ニューヨークのビンガムトン公共図書館（Binghamton Public Library）が世界の手工業展を開催した。（中略）ハンガリー、ボヘミア、スロバキア、ルーマニア、アルメニア、イタリア、日本、中国、シリア、ロシアの手工業が展示された。[49]

展示物の 1 つとして日本の手工業が取り上げられている。これらの展示会を行った理由として、本記事では「移民が図書館を訪れる機会とアメリカ人の移民への理解を目的」[50]としている。

3 年後の 1918 年 10 月の「図書館はアメリカ化を共有する（”The library's share in Americanization”）」という記事で、管見の限り初めて日系人に対する移民サービスについて言及された。ロサンゼルス公共図書館における移民サービスをまとめた記事であり、その中で日系人に関しても言及していた。

> アメリア通り学校（Amelia Street School）では、多くのメキシコ人、日系人そしてイタリア人を見ることができる。ストーリークラブ（Story-club）が開催されており、彼らは放課後そこに集まる。教師の指導のもと、彼らはストーリーテリング（Story-telling）を行っている。（中略）児童サービス図書館員は（The children's librarian）は友人のようにこのクラブに関心を示し、実際名誉会員となっている。図書館員は、彼らにどこで物語を入手できるかを教え、具体的に説明するために図書を持ってくることもある。[51]

このように、日系人を含めた移民に対して図書館員が学校と協力して彼らへ図書の紹介や図書館を利用するように促す運動をおこなっていたことがわかる。この活動から、日系人のトウゴ（Togo）が公共図書館に通うようになり、その友人もトウゴに連れられ公共図書館をよく利用するようになったという具体例を本記事で紹介している[52]。

さらに、日系人の夜間学校（night school）にも焦点を当てている。

> 日系人は夜間学校を求めており、現在は図書館から図書を配架してもらうことを求めている。「日本語の図書？」「いや、彼らは英語を学びたいと思っている」[53]

最後の会話からわかるように、日系人自らが英語を学ぶために日本語の図書ではなく英語の図書を求めている。これらの事例を通して、本記事では、学校との積極的な連携と、簡単な英語で書かれたアメリカの地理、歴史、市民権、工業、移民に関する図書や雑誌が必要であると言及している。[54]

さらに日系人に関する記事は「日系人サービス（”Library work with Japanese”）」と題し、日系人に対する移民サービスに言及したものがある。本記事では日系人移民の歴史を含め、現在の様子などの簡単な紹介もされている。日系人差別にも触れられており、「新聞に書かれたでたらめな話は相互の誤解を助長するものであった」[55]と指摘している。日系人

の図書館利用の様子について、以下のように記されている。

> 数年前、いくつかのカリフォルニア州の公共図書館を訪れたある講師が、日系人は決して図書館に行かないと断言したことにより聴衆を驚かせた。確実に、彼女はリトルトーキョーの支部図書館の子ども部屋（children's room）を訪問しなかった。放課後や土曜日のその部屋はアーモンド型の目をした少年と少女（筆者注：日系人）で満たされていた。その子どもらはアメリカ人の子どもより、いつも本を清潔に、注意を払ってつかい、罰金に関しても誠実な対応をする。（中略）授業で図書館の使い方を学ぶために子ども部屋へ来た時、日系人の子ども達は本の整理方法を素早く覚え、カタロギングと分類のゲームで他の子ども達よりいつも良い成績であった。[56]

ここから、日系人コミュニティの近くにあった公共図書館を、特に日系人 2 世が利用していたことがわかる。さらに、その 2 世は礼儀正しく、誠実で、知的であったとアメリカ人は評価している。

つづいて、日系人が利用した図書に関しても言及している。

> 日系人はアメリカの政治に関する図書を求めた。しかし、彼らは決して市民にはなれない一方、彼らは市政学の研究について敏感であった。彼らは日本語よりむしろ英語の図書を求めたが、彼らの図書館や書店が提供していたのは様々な種類の母国の文学であった。[57]

つまり、日系人はアメリカの公共図書館に、娯楽よりアメリカに関することがらを学習するための図書を求めていたと図書館側が理解していたことがわかる。特に政治に関する図書という点は注目すべきだろう。日本語より英語の図書を求めていたことは、別の箇所で「アメリカの図書館に対して日本語で書かれた図書や雑誌の提供を必要としていなかった」[58]と言及されていることにも現れている。つまり、アメリカ公共図書館は、日系人に対して日本語図書の提供の必要性を高く考えていなかったといえる。

最後に図書館員の日系人に対する態度について以下のように述べている。

> 公共図書館は、日系人に対して、礼儀正しさと公平さが必要である。日系人は多くのアメリカ人から不親切な態度を受けたり、日本文化が制限されている。図書館と学校は公平な態度とアメリカの機関のより良い面を見せる機会を彼らに提供することさえできれば充分である。（中略）日系人は特別な特典を望んでいない。公平な機会が全ての民族に与えられると日系人は満足するだろう。（中略）日系人差別に対しての改善策は相互理解であり、図書館は民主的な機関として全ての人々に共感と平等の機会を提供することによって図書館は自身の役割を果たす。[59]

図書館員に対して、日系人を他の利用者と同様な態度でサービスを行うよう強く強調している。つまり、当時の図書館員の日系人への対応に何かしら警告する必要があったと推測

される。加えて、図書館の役割として「民主的な機関として」と記されていることから、中立的な機関であろうとしていることがわかる。

以上の事柄をふまえ、日系人に対する移民サービスとアメリカ化運動の関係について分析する。1911 年の両記事と 1915 年の記事では、日本の貴重書や写真などの収集に関して述べられていることから移民サービスのために収集されていたというより、研究などに用いる参考文献として収集されていたという可能性が高い。さらに、ニューヨーク州だけではなく、カリフォルニア州でもこのような傾向がみられるため、1910 年代前半までは、地域に関係なく移民サービスとして日本語図書を収集していなかったのではないかと推測できる。

しかし、1918 年のロサンゼルス公共図書館の報告は日系人を移民サービスの対象者としているものであった。1918 年の記事で言及されているサービス内容を筆者の移民サービス内容分類に当てはめると、まず「図書紹介」は「その他」の「図書リスト」に分類できる。さらに、「英語図書提供」は、実施理由が英語学習への利用のため、「アメリカ化運動」の「英語学習資料提供」に分類できる。加えて、「アメリカ化運動」の「英語アメリカ情報提供」に分類される「簡単な英語で書かれたアメリカの情報」の必要性も言及している。つまり、日系人は「アメリカ化運動」と「その他」の娯楽面に対しても移民サービスを受けていたといえる。しかし、移民サービスの中心的取り組みであった母語図書提供が行われていないことに注目したい。

1922 年の記事も日系人に対する移民サービスに言及しているが、日本語図書は必要ないと述べられている。加えて、両記事とも 2 世や英語を利用できる 1 世を移民サービスの対象者としている。つまり、英語ができない 1 世に対して、最も基本的な移民サービスである母語図書の提供が行われていなかった可能性を示唆している。これは、1 世がアメリカ公共図書館に娯楽を求めていないと図書館側が考えていたことを示す。このように 1 世に対して図書館の取り組みが少ないのは、1 世が帰化不能外国人であることが理由として考えられる。アメリカ化運動は移民の帰化を目的として行われている側面もあるため、それが叶えられない 1 世より、同化の可能性がある 2 世に対しての移民サービスに図書館は注力したのだと考えられる。

その他のサービスの内容としては、英語で書かれたアメリカの政治に関する図書の提供を推進していることから、筆者の移民サービス内容分類に当てはめると、「アメリカ化運動」の「英語アメリカ情報提供」に分類できる。1918 年の記事から一貫して「英語アメリカ情報提供」を強調していることから、公共図書館は日系人に対し、教育機関としてサービスに取り組もうとしていることがわかる。移民サービスの最も基本的な機能である母語図書の提供が行われず、日系人は公共図書館で娯楽を享受できなかったと推測される反面、一

部のアメリカ化運動としてのサービスは提案されていたといえるだろう。

---

[1] 川崎良孝著, 『図書館の歴史アメリカ編』, 増訂, 日本図書館協会, 2003, p140.
[2] "September 30 1876", *American Library Journal vol1*, 1876, p12.
[3] 油井大三郎, "総説　世界史の中のアメリカニゼーション", 油井大三郎, 遠藤泰生編, 『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』, アメリカ太平洋研究叢書, 東京大学出版会, 2003, p3-9
[4] 同書, p11-13
[5] Kellor, Frances A., "What is Americanization", *Yale Review January*, 1919, reprinted in Phlip Davis, *Immigration and Americanization*, 1920, p629
[6] 松本悠子, 「アメリカ人であること・アメリカ人にすること」, 『思想』(884), 岩波書店, 1998, p58-59
[7] 同書, p52-75
[8] Jones, Plummer Alston. Jr, *Still struggling for equality: American public library services with minorities*, Library Unlimited, 2004, p17-18
[9] 蓑原俊洋, "第 2 章アメリカ移民法史", 『排日移民法と日米関係』, 岩波書店, 2002, p81-82.
[10] 同書, p81-82.
[11] 広部泉, "3 章アメリカニゼーションと「米化運動」", 『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』, アメリカ太平洋研究叢書, 東京大学出版会, 2003, p72
[12] 松本, 前掲書, 1998, p58-59
[13] 同書, p59-60
[14] 同書, p60
[15] Josephson, Aksel. G. S, "Foreign books in American library", *Library Journal vol.19 no.11*, 1894, p364.
[16] Countryman, Gratia, "Shall public libraries buy foreign literature for the benefit of the foreign population?", *Library Journal vol.23 no.6*, 1898, p229-231.
[17] 小林卓, 「今世紀初頭のアメリカにおける移民へのサービス」, 『社会教育学・図書館学研究』(17), 東京大学教育学部社会教育学研究室, 1993, p27
[18] "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.13*, 1919, p342-343
[19] McMullen, Haynes, "Service to minorities other than Afro Americans And American Indians.", *A Century of service*, Chicago, American Library Association, 1976, p48-49
[20] *Ibid*
[21] Jones, Plummer Alston. Jr, *op. cit*, 2004, p17
[22] *Ibid*, p17-18
[23] Jones, Plummer Alston. Jr, *Libraries, immigrants, and the American experience*, University Microfilmes International, 1999, p10-11.
[24] *Ibid*, p11.
[25] "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.11*, 1917, p336
[26] "Work with the Foreign Born", *op. cit*, 1919, p342-343
[27] Stern, Stephen, "Ethnic libraries and librarianship in the United States: models and prospects", *Advances in librarianship vol.15*, 1991, p80-81
[28] Maltby, Adelaideb B., "Immigrants as contributors to library progress", *Bulletin of the American Library Association*, 1913, p154
[29] Campbell, J. Maud, "What the foreigner has done for one library", *Library Journal vol.38 no.11*, p614
[30] Stern, *op. cit*, 1991, p80-81

[31] ウィリアムズ, P 著／原田勝訳,『アメリカ公共図書館史 1841-1987 年』, 勁草書房, 1991, p7-11
[32] 同書, p30-31
[33] Prescott, Della R., "What Americanization is not", *Library Journal vol.44 no.3*, 1920, p218.
[34] Carr, John Foster, "Books in foreign languages and Americanization", *Library Journal vol.45 no.4*, 1919, p245
[35] 小林, 前掲書, 1993, p27
[36] 同上
[37] 同上
[38] McMullen, *op. cit*, 1976, p48-49
[39]中山愛理, 『図書館を届ける：アメリカ公共図書館における館外サービスの発展』, 学芸図書, 2011, p33-34
[40] Jone, *op. cit*, 2004, p18
[41] ボヘミア（Bohemian）とは、少数民族のことを指し、その民族間で使われていた言語が現在のロマ語（ロマニ語）である。本研究ではロマ語のことをこの当時使用されていた「ボヘミア」という言葉を用いて、ロマ語を母語とする移民グループを「ボヘミア系移民」と記す。
[42] 松尾弐之, 『民族から読み解く「アメリカ」』, 講談社, 2000, p128-131.
[43] 常盤繁, 「アメリカ公共図書館における教育的サービスの発達」, 『Library and Information Science』（15）, 1997, p109.
[44] クロースフォード, ジェイムズ著／本名信行著, 『移民社会アメリカの言語事情』, ジャパンタイムズ, 1994, p87-90
[45] 松本, 前掲書, 1998, p60
[46] "The new building of the New York Public Library", *Library Journal vol.36 no.5*, 1911, p223-228.
[47] Billings, John S., "The New York Public Library", *Library Journal vol.36 no.5*, 1911, p233-237.
[48] "Oakland (Cal.) F. L.", *Library Journal vol.37 no.1*, 1912, p51.
[49] "Foreigners work with", *Library Journal vol.40 no.4*, 1915, p292-293.
[50] *Ibid*
[51] Britton, Jasmine, "The library's share in Americanization", *Library Journal vol.43 no.10*, 1918, p724.
[52] Britton, Jasmine, "The library's share in Americanization", *Library Journal vol.43 no.10*, 1918, p723-727.
[53] *Ibid*
[54] *Ibid*
[55] Horton, Marion "Library Work with the Japanese" *Library Journal vol.47 no.4*, 1922, p157
[56] *Ibid*, p159
[57] *Ibid*
[58] *Ibid*
[59] *Ibid*, p159-160

4. 日本語新聞にみられる日系人の図書館意識

本章では、20 世紀初頭に発行されていた日本語新聞を用いて日系人の図書館意識や読書に対する意識などを量的に分析していく。まず、サンフランシスコ市で発行された日本語新聞を概観し、次にサンフランシスコ市で最も有力紙であった『日米新聞』と『新世界新聞』を用いた調査方法と結果を示していく。1900 年から 1929 年を対象期間としているが、両新聞とも入手できなかった期間があり、実際に調査した期間は『日米新聞』が 1919 年から 1929 年、『新世界新聞』が 1906 年から 1929 年である。さらに、この期間中にも欠落している号が存在する。

4.1. アメリカで発行された日本語新聞の概要

日本語新聞は、ハワイ、サンフランシスコ市、ロサンゼルス市等のほとんどの都市でコミュニティ新聞として現在まで発行されている [1]。日系人コミュニティというのは、アメリカ全体に単一の社会として存在しているわけではない。地域ごとに日系人が直面している環境は異なっている。そのため、日系人コミュニティは地域ごとに別個に自立して形成されており、日本語新聞もまた、自立的に創刊、廃刊を繰り返していた。読者層を特定の都市や地域に限定し、内容や広告は、人事往来、冠婚葬祭、死亡記事、社交界、新規開店など、コミュニティに関連した情報が多く、全米の日系人といった抽象的な記事はみあたらない [2]。

サンフランシスコ市における初期の日本語新聞は、1886 年に創刊されたと推定される『東雲雑誌』があげられ [3]、これは、日系人コミュニティ内の情報紙として位置付けられる [4]。翌 1887 年になると、自由民権運動の日本国内での抑圧からアメリカへ渡った集団の新聞が発行されるようになる [5]。これらの新聞は少数部数であり、個々の新聞は長くは続かなかったが、1893 年頃まで発行され続けた [6]。アメリカで自由民権を主張するために発行していたことから、内容は政治文書的であり、新聞は、サンフランシスコやオークランドなどの湾岸地区の日系人に配られたほか、積極的に日本の読者宛てに送られた [7]。その後、日本の帝国議会の開設や日清戦争などを反映し、次第に自由民権の政治色が薄れてゆき、日本語新聞はコミュニティに関連した情報を扱う新聞へと回帰していった [8]。

こうした流れの中で創刊されたのが、1894 年の日刊『新世界新聞』である [9]。関係者は当初日本人基督教青年会の活動家たち、福島八郎らであった。『新世界新聞』は、創刊直後に青年会から離れ、商業新聞に変化し、のちにサンフランシスコ市の代表的な日本語新聞のひとつとなった [10]。その勢力はカリフォルニア州だけにとどまらず、メキシコや南米地方まで及んだ [11]。つづいて、安孫子久太郎が、サンフランシスコ市で発行されていた複数の新聞を合併し、1899 年に日米新聞社を設立、『日米新聞』を創刊した [12]。以降、安孫子

の経営戦略によって、『日米新聞』はアメリカで日系新聞の最大の発行部数を誇り、日系移民社会に影響力を持つ日刊紙になった。日米新聞社はサンフランシスコ市とロサンゼルス市で異なる版を発行し、カリフォルニア州にはもちろん、アメリカ西北部、ロッキー山脈地区にも届けられていた。1920 年代の全盛期には、サンフランシスコ市版とロサンゼルス市版両方合わせて、カリフォルニア州、太平洋西北部、山中部地域などで 2 万 5 千の予約購買者を有していた [13]。このように、第二次世界大戦までサンフランシスコ市では『新世界新聞』と『日米新聞』が日系新聞の主要紙であった。

以上のことから、日系人コミュニティがどのような話題に注目していたのか、どのような意見を持ち、情報を収集していたのかを理解するために、両新聞を分析することは有効であるといえる。ただし、各新聞の立場に注意して分析を行う必要がある。なお、本研究ではサンフランシスコ市版の『日米新聞』を用いて分析を行っている。

『日米新聞』は発行者である安孫子が永住土着思考の持ち主であったため、記事はアメリカへの永住を推奨していた。スローガンを「土着永住」とし、日系人労働者が農業を始めるように勧めるのを社の方針としていた [14]。さらに、安孫子は日系人排斥運動が起こるのは日系人がアメリカの習慣やしきたりに無関心だからと考え、アメリカ化運動を推奨している。『日米新聞』ではこのような安孫子の思想を反映して、アメリカ化運動を肯定する記事が多く掲載された。例えば、アメリカ化運動に関する記事で、3 日間にわたって連載された「米化運動と邦語教育」[15]という記事では、日系人に対する外国語教育の禁止などの強制的なアメリカ化運動は否定しつつも、「米国の市民たる精神と資格の養成」[16]という目的を持ったアメリカ化運動を積極的に肯定している。

一方、『新世界新聞』は日本人基督教青年会の活動家であった副島八郎らが発行者であり、キリスト教系新聞の発行を目的として創刊された [17]。当新聞はサンフランシスコ市における活版印刷の日刊紙の先駆けであり [18]、その印刷技術の高さと新鮮さが手伝って発行部数を伸ばしていった [19]。『新世界新聞』は 1897 年に日本人基督教青年会と分離し、副島の個人事業色を強めていった。日本人基督教青年会とは分離したとはいえ、副島が中心となって発行していたため、同会の意向を踏襲していると考えられる。つまり、『新世界新聞』もアメリカ化を肯定していたということである。その中でも、『日米新聞』との違いは、商業新聞社となったもののキリスト教の影響を受けていると考えられるところだろう。

4.2. 日本語新聞の量的分析

アメリカ公共図書館における移民サービスをふまえ、日系人が読書や図書館に対してどのような意識を持っているのかを分析していく。はじめに抽出方法を記したのち、収集した記事の量的な結果を分析する。ここで抽出した記事をもとに第 5 章では質的な分析を行

っている。

4.2.1. 日本語新聞記事の抽出方法

第 3 章 1 節で述べたように、小林が移民サービスとして言及している例として、①母語によるアメリカの情報提供、②市民権獲得のための資料提供・講習、③英語学習のための資料提供、④英語学習のための講義、⑤母語で書かれた図書の提供をあげている [20]。1917 年にALAに設置された外国出身者サービス委員会の主な活動は（あ）図書選択を行うツールとしての図書リスト作成、(い) 展示などのイベントに関する情報提供である [21]。加えて、20 世紀前半の移民サービスを歴史的に概観したマクマレンは 1915 年から移民サービスの内容が変化し、アメリカ化運動の一環として移民サービスが行われたと言及しており、(A) 英語教育のために用いる簡単な英語で書かれた図書の提供、(B) 市民権教育のために用いるアメリカに関する情報の提供に着目している [22]。

以上の移民サービスをふまえ日本語新聞記事収集基準をまとめた。まず、「⑤母語で書かれた図書の提供」と「(あ) 図書選択を行うツールとしての図書リスト作成」は移民が読書を行うための取り組みと言えるので、基準として「読書に関する記事」をあげる。ただし、日系人がどのような目的で読書を行っていたのかを分析するために日系人の読書傾向に関する記事もこれに含む。次に、「①母語によるアメリカの情報提供」と「(B) 市民権教育のために用いるアメリカに関する情報の提供」に着目する。これらは共にアメリカに関する情報提供を目的として行っているため、基準として「アメリカの情報提供に関する記事」をあげる。さらに、「③英語学習のための資料提供」、「④英語学習のための講義」、「(A) 英語教育のために用いる簡単な英語で書かれた図書の提供」は英語教育を目的として行われているため、基準として「英語教育に関する記事」をあげる。最後に、「(い) 展示などのイベントに関する情報提供」によって移民の文化を発信していたこと、移民の図書館利用のきっかけを提供していたこと [23]、さらに、当時アメリカ化運動は必ずしも移民文化を否定するものではなかったという点から [24]、「日本・日本文化の情報提供に関する記事」も収集基準として含める。

分類の結果、記事収集基準は以下の通りとする。⑴図書館に関する記事、⑵読書に関する記事、⑶アメリカの情報提供に関する記事、⑷英語教育に関する記事、⑸日本・日本文化の情報提供に関する記事とする。これらの内容について、図書館で実施しているかどうかに関わらず収集した。記事収集は目視で行っており、さらに新聞によって欠落している期間もあるため、収集漏れがある可能性は否めない。

4.2.2.　日本語新聞の量的分析

現在調査可能である『日米新聞』1919 年から 1929 年の 11 年間、『新世界新聞』1906 年から 1929 年の 24 年間を、記事収集基準に沿って収集した結果、『日米新聞』135 件、『新世界新聞』187 件の計 322 件を得ることができた。図 8 は記事数の推移である。1919 年以降は『日米新聞』と『新世界新聞』の合計記事数も示した。

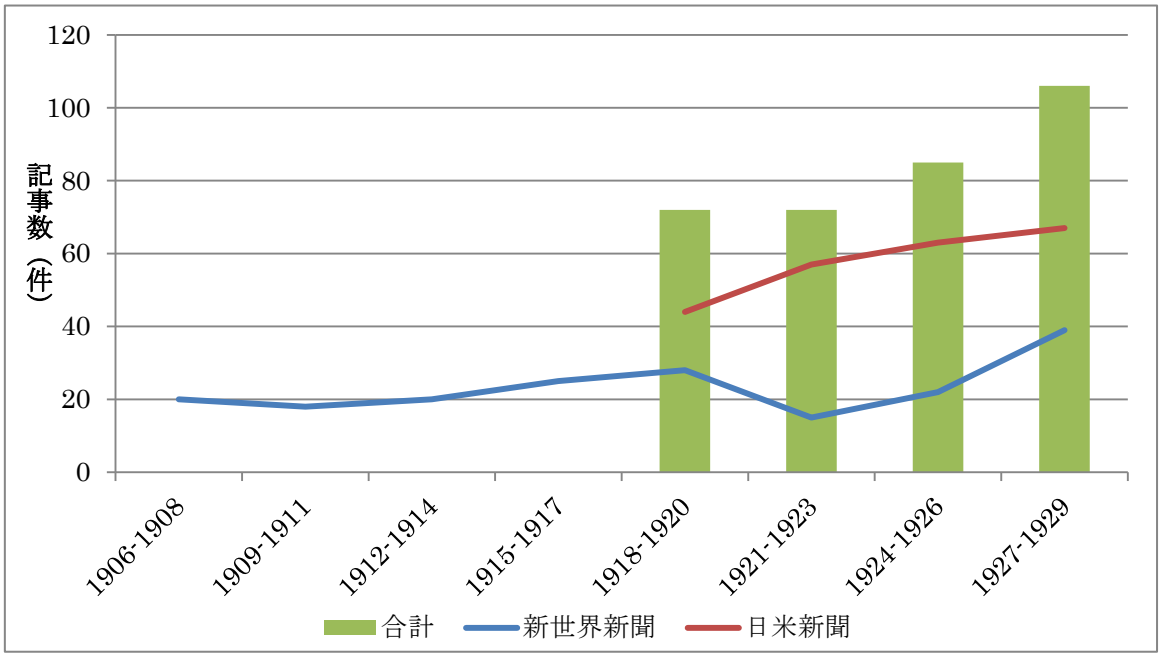


図 8　日本語新聞における図書館等関連記事

（筆者作成）

記事数は年ごとに大きな差があったため、3 年ごとに記事数をまとめて表示した。両新聞の合計記事数は増加傾向にあることがわかる。各新聞をみてみると、『新世界新聞』は調査開始当初が 20 件だったのに対し、最後の 3 年間は 39 件まで増加している。特に 1910 年代後半から徐々に記事が増加している。ただし、1918-1920 年の記事数 28 件から 1921-1923 年には 15 件に減少している。これは新聞のページ数の変化がないにも関わらず、1923 年の関東大震災や排日運動が活発になり、そちらに紙面を割いた影響で本調査の分析対象記事が減少したのではないかと推測できる。一方、『日米新聞』は『新世界新聞』と同様に調査開始当初の 44 件から、最終的に 3 年間で 67 件と記事数が増加していることがわかる。これらの結果から、年ごとに差はあるものの、日本語新聞は年を追う毎に図書館や読書に関する関心を高めていたといえよう。

つづいて、両新聞の基準項目に沿った記事数を図 9 に示した。『日米新聞』と『新世界新

聞』で調査期間に差があるという点に留意して分析する。

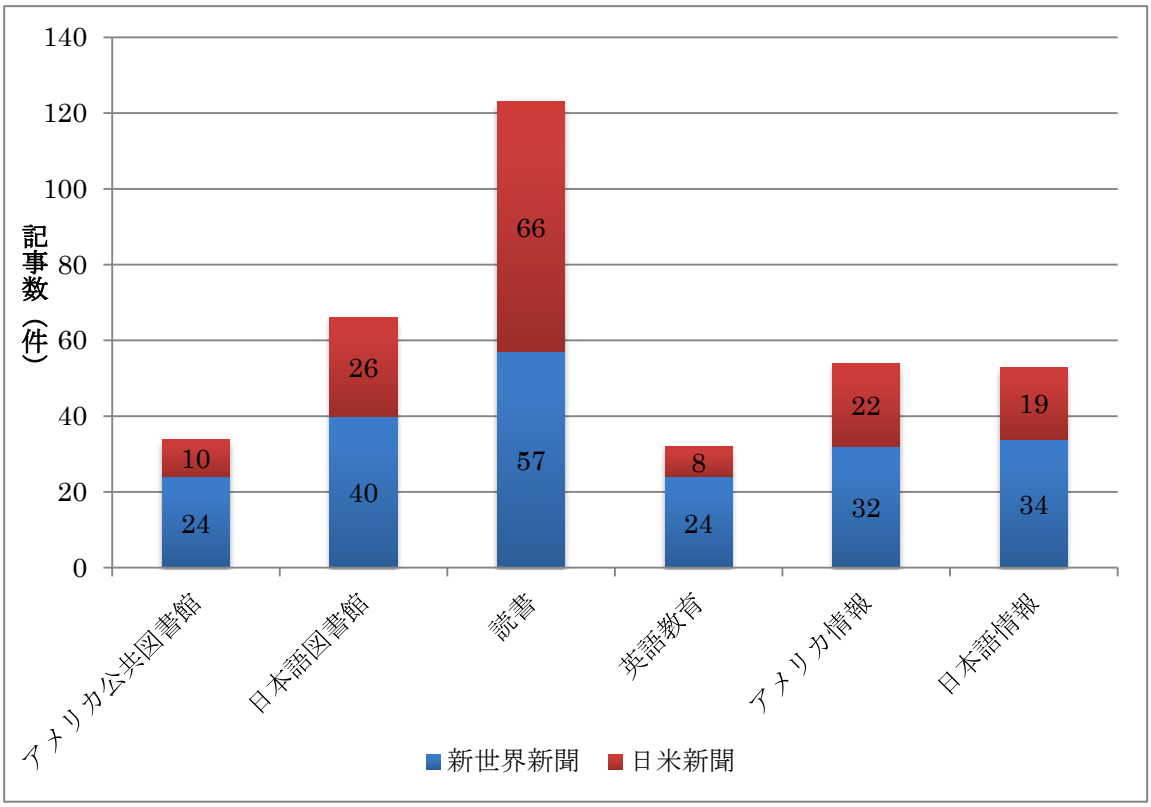


図 9　日本語新聞（1906 年-1929 年）における基準項目別の記事数

（筆者作成）

両新聞の合計記事の延べ数は、⑴図書館に関する記事 100 件、うち日本語図書館に関する記事 66 件、⑵読書に関する記事 123 件、⑶英語教育に関する記事 32 件、⑷アメリカの情報提供に関する記事 54 件、⑸日本・日本文化の情報提供に関する記事 53 件である。図書館に関する記事の中でも、日本語図書館に関する記事は図書館に関する全記事数の約 65%を占めており、アメリカ公共図書館より日本語図書館の方が注目されていたことがわかる。つづいて、読書に関する記事は 5 つの基準の中で最も記事数が多かったことから、日系人は読書に対して関心があり、日系人の中の指導的立場の人々も読書を広めようとしていたと言える。

一方、アメリカ化運動の中で、よくとりあげられる英語教育に関する記事が最も少ない。両新聞ともアメリカ化運動に対して肯定的にとらえていたにも関わらず、英語教育に関する記事が少ないことが特徴の 1 つとしてあげられるだろう。公共図書館の移民サービスの 1 つであり、アメリカ化運動としてサービスが行われていたとされるアメリカの情報提供に

関する記事が一定数あることから、日系人社会においてもアメリカの情報提供に関する情報は需要があったと考えられる。さらに、日本や日本文化の情報提供に関する記事もアメリカの情報提供に関する記事と同程度あることから、日系人はアメリカ人に対して日本に関する情報を提供することに意識があったと考えられる。

各新聞を比較すると、『日米新聞』は『新世界新聞』よりも読書に対して関心が高かったといえる。なぜなら、『日米新聞』は、『新世界新聞』より調査期間が 13 年短いにも関わらず、読書に関する記事は『日米新聞』の方が 9 件多い。つまり、『日米新聞』は、日系人に対して積極的に読書を推奨していたといえる。反対に、『新世界新聞』は調査期間に差があることを鑑みても『日米新聞』より多く英語教育に関する記事を取り上げている。つまり、『新世界新聞』は英語教育の実施に関して積極的に情報を提供していたといえよう。

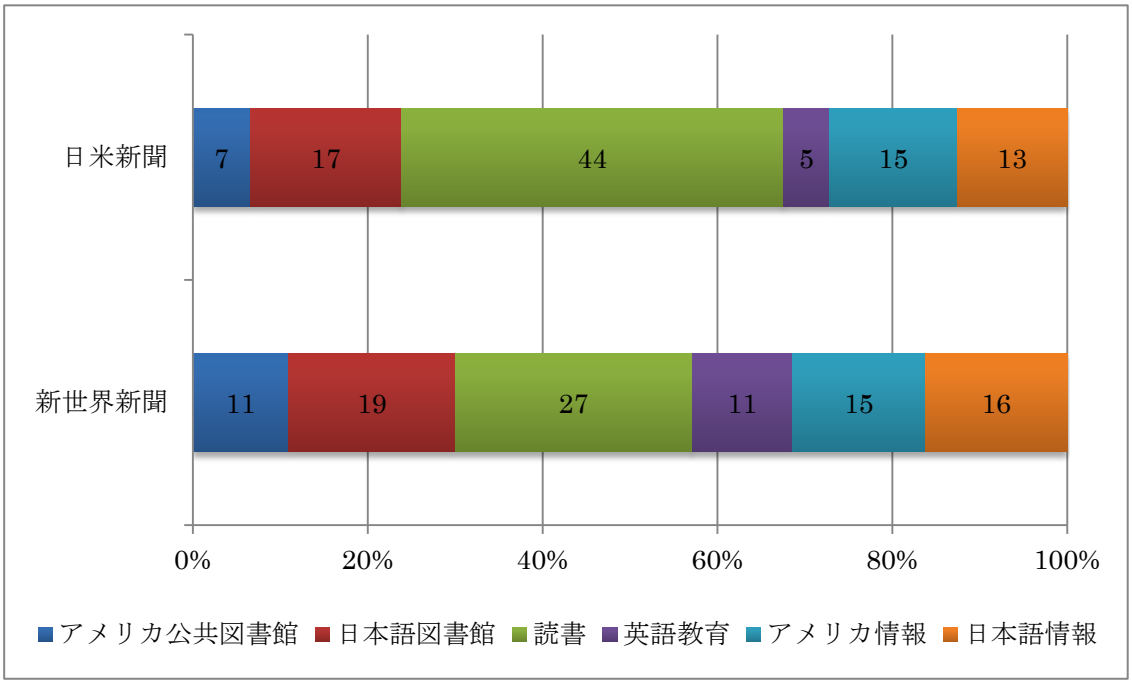


図 10　日本語新聞（1906 年-1929 年）の基準項目別の割合

（筆者作成）

つづいて、図 10 は図 9 の数値を割合で示したものである。両新聞の共通点としては、図 10 から日本語図書館に関する記事、アメリカ情報提供に関する記事、日本語情報提供に関する記事はほぼ同じ割合を占めている。一方、先に述べたように『日米新聞』は読書に関する記事が 44%（66 件）と『新世界新聞』より高い割合にあり、『日米新聞』は読書に対して関心が高かったことが伺える。対して、英語教育に関する記事は、『新世界新聞』11%、『日米新聞』5%と倍の差がある。つまり、英語教育に関しては『新世界新聞』の方が情報

を提供していたといえる。

つづいて、第 5 章で収集した記事を質的に分析していく。なお、上記の基準項目は先行研究を用いて調査以前に設定したものであるため、同項目に沿った分析のみを行うと十分な記事の分析が行うことができないと考えられる。記事の内容を詳細に検討し、基準項目にとらわれず自らの視点で分析を行うために、KJ 法を用いて分析を行う。

---

[1] 田村則雄, 「概説　初期の米国日系新聞の流れ」, 『米国初期の日本語新聞』, 勁草書房, 1986, p11
[2] 同書, p1-12
[3] 蛯原八郎, 『海外邦字新聞雑誌史』, 名著普及会, 1980, p156
[4] 田村, 前掲書, 1986, p13
[5] 蛯原, 前掲書, 1980, p108-109
[6] 田村, 前掲書, 1986, p13-19
[7] 同書, p1-3
[8] 同書, p13-19
[9] 蛯原, 前掲書, 1980, p160
[10] 田村, 前掲書, 1986, p16-17
[11] 蛯原, 前掲書, 1980, p162
[12] 同書, p164
[13] イチオカ, ユージ, “『第二世問題』1902 年—1941 年”, 『北米日本人基督教運動史』, 同志社大学人文科学研究所, 1991, p750
[14] イチオカ, ユージ, “安孫子久太郎”, 『米国初期の日本語新聞』, 勁草書房, 1986,　p209
[15] 「米化運動と邦語教育」, 『日米新聞』, 1919 年 4 月 2 日, 4 月 3 日, 4 月 4 日
[16] 「米化運動と邦語教育」, 『日米新聞』, 1919 年 4 月 3 日
[17] 田村紀雄, 『アメリカの日本語新聞』, 新潮社, 1991, p146
[18] 蛯原, 前掲書, 1980, p162
[19] 田村, 前掲書, 1991, p148-149
[20]小林卓, 「今世紀初頭のアメリカにおける移民へのサービス」, 『社会教育学・図書館学研究』(17), 東京大学教育学部社会教育学研究室, 1993, p27
[21] “Work with the Foreign Born”, *Bulletin of the American Library Association vol.11*, 1917, p336
[22] McMullen, Haynes, “Service to minorities other than Afro Americans And American Indians.”, *A Century of service*, Chicago, American Library Association, 1976, p48-49
[23] “Work with the Foreign Born”, *op. cit*, 1917, p336
[24] 松本悠子, 「アメリカ人であること・アメリカ人にすること」, 『思想』(884), 岩波書店, 1998, p60

5.　日本語新聞の内容分析

本章では、第 4 章で量的分析を行った『日米新聞』と『新世界新聞』の記事を質的に分析していく。具体的には収集した記事を各新聞ごとに KJ 法を用いて分析を行った。KJ 法の結果、記事の内容を「アメリカ公共図書館に対する認識」「日本語図書館に対する認識」「アメリカ化と図書館」「読書の意義と現状」の 4 グループに分け記事の内容を検討する。主に、「日系人のアメリカ化」という点から分析・考察を行う。なお、新聞記事で「文庫」「図書室」「図書館」といった用語が使われていたが、これらを区別せずに「図書館」として取り上げ分析している。さらに、新聞記事中に「研究」「娯楽」という用語が出てくるが、これらの用語は記事の文脈によって意味が変化している。「研究」は研究者が行う研究という意味で使われる「研究」と、学習という意味で使われる「研究」がある。「娯楽」は、教育的意味で使われる「娯楽」と、余暇の楽しみという意味で使われる「娯楽」があるため、留意しながら分析していく。

5.1.　アメリカ公共図書館に対する認識

日本語図書館に対する認識を明らかにする前に、日本語新聞の中でのアメリカ公共図書館に対する認識を分析していく。さらに、アメリカ公共図書館に対して日系人がどのように見て、感じていたのかという点を明らかにする。

5.1.1.　『日米新聞』

『日米新聞』は、アメリカ公共図書館について、1925 年の記事において「加州人は千九百二十四年十二月から今年十二月までの十二ヶ月間に二千五百二十四万九百六十七冊の書物を各地図書館から借りだして読んでをり丁度一人当り七冊ださうで、アイオワ州を除いて米国全体で最も読書率が高い」[1]と、カリフォルニア州の図書館利用率の高さを記している。さらに、サンフランシスコ市立図書館に関して、1927 年に「桑港は米国中でも比較的知識階級の人々が多いことは日々シビックセンターの図書館に出入りする人数をみても分かる」[2]と指摘した上で、「日々五千人の人がきて平均二十五万冊をあさっている」[3]と多くの来館者があることや、利用図書も「最も需要の多いのは哲学的のものである」[4]ことから、サンフランシスコ市立図書館の利用者は比較的知識層が多いと推測されている。一方、アメリカ公共図書館の蔵書に関して、1928 年の記事で次のように述べている。「日本関係の図書の少しならば米人の図書館にても得られる、然し多数の日本人関係の図書の蒐集は到底望めない。」[5]と日本に関する図書の少なさを指摘している。

このようなアメリカ公共図書館は、日系人からどのように見えていたのだろうか。アメリカで 9 ヶ月間生活した日本人の手記に、「米国の都市といふ都市に広大なる図書館の無い

ところがない（中略）大抵の寒村僻地にも不完全ながら図書館の設備をみる」[6]とアメリカにおける図書館の充実ぶりが指摘されている。さらに、公共図書館の対応に関しても言及しており、「係の人々が特に奏任顔もしなければ判人顔もしない。丁寧に応対し、読者の便宜を講ずる。いかにも気持ちがよい」[7]と日本人からみてアメリカの公共図書館は図書館員の対応も含め、印象が良いことがうかがえる。しかし、どこの地域の公共図書館か言及されていないことに注意しなければならない。地域によって図書館員の対応が変化する可能性がある。少なくとも日本人から見て好感を持てる対応をするアメリカ公共図書館もあったということがわかる。

日系人はアメリカ公共図書館を日本の正確な情報を発信する場と考えていた。これは、次にあげる記事からいうことができる。サクラメント市の排日議員であったインマンが「ナツパ郡亜細亜人排斥協会委員長」としてキングスを指名した。しかし、キングスはそれを辞退し、日系人排斥に関して次のように述べている。

> 今回の排日運動はフエラン氏の先導に基く地方的政治家により起こつたものだが此儘に放任せんか実際の事実を知らぬ人々は之を信ずるに至から正しき人々をして真の事実を知らしむるを以て時局解決の適法と信じ最近日本及び日本人に関する書籍を図書館に寄贈せんとするのである[8]

つまり、日系人排斥を解決する一つの手段として日系人に関する正確な情報提供が重要であるとし、それを図書館に提供することを提案している。これは、他の記事でもみられる論調であり、「曾て愛蘭人、伊太利亜人、独逸人も排斥されたり。然れ共此等の人民は日本人の如く徒に其排斥を黙過せず、新聞紙を興し雑誌を刊行して盛に対抗し反駁せり」[9]と他の移民の事例を挙げたのち、日系人に関して「目下の急務として且又将来久遠の対応策として此際英文紙を刊行して彼らの間に散布し、以て日本人の立場を明らかにする要あるべしと信ず」[10]と日系人排斥運動の対策として日本に関する情報をアメリカ人に提供する必要性を述べている。また、日本に関する情報を図書館へ提供することに関しては、

> 日本の文明特に現代文明を外国人特に米国人に知らしめ之に寄つて日本の実状を知らしめ且又在米日本人の子女に祖国の歴史、文明等を学ばしめん為英文日本文明史出版に関する請願書を西北部連絡日会から文部大臣鎌田栄吉氏宛に提出した（中略）この書籍は米国各都市の図書館大中学校及在米各日本人会等に寄贈されたい[11]

と日本の文化、歴史、現状を記した図書を図書館や他の教育施設に提供する動きも実際あった。なお、本記事でアメリカ人だけではなく、日系人 2 世に対しても日本に関する情報を提供したいと考えていることに着目したい。これは、『日米新聞』を主催している安孫子久太郎が「2 世は日米の懸橋になる」と考えていたことに影響を受けていると考えられる。

以上のようにアメリカ公共図書館について新聞で取り上げられているものの、アメリカ

公共図書館の利用状況に関してはアメリカ人の利用の様子を中心に記述されており、日系人の利用には言及されていない。加えて、日本関係の蔵書が少ないと述べられている点から、日系人の求めている図書が提供されていないと推測できる。そのため、日系人にとってアメリカ公共図書館とは身近なものではなかったと推測される。なお、アメリカ公共図書館におけるアメリカ化運動という視点から是等の記事を見ると以下の事がいえる。アメリカ情報の提供や英語学習の提供などのアメリカ化運動に関するサービスを日系人に対して提供していたという記述はなく、日系人からもそのような提案や要望は管見の限り確認することはできなかった。つまり、日系人はアメリカ化運動に関するサービスをアメリカ公共図書館が行っていると認識していなかった可能性がある。一方、日系人はアメリカ公共図書館に日本に関する正確な状況を提供することにより、アメリカ人に日本の情報を発信する場であると考えていたことが指摘できる。

5.1.2. 『新世界新聞』

『新世界新聞』は、アメリカ公共図書館について、1910 年に「米国議員付属図書館は数年中に世界図書館中数字上有数の地位を占むるに至るべきか目下世界図書館中ビブリオブック及び大英図書館など一位及び二位に位し米国議会図書館は三に位する」[12]とアメリカの議会図書館が世界でも有数であると示している。1917 年にはサンフランシスコ市立図書館に関して取り上げており、「シビックセンター内に設けたる新図書館は二月十五日開館一般の読者に書籍の閲覧を許す事に決し」[13]と新設した図書館の報告と一般市民に対して公共図書館が利用できることを広報する記事を掲載している。1924 年になるとロサンゼルス市の図書館の利用状況を取り上げ「市内の図書館から貸し出した本の数が去年一カ年間に五十万冊の増加をみた（中略）最も需要があつたのは哲学並びに宗教に関した物次いでビジネス及び科学的方面、第三が小説その他の娯楽で（中略）一般がまじめになりつつある」[14]とロサンゼルス市民の読書の傾向を報告している。

このようなアメリカ公共図書館の状況を日系人はどのようにみていたのだろうか。「図書館と言ふものも、米国内到る所に出来て、好きな本をどこでも見られ。衆人一様に娯楽の設備は十分になってきた」[15]とアメリカ公共図書館を娯楽施設と位置づけ、その充実を指摘している。さらに、アメリカ人の図書館利用について以下のように述べている。

> 米国の学校へ行って居る子供が、日本の子供と違ふ点は、ライブラリーから絶えず様々の本を借りてきて読む事である。（中略）是は要するに、ライブラリーなるものが非常に進歩して居て図書の多いのと子供に読まする本の完備して居るのと、ライブラリーを利用する国民の知識が発達しているのが理由であって、尚亦教師が子供に対して、ライブラリーに行く事を常に奨励しているが為である。[16]

つまり、アメリカ全体で公共図書館をよく利用する風潮があり、子どもに進んで公共図書館を利用するようアメリカ人は呼びかけていたことや、アメリカ公共図書館の蔵書は充実していると考えていた事がうかがえる。

アメリカは公共図書館が充実しており、かつ積極的に利用されていると考えられていた中、日系人はアメリカ公共図書館に対して日本に関する情報提供を積極的に行っていた。

> （排日問題について）最も容易に実行の出来る事を致したいと思ふ、と言うのは即ち白人家庭に就業して居る邦人が努めて日本及び日本人を紹介する事である。もちろん排日の原因は幾多あれど一つは日本及日本人に対して白人の知識が足らないからである。（中略）直接対話するか又は日本に関する書物等を贈呈してよく知らしめ[17]

るとし、排日感情の解消のためには日本について正しい情報を提供する事が重要であり、直接の対話か、日本について書かれている図書を送る事が有効であると主張している。この考えのもと、日系人はアメリカ人に対して日本に関する情報提供に取り組んだ。日本を紹介する図書や英文雑誌の発行の他、親日派の白人も協力し、「米人ソートン氏は今回当市において見出しの如き雑誌を発行し米人の対日感の誤解を去らむべし」[18]と日本について書かれた雑誌を発行している。日本に関する図書は、「最近突発せる排日運動の事情及び是に対する方法として同地白人図書館内に日本最近の事情を来際せる各出版物を寄贈する」[19]と述べられているように、日系人排斥の対応策の 1 つとして図書館に提供されていた。具体的には、「日米貿易に関する記事」[20]が掲載されている雑誌や日本語新聞、「市我古市立図書館より在米日会に対しフロリンにおける日本人と題せる小冊子の寄贈を申込来れり」[21]にみられるようにシカゴ市立図書館に対して日本に関する図書、「カーネギー国際平和会館図書部より在日会に対し日本移民及び加州日本人統計其他日本人問題に関する公刊物寄贈方を申込来れり」[22]と日米問題や日系人の統計に関する図書が提供されていた。

これらのことから、まず、アメリカは公共図書館が充実しており、アメリカ人は子どもを含めてよく公共図書館を利用していると日系人が考えていたといえる。一方、サンフランシスコ市立図書館を「万人に向けられている」と紹介していることから、日系人にアメリカ公共図書館の利用を促していると読み取る事ができる。

次に、アメリカ公共図書館を日本に関する情報の提供を行う場と考えていたことがわかる。アメリカ公共図書館に対して日本に関する図書を寄付することは、日系人排斥運動の解決方法の１つとなると呼びかけていた。日系人自身がアメリカの図書館に日本に関する図書を寄付していた例と、アメリカの公共図書館からの要請で日本に関する図書を寄付した例があった。アメリカ公共図書館に関する記述は、日本に関する情報の提供などの日系人からの働きかけのみであり、アメリカに関する情報提供や英語教室の開催など、アメリカ化を目的としてアメリカ公共図書館が日系人に対して働きかけていたと読み取れる記述

は見受けられなかった。

5.1.3. 両新聞のまとめ

両新聞で取り上げられた日系人のアメリカ公共図書館の認識は類似したものであった。日系人はアメリカ人はよく公共図書館を利用していると考えていた事がわかる。その反面、日系人のアメリカ公共図書館利用に関しては触れられていない。加えて、アメリカ公共図書館に関する批判なども存在しない。これらのことから、アメリカ公共図書館はアメリカ人が利用するものであると考えていたことが推測できる。一方、日系人にとってアメリカ公共図書館は身近な存在ではなかったのではないだろうか。アメリカ公共図書館について掲載されていた記事には、日本の情報に関する図書の提供をしたという内容が多かった。つまり、日系人にとってのアメリカ公共図書館とは、日本に関する正確な情報を提供し、日本に対する誤解を解く場であるとの考えで一致していたと考えられる。

5.2. 日本語図書館に対する認識

つづいて、日系人が日本語図書館に対してどのような認識を持っていたかを分析する。日本語図書館を設置する意義と実際に日本語図書館を設立した際の目的を明らかにすることで、日系人が日本語図書館をどのような存在として考えていたのかを分析する。

5.2.1. 『日米新聞』

前述のアメリカ公共図書館の状況は、日本語図書館の必要性を主張する理由の一つとなっていた。特に、アメリカ公共図書館における日本に関する図書の少なさはその理由の一つであり、先に引用した 1928 年の記事には、アメリカ公共図書館には日本に関する図書が少ないと述べた後、続けて「日本人自ら図書の蒐集をなし図書館を設置するほかにない。」[23]と指摘している。

加えて、当時の日本語図書館の状況をふまえて、日系人は日本語図書館の必要性を訴えていた。日本語図書館の利用状況について、1921 年の記事ではサター青年会の図書室を取り上げ、「書籍雑誌を見に来た者二千五百六十名を統計されている」[24]と報告がある。このように、図書室が利用されていた旨の記事がある一方、ほぼ同時期である 1920 年に掲載された記事では次のように記されている。

> 図書館らしいものは一つも見当たりません。尤もユタ州のサンユイサイドには日本読書会と云ふのがあり加州にも私立の和歌山文庫と呼ぶのがあり桑港には青年会に僅かの書籍が備へてあり（中略）これは皆図書室と云ふ程のものであるのは誠に遺憾です[25]

青年会などに設置されている図書室には僅かな図書しかないと日本語図書館の未熟さを指

摘している。さらに本記事は続けて「図書館を建てて同胞間の社会教育を盛んに」[26]することを求めている。また、1921 年には、一般市民から日本語図書館に関する記事が投稿された。その記事は、サンフランシスコ市に日本語図書館がなく、充分に読書ができないことを嘆いていた。「先づ言ひたいのは日本人図書館のないことだ」[27]と指摘した上で「日本人の書物屋に行けば弗で幾程と日本の円単位の数と同一に取られるから実際は十割以上にもなる。是れぢや全く書物を読むなと云ふのも同じぢや」[28]とアメリカでは日本の図書が高価であると言及し、日本語図書館の必要性を訴えている。これらの日本語図書館の現状のもとに、日本語図書館設立の意義が議論された。

日本語図書館設立の意義は、『日米新聞』の記事の中で 3 点言及されている。1 点目は日本語図書館を日本文化の中心とするという主張である。「桑港読書会が同胞文化（筆者注：日本文化）、生活の高調を叫んでから最早足掛け三年になる（中略）文化の中心となって人を作るに必要な図書館を建設する」[29]と記されているように、日本語図書館は日系人に対し日本文化を提供する場であると考えられいた。

2 点目は 2 世へ日本文化を伝えるという目的である。なぜ 2 世に向けて図書館を設置しなければならなかったのか、以下のように言及している。

> （筆者注：2 世に対して）米国で日本の文化を了解する道を開いて遣らねばならぬ。その一方法として予は市橋須市大学教授の意見—第二世が喜んで読むやうな日本の歴史文学、美術、宗教道徳などに関する英語の図書を各地に備て子弟のために図書室を造ることが最も緊急で而も適宜のことだと思ふ [30]

1 世は、2 世が日本文化を学ばなければならないと考えていた。そのため、英語で書かれた日本の歴史、文学、美術などの図書の提供を行うために日本語図書館を設置することを提案している。

なぜ日本文化を学ばなければならなかったのか。それは、日系人が自身の文化を学び、アメリカ人に日本ついて説明できる知識を得るためである。

> 日本人は偉大な文化を有していながら自らこれをしらず、しかも卑下していて何ぞ他に優秀の国民であることを認めさせる事が出来やう乎。自らをしるの道はまづ自ら自己の内心を反省し自己を研究する事である。（中略）永い歴史を有する民族は必ずある特殊の文化を持っているものである。また民族は特殊の文化を有せずには存在する価値がない。我が同胞は日米間にあつて双方の文化を理解し、紹介すべき良好な地位にある。自己を紹介するには自己それ自身を研究せねばならぬ [31]

とし、日本に関する事柄を学習するために日本語図書館を設立すべきであると述べている [32]。意義の 1 点目と 2 点目を含めて「図書館を建てて同胞間の社会教育を盛んに」[33]する意義があるとまとめることができるだろう。

3 点目は娯楽の提供である。「日本人街の中心に適当な娯楽場を欲しい」[34]と云う要望に対して、「桑港日会事務所階下を普段には娯楽所に当て亦小集会場として一般同胞に解放しやうと云ふ段取りが将に実現せんとしている事である」[35]と気軽な娯楽場の設置計画がある。その娯楽場に「一般同胞の娯楽場として新聞雑誌を備へ自由に閲覧に便し」[36]と、図書館という言葉は用いていないが、実質図書館と呼べる空間を作り、日系人の余暇としての娯楽に供することを目的としている。また、図書館設立会議において娯楽の点から次のように言及されている。「図書館設立の件は青年をして読書に親しませなほほかに悪いあそびをさけさせることにもなり目下の急務である」[37]と、青年の娯楽の質を高めるために日本語図書館を設立することは急務だと日系人は考えていた。

以上の 3 点の意義が検討された上で、日本語図書館が設置された。日系人の組織である市民協会が日本語図書館設立を会議で決定し、各地で設立に向けて準備を進めた。しかし、経費面で問題となり日本語図書館の設置が延期されるということもあった。経費や図書の準備が整う場合には、日本語図書館として設置された。設置された場合には、設置した理由や蔵書に関して具体的に新聞記事で報告されている [38]。日本語図書館の設置数を具体的に記した記事は調査期間内では見られなかったため、具体的な設置数は不明である。

これらの状況を経て実際に設立された日本語図書館の設置理由は、⑴日本を学ぶため、⑵研究資料を提供するため、⑶農業に関する資料を提供するためという 3 点があげられている。⑴に関して 1925 年には「第二世邦人より成る忠誠団サンノゼ支部に於いては青年の研究熱向上のために、同地日本人会内に文庫を創設して既に各種出版物を蒐集している」[39]と 2 世の日本に関する研究に供する事を目的として日本語図書館を設立していることがわかる。ここでは研究と記されているが、その実態は日本に関して学ぶ事を指しているため、学ぶためという意味で用いられている。つづいて、⑵に関して

> 総領事館では今春外務省より送付された日本及日本人の研究資料となる数百冊の書籍ならびに総領事館が永年かかつて蒐集した日米関係書籍その他の珍本数千部を今回一カ所にまとめ同館内二百一番のルームを総領事館図書館とし新設することとなり（中略）今後日米問題研究者は同所において十分に調査研究ができるわけである [40]

と日米問題研究者に対して資料を提供することを目的とした日本語図書館が設立されている。⑶に関して「吾人の計画は本社内（筆者注：日米新聞社）に農業に関する図書室を設け各種参考書類、試験場報告、各種標本等を網羅して読者の便を計らんとす」[41]と当時日系人が最も従事していた職業である農業に関する資料を提供する図書館の設置を計画していた。

実際の日本語図書館の蔵書に関しては「総領事館図書室に今回さらに新聞雑誌の保管所を設けることとなり目下過去一ヶ月間に総領事館へ送付された各種の新聞と雑誌を整理陳

列中である」とあるように、新聞雑誌の収集を行っていた日本語図書館もあった。その詳細は「在米邦人新聞並びに支那、朝鮮の新聞二十一種／英字新聞二十種／日本新聞約十五種／雑誌二十一種、政治、経済社会各種」と、日本語、英語を含めて幅広く東洋の図書を収集していた。

以上から、日本語図書館の実態として、日本文化を学ぶために利用されていたことがわかる。特に日系人 2 世が利用することを意識して設立したといえよう。2 世にとっての日本語図書館は教育的な側面が強く、日本について学ぶ場であり、その知識を利用してアメリカ社会において日本に関する正しい情報を提供することも求められていた。アメリカ人に対して日本の情報を提供することが重視されていることがわかる。一方、1 世を対象にした日本語図書館設立の理由は職業に関する情報収集であった。これは日本語図書館設立意義では触れられていない点である。職業に関する情報を収集するために 1 世が図書館を利用しようとしていたことがわかる。両世代にもアメリカ化についての言及が調査期間内で現れなかったという点は留意したい。

5.2.2. 『新世界新聞』

『新世界新聞』では、日本語図書館設置の意義を 4 つに分類できる。1 点目は知識獲得のためという主張である。1909 年に、図書館設立の意義に関して以下のように取り上げている。

> 而して能く人智の発達、品性の崇高を元むるも、亦決して得て望むべからざるなり、既に智徳の修養を欠き、向上進歩の実力を失ふの国民にして、（中略）同胞発展上の要素に、（多）大の関係を有する図書館設立の様の如きは決して雲煙過眼に附すべき問題に非らざる [42]

図書館設立の議論が現れ始めた初期の段階から、日系人の知識向上は日系人社会の向上につながり、それを担うものが図書館であると考えられていたといえる。しかし、1920 年代には「吾人同胞が若し教育の重大なるを知らば青年指導の機関も完成すべき筈なり。幼年者のプレー・グラウンドも建設すべき筈なり、図書館の如きも到る所に設けらるべき筈なり」[43]と日本語図書館が少ない理由を日系人の教育に対する意識の欠如と現状を批判的に捉えていた。この批判は、日本語図書館は文化や芸術なども含めた様々な知識を得るための機能を求められていたために起こったといえる。つまり、日本語図書館は知識獲得の場と考えられていた。

2 点目は 2 世に対する教育的役割である。1928 年に読者投稿で青年が次のように指摘している。「若し児女の教養を計らんとなればポケツトの五仙十仙を探りて彼等のために書物を買はざるが、これ子を愛する親心ならずや、即ち我ら青年を愛するなれば桑日すべから

く図書館部設置の機運を作るべし」[44]。この記事から、1 世の親達は次世代教育のために図書館を作るべきだと 2 世自身が主張していることがわかる。つまり、日本語図書館設立の意義として教育的役割があると認識されていたといえる。

これらの意義 2 点を図書館設立の意義の中で、教育のためと位置づけてまとめることができる。さらに、1909 年の記事は知識向上のため、という論調だったのに対して 1928 年の記事は 2 世に対する教育の為と強調されている。ここから、年を経るにつれ 2 世に目を向けた意義になっていることがわかる。

3 点目は娯楽のためである。図書館設置運動を推進する記事の中で、「日本人町に青年の適当な遊び場所なき為教育の目的と図書館の設置を先づ運動すること」と娯楽の目的も含めて日本語図書館の設立を推進していることが読み取れる。さらに、1909 年の記事においても日本語図書館の娯楽の機能を指摘している。

> 吾人は斬の図書館設置に対し、甚なる趣味を有し、同意を表すると同時に、（中略）少しく意見の存ずる所を語らしめよ。（中略）排日的白人の脅迫に対抗し、其は興奮し或は消沈し、時に勇気の勃々たるあり、時に心に快々たるものあり、其心的作用の不調和、不統一寧ろ自ら哀れむものありて存するなり、（中略）要するに内に慰安を興ふるものなく外に娯楽を同ふするの友なく、（中略）自暴自棄、邪悪の巷に堕落し、淫屏の風に侵蝕し、再び救ふべからざるの、往生を遂ぐるもの又決して少なからざるを悲しむ、（中略）故に社会は宜く彼等に向て、適当なる娯楽を興へ高雅なる遊戯を授くべきことを、覚悟せざる可からず[45]

当時の日系人が精神的に疲弊していることと、賭博に代表されるような生活の乱れに着目し、日本語図書館をよりよい娯楽を提供する場として設立することを主張している。つまり、日本語図書館設立の議論が起こった当初から日本語図書館を娯楽の場として考えていたといえる。ただし、この「娯楽」というのは、文脈から生活の質を向上するために読書を推進しているといえ、娯楽の名の下に日系人に健全な趣味をつくるためである。

4 点目は日本に関する研究のためである。「桑港には欧米の書数千万巻を完備しある市設の図書館及支部各所に在るも在留同胞の為の東洋の書籍を蔵する図書館なきを以て第一世及び第二世の研究及び参考資料のため東洋の新蔵書冊数万巻を装備する図書館の必要」[46]とアメリカ公共図書館に日本に関する図書の蔵書が僅かしかない事を指摘した上で、日系人に対して日本に関する研究や参考資料の収集を目的とした日本語図書館の設立を求めている。

これらの意義を受けて実際に日本語図書館が設置される。調査期間中に初めて日本語図書館に関する記述が掲載されたのは、1909 年の在米日本人会に附属された図書室に関する記事である。「在米日本人会にては出来得る丈内外の有益なる図書を備附け一方には同会執

務上の参考に資すると共に一般在留同胞閲覧の便宜にも供せんとの希望」[47]と在米日本人会では図書を収集しており、利用を日本人会会員に限定せず、一般の日系人も対象としていることがわかる。さらに、蔵書に関する記述もあり、次の内容の図書を挙げている。

> 日本法律書、国際法歴史及文学書等の外加州法典、合衆国教育の議事録、加修議会議事録を始めとし南米通商貿易及び移民事情、米国各州の教育状態に関する報告書、合衆国政府の通商貿易に関する報告書、米国各州移民労働状態実報告書等[48]

アメリカの法律や教育に関して、さらに移民に関する情報も収集していたことから、アメリカに関する情報、移民に関する情報を一般日系人に提供することを目的として図書を収集していたことがわかる。在米日本人会について、記事中でどの地域のものか明らかにしていないが、記事が掲載されていた紙面からサンフランシスコ市だと推測できる。

つづいて 1912 年に設立されたストージ図書館（Sturge Library）である。これは、サンフランシスコ市の英字新聞にも取り上げられた日本語図書館である[49]。アーネスト・アドルファス・ストージ（Ernest Adolphus Sturge）が設立した図書館であるため、ストージ図書館と呼ばれている。ストージはペンシルバニア大学で医学博士（M.D）と博士号（Ph.D）を取得しており、1886 年に基督教青年会（以下YMCAと略す）を設立し、YMCAの形成発展に貢献した[50]。それだけでなく、日本人長老教会長老の説教者として活躍し、日本人教会を支えた存在であった[51]。「熱心親切に同胞青年の教養示導に尽力せられつつあり然れば嘗て叙動の御沙汰をさへ受けたる程なるが同氏は有益なる蔵書一切を長老協会に寄附し青年館内に図書館を開設する」[52]と記されているように、ストージは日系人に対して教養を指導する立場であり、その延長線上で日系人に対して有益な図書を図書館へ寄付し、図書館の開設も進めた。さらに、日本語図書館がYMCA建物内に設置されたことも特徴である。YMCAはサター街に図書室のある本部が設置されていたため[53]、先の『日米新聞』に取り上げた「サター青年会」の図書室とはこのストージ図書館のことを指している。

新聞記事に図書館設立の目的は明確に記述されていないが、当図書館も青年の教育を目的として建設されたのだといえる。蔵書は「英書千二百四十五冊、和漢書七百九十九冊、日本雑誌、三十八種、英文雑誌二十五種新聞十種保管百五十冊」[54]と日本語、英語と幅広く収集しており、英語が不得手の日系人も日本語図書が入手できる場であったことがわかる。さらに、YMCAはストージ図書館が開館した 5 年後に「子供の図書館を新設」[55]した。詳しい目的や蔵書などの記述はないが、日系人が 2 世に対して日本語図書館を設立していたことがわかる。

さらに、1922 年に上山草人によってサンフランシスコ市で創刊された月刊雑誌である『東西時報』の三田平八が日本の雑誌を収集し、貸し出しを行う図書館を設置した。『東西時報』は日本主義の推進を目的として創刊された雑誌であった[56]。

故国の雑誌全部を取り寄せ希望の人に五日間に一冊宛一か月に六冊宛を持ち廻って交代に読ませるやうにする由にて雑誌の種類は政治文学宗教娯楽等何でもあり別に買って読む必要をなくさせる考えである[57]

日本語雑誌を貸し出していることから、英語の利用が困難な日系人が利用の対象であったことがわかる。さらに、蔵書は政治、文学、宗教という教育を目的として収集された雑誌と、娯楽を目的として収集された雑誌側がある。つまり、ここで取り上げられている日本語図書館は、主に英語利用が困難な者を対象に、教育と娯楽の提供を目的として設立されたことがわかる。さらに、「買って読む必要をなくさせる」という記述から、日本の図書が高価で読めないという問題を解消するという目的もある。雑誌の種類として、政治、文学、宗教とは別に娯楽についても言及していることから、この娯楽は余暇の楽しみとしての娯楽であると推測できる。

以上のことから次のことがいえる。まず、ストージが青年の教育活動に熱心に取り組んでいたことから、日本語図書館の目的の１つは教育であると指摘することができる。つまり、教育と娯楽のために設置されており、これは意義とも合致している。対して、娯楽を目的として余暇的な図書を提供していた日本語図書館もあった。

アメリカ化運動という点から蔵書傾向を検討すると、日本語図書館設立当初にアメリカの情報に関して多く提供されていた。つまり、図書館のアメリカ化運動のサービスの１つである「アメリカ情報の提供」を日本語図書館は行っていたといえる。ただし、当時の日系人が日本語図書館を具体的に利用していた様子などの記述は、管見の限り見受けられなかった。

5.2.3. 両新聞のまとめ

まず、『日米新聞』の方が日本語図書館の設置に関する意義や目的を細かく言及している。一方『新世界新聞』は主にサンフランシスコ市の日本語図書館に関して多数取り上げ、蔵書傾向にも言及している。このように各新聞で取り上げ方は異なるが、記事に記載されている主張はほぼ類似している。

日系人の日本語図書館に対する意識として、教育を目的としている点があげられる。特に、日本に関する知識を得ることを目的としていた。その中でも『日米新聞』では 2 世の教育に重点をおいて取り上げている。つづいて、『日米新聞』では日米問題研究者のために日本語図書館で資料を収集する、と明確に日本語図書館が研究を支援しているとわかる記述がある。『新世界新聞』では、このように明言されたものはないが、当初「知識」と漠然としたものが、1920 年代になると 2 世の教育という面が強調されるようになった。また、図書館の「娯楽」としての機能にも言及されている。これは、賭博の流行などの乱れた生

活習慣を改善するために健全な趣味として推奨されていた。

最後にアメリカ運動に関してである。『新世界新聞』ではアメリカ化運動のサービスの１つである「母語によるアメリカ情報の提供」が取り上げられている。日本語図書館はアメリカ化運動の一端を担っていたと言える。

5.3. アメリカ化運動と図書館

日本語図書館について記述されている記事からは、日本語図書館の機能としてアメリカ化運動に関する言及はアメリカに関する情報の提供が挙げられていた。図書館に対して日系人はその他にアメリカ化運動の機能を求めていたのだろうか。公共図書館のアメリカ化運動に関するサービスである「アメリカ情報に関する図書」と「英語教育」に関する記事から日系人の意識を検討する。

5.3.1. 『日米新聞』

『日米新聞』では、アメリカ情報に関する図書と図書館について以下のように取り上げている。「一部堅実の婦人間には家庭向きの実用的な読み物が流行している尚ほその多くは邦訳ものよりは原書」[58]と記述されているように、アメリカでの家庭向きの実用的な図書が一部女性の間でよく読まれ、アメリカに関する情報を読書から得ていたことがわかる。さらに注目すべき点は、「昨今の図書館等は之等の婦人（筆者注：家庭向きの実用的な読み物を読む女性）が多数を占めている」[59]とアメリカの公共図書館か日本語図書館か言及されていないためどちらか不明ではあるが、日系人の女性がアメリカに関する情報を求めて図書館を訪れていたことがわかる。

このように、日系人はアメリカに関する情報を図書から得ていたのである。新刊の出版情報の１つとしてアメリカの情報に関する図書が紹介されている。「（筆者注：『在米日本人と宗教』という小冊子を出版した目的は）一般邦人の精神修養と第二世の宗教や育奨励に資せんがため」[60]と、日系人１世２世両者の教育を目的として発行されている。さらに、「移民の為めに米国の政体各州の政治、移民法、米国旗、憲法等の概念を教へ込み善良なる愛国的市民たるの道を学ばせる目的」[61]と明らかにアメリカ化を意識して発行されている図書がある。その図書は、「桑日会では会員一般に配布することとなり八百部の輸送を依頼し、（中略）速やかに一般会員に配布することとした」[62]と日系人に広く配布され、日系人自身も積極的にアメリカ情報の提供に取り組んでいたことがわかる。このように、図書によってアメリカ化運動が行われていたといえる。

英語教育に関する記事では図書館との関連に言及するものはなかった。ただし、英語教育はアメリカ化を目的として行われていた。

米国語たる英語教育の普及を図る事而して英語を通じて米国建国以来の大精神たる民主主義に根ざす米国主義を一般に徹底せしめ、以て善良の市民を作り、国家国民として有終の美をなさんと云ふに外ならぬのである。而して此の目的を貫徹せんが為めにはて朝野公私の別なく、大学より始め各種の学校、青年会、協会悉く全力を傾注して懸つたのである。[63]

アメリカに関する知識を得る為に英語の教育が奨励されており、大学、学校、青年会、協会などの各団体と協力すべきであると述べられている。さらに、英語教育について以下のように言及している。

英語学習の風大に邦人社会に勃興するならば、英語を通じて米国の事情も漸次了解せられ、又邦語を以て米国の研究にも興味を有し得るに至り、米国了解の歩を著るしく進められて、在米邦人の地位も自然に向上し、信用も加はり来り、近隣の米人家庭との交際も円滑に行なわるるに至り、諸種の排日的傾向も諸問題も一掃せらるるに至らん。[64]

英語を学ぶことにより、アメリカ人との交流を持つことができ、ひいては日系人排斥の解決の一助となると考えられていた。このように、アメリカの情報を得ることと日系人排斥解決という目的は、日本語図書館に対する日系人の意識と一致することがわかる。

以上のことから、まず、アメリカ情報に関する図書を求めて日系人女性が図書館を訪れていたことは注目すべき点である。図書館サービスの中でもアメリカ化運動の中の１つとされているアメリカ情報に関する図書の提供を行っているということは、図書館はアメリカ化運動の機能を有していたといえる。一方、英語教室に関しては、日本語図書館を利用していたという記述は見られなかった。アメリカに関する図書を日系人関連の各機関に配布したり、英語教育を各機関で行うなど、日系人自身はアメリカ化の必要性を認識していた。

5.3.2. 『新世界新聞』

『新世界新聞』では、アメリカ情報に関する図書と日本語図書館の関係について示唆した記事がある。

在米日本人会にては最近に於いて在米同胞間の啓発運動に要すべき諸種の参考書の蒐集中なりしが昨日同会宛オハヨウ州禁酒会より酒類の害毒に関する参考書及び華府（ワシントンD.C.）国際矯風会より矯風に関する書類紐アッソシェーション・プレスより肺結核の予防法及び矯風に関する詳細なる説明書及び感ざす大学教授マツキーバー氏より児童教育に関する参考書到着せりと[65]

このように、在米日本人会はアメリカの各州より啓発運動に必要な図書や衛生問題に関す

る図書、加えて矯風に関する図書などを収集していた。「在米日本人会にては最近に於いて在米同胞間の啓発運動に要すべき諸種の参考書の蒐集中」[66]とあるように、日系人のアメリカ化に供することを目的として図書を収集していたことがわかる。第 5 章 2 節 2 項で触れたように在米日本人会に設けられた図書室の蔵書に関する記述に

> 日本法律書、国際法歴史及文学書等の外加州法典、合衆国教育の議事録、加修議会議事録を始めとし南米通商貿易及び移民事情、米国各州の教育状態に関する報告書、合衆国政府の通商貿易に関する報告書、米国各州移民労働状態実報告書等[67]

とあるように、日本語図書館はアメリカに関する情報を収集していたことがわかる。

一方、英語教室に関する記事では日本語図書館との関連を読み取ることはできなかった。「排日感情抑制の一手段として日本人は大いに白人に接近せなければならぬ」[68]との考えから英語教室は多く開講されていた。しかし、英語教室を主催するのは「佛教会附属英学校」[69]や「イマーソンスクールに於ける日本人婦人のための特別英語教室」[70]など学校や教会、大学などであった。行政が英語教室を支援していた記事もある。「米化運動の一部としてガレリオ英語学校教室（中略）多くの日本人の出席を希望すと尚これは市教育局の事業なれば授業料などは一切無用だと」[71]とサンフランシスコ市の教育局がアメリカ化運動の一部として無料で英語教育を行っていた。

日系人のアメリカ化に対する意識は、『新世界新聞』では新刊書発行の報告としてアメリカの情報に関する図書の紹介からうかがうことができる。記事では主に図書の内容が簡単に紹介されており、その内容は大きく 5 つに分けることができる。1 点目は、アメリカにおける仕事に関する情報である。「加州中央農会にては加州のポテート耕作業に関する冊子を発刊」[72]や「内容は全加州に亘りて農商工其他雑業等苟も同胞経営に係るあらゆる方面の事業を歴史と統計とを根拠として叙述通論せる」[73]などの記述からわかるように、農業、商業、工業に関する図書が発行されていた。2 点目は日系人に対して提供されていたサンフランシスコ市の日本人町に関する情報である。「数年前の如く邦人が街路に於いて罵倒暴行を受くるが如き事殆ど無く（中略）是等最近に事情を詳説し尚ほ桑港各所古積は更なりしない商店、遊覧所其の他有ゆる桑港に一般を紹介するに是るべき案内書」[74]のような、サンフランシスコ市の日系人排斥の風潮を否定し、現状と詳細な紹介をもって日系人をサンフランシスコ市に呼び寄せる事を目的としたものがある。さらに「『桑港日本人町案内』は（中略）桑港全市の色刷り地図や上町商店案内図を挿入し移民事項の注意や地方顧客の便を賜つた遊覧案内その他有益な記事」[75]のようにサンフランシスコ市へ訪れる日系人に対してサンフランシスコ市を紹介するパンフレットのようなものを発行している。

3 点目は「移民や外国人に読ませるためにドーター・オブ・ザ・アメリカンレボルーション本部が発行した『合衆国便覧』日本語の部」[76]など、日系人に対して発信されたアメリカ

社会に関する情報である。その他にもアメリカの帰化法に関する図書などが発行されている。4 点目は移民問題に関する情報である。「『新日本』と言ふ雑誌を在米同胞問題に関する機関雑誌とせん」[77]というように、日系人問題に関する機関誌が発行され、日本人会に寄附された。5 点目は移民に関する情報である。4 点目と異なり、「人口調査、会計報告、日本人渡米数、日米間船舶出入数、思想欄を設けて桑港及び紐育の英字新聞の社説二三」[78]など、移民に関する資料となる図書を発行している。これら 3 点は移民に関する図書として大きく分類できる。

以上のことから、日本語図書館の機能としてアメリカに関する情報の収集が行われていたことがわかる。英語教室の日本語図書館の利用は言及されていなかったが、アメリカ化運動の一部として推進されていた。さらに、アメリカに関する情報の提供も様々な側面から行われており、日系人は自身をアメリカ化することに対して意識を持っていたといえる。

5.3.3. 両新聞のまとめ

日本語図書館とアメリカ化運動の関係について、『日米新聞』では、女性が図書館でアメリカの生活に実用的な情報を収集していたと取り上げられていた。これはつまり、日系人女性がアメリカに関する情報を図書館で収集していたといえ、アメリカ化運動の取り組みであったといえる。さらに、『新世界新聞』には日系人のアメリカ化に関する図書を在米日本人会が収集していたとの記述がある。つまり、日本語図書館の機能の 1 つとして移民サービスにおけるアメリカ化運動の中の「アメリカ情報の提供」という機能を果たしていたと考えられる。

アメリカの情報に関する図書に関して、『日米新聞』は特に教育を目的として発行していたことを強調している。さらに、発行された図書の内容から明らかにアメリカ化運動を意識したものがあった。対して『新世界新聞』では、アメリカ化運動を示唆している内容の図書がある一方で、アメリカでの仕事に関する図書やサンフランシスコ市の案内など、アメリカで暮らすための必要な情報が掲載されている図書を幅広く紹介していた。

5.4. 日系人の読書の意義と実態

これまで、日系人と図書館の関係について見てきたが、そもそも日系人は読書をどのようにとらえていたのだろうか。各新聞で取り上げられた読書の目的から日系人の読書観を分析していく。さらに、日系人の読書環境や当時読まれていた図書から日系人の読書の実態を明らかにしていく。

5.4.1. 『日米新聞』

読書の意義について、『日米新聞』では 5 点言及している。1 点目は健全な趣味を持つためである。「趣味娯楽の種類も時代を逐うて増大変化してくるが、而も読書を以て最高、最上、最善、最良の娯楽なりとなすことに対して意義を挟さみ得るものは絶対にない」[79]と読書が娯楽の中で最も優れた趣味であると断言している。また、子どもの読書について、

> 何れの父兄も子どもが花遊びをして徹夜するよりも寧ろ読書して徹夜する方が（いづれも弊害はあるとしても）安心であらうし、苦痛でなかろう私どもは私どもの子どもに成るべく高尚な趣味に生きるやう善処しなくてはならない[80]

と他の趣味と比べて健全な趣味として子どもに対しても読書が奨励されている。つまり、全世代に対して読書は健全で高尚な趣味であると主張している。

2 点目は教養をつけるためである。「在米同胞ことにその第二世は情操の教養を十分に興へなければならぬ。即ち科学的、芸術的情操の陶冶をはからなければならぬ一高尚なる科学上の趣味音楽文芸、美術上の趣味を喚起向上せしめねばならぬ」[81]と言及されているように、特に 2 世は文芸を含む文化的・科学的な教養をつけなければならないと考えられており、そのために読書が一手段として主張されていた。さらに、「修養にもなる随一の読み物は偉人の伝記に若くはなからう」[82]と伝記を読むことによって教養がつけられると考えている人もいた。このように、読書を通して教養をつけることが重要であると考えられていた。

3 点目は語学向上のためである。「読んで意味のよく分かる本なり、雑誌なりを多く読むが大切である」[83]と読書を通して英語の勉強が行われていたことがわかる。さらに、音読の重要性も言及されており、「始終英語を語る様に奨励して頂きたい、其方法として児童に対し芝居風の書物を買与へ之を繰り返し繰り返し読み又は実演させて確と覚え、自然に発表しうるようにさせる事もよい」[84]と子どもに図書を与えてそれを繰り返し発音させることにより英語を勉強することを提案している。また、英語のみではなく、

> 漢字教育は日本でも却々困難を殊に米国に於ける邦人児童は米人の公立学校にて既に一定の授業を受けて後極めて短時間を国語教育に咲く為猶ほ更も困難である。（中略）子どもの読み物に適する様な雑誌、新聞小説、課外読本等を選択して児童に与えるのが最も肝要[85]

にみられるように、日本語を学習するためにも図書は利用されていた。

これらにあげた意義には教育という特徴があることがわかる。ここで用いられている「娯楽」は、健全な趣味を持つという意図で書かれている。これは娯楽の向上が目的であり、娯楽とは知識を得ることと言い換えることができるため、ここで用いられている「娯楽」は余暇を楽しむという意味の娯楽とはいえない。

4 点目は精神的な安心を得るためである。

婦人は画もすると感情的に陥り、常識を失し、或は生理的疲労より発生する神経感覚を強大ならしむる等の先天的傾向を有するからして、是等の疲弊を未然に防止し或は斯る状態を緩和するに就て読書は最も有利なる精神剤であります[86]

と特に女性は精神的に不安定になりやすいため、その精神的な疲労を緩和するために読書は有効であるとしている。

5 点目は情報収集である。「職業上に於ける利益はこれあるが為に甚だ大であると信じる。初めて商売をやる人其の売買を盛んにせんとする人、各々邦字新聞を通して得る所は大であらう」[87]と職業上の情報収集ができるとして英字新聞だけではなく、日本語新聞の重要性を 2 世に対して示している。この記事は日本語新聞の閲覧を促しているものであるが、読書を通して情報収集を行っていたことが読み取れる。

このように、読書が奨励されていたのだが、実際はどのような状況だったのだろうか。日系人の読書環境は、読書する時間がないということと、日本の図書が高価であるという問題点が存在する。文化活動を推進する記事には、批判として「文学や芸術を論ずる程の閑日月が何処にあらう我々は働いても働いても足りないのだ。仮令幾分時の余裕があつたにせよ、我々は終日の激しき労働に疲労困憊して了してそれ以上また特別な会合などに出る様な精力はないのだ」[88]という主張があると述べられている。つまり、読書とは明言していないものの過剰な労働の結果、読書を含む文化活動が困難であることが読み取れる。後者は、「一冊の幼年雑誌にも一部の小学読本にも十割から十五割の利益を乗せられたなら、マア暴利の部類に入るでしやうが、そんな高い本を推し付けられて黙つて買はねばならぬことはないでしやう」[89]や「日本の雑誌や刊行書が欧米のそれに比較して余りに高い」[90]とこれらの記事から日本の図書や雑誌が高価で簡単には買うことができないことがわかる。読書が行われる時期は「是れまで忙しかった地方は農閑期に這入って今の所一寸仕事もなし其の上毎日雨に見舞はれるので勢ひ部屋の中にいることが多く当然の儘に自然と読書子となる」[91]と取り上げられているように、農閑期によく読まれていた。さらに、11 月には読書週が設けられている[92]。問題点も見受けられるが、「在米同胞が米国に於ける外国人中比較的に読書力豊であるといふことは吾人が常に誇りにする所である」[93]とアメリカに居住している他の移民より日系人の方が読書をしていると主張している。

また、読書環境に付随して、日系人 1 世は子どもに読ませる本を選択する際の注意点についても新聞で取り上げている。「加大のシ・デ・ミード教授は少年少女学生に、日々の新聞を熱心に読むことを奨励している。何となれば新聞紙をよく読むことによつて子ども達の注意が教科書などよりももつと日常生活に向けられるからである。」[94]と新聞を読ませることを奨励したり、「誰の拵いたものでもよいが、なるたけ破損しない、絵の毒々しくない子どもの気分にしつくりした、そして書いてある言葉でも又は童話などでも読んで聞かせ

てすぐ分かるもので欲しい」[95]と子どもの理解にかなう図書を選択するよう呼びかけている。後者に関しては、「いたづら子が大人に対して悪戯を加へてる、一見滑稽なものでも幼児は面白いことにしてその真似を悪いと知らずにすることがあります」[96]と具体的に図書の内容に関して注意を促している。このように、アメリカ人の意見も参考にしながら 1 世は子どもが読む本に対して気を配っていたことがわかる。読書に教育的要素を求めており、ただ読書をすればいいのではなく、読書の質を求めていたといえる。

さて、このような読書環境のもと、実際にどのような図書が人気であったのだろうか。例えば、「最近の読書界」という記事では「一番不人気なのは商業書類や金儲けの当込物工業書類それから一時流行の魁であった労働問題物もすつかり下火となった何と云っても豪勢なのは文学物の中でも流行作家（中略）堅いものは一般に売れ行きが鈍い」[97]と当時の読書状況を記している。図書の中でよく読まれているものは婦人雑誌であり、「婦人雑誌に至つては発行数は月々増加し主婦の友は三十三万、婦女界に十七万、婦人世界十八万といつた様な状態で婦人ものが全部で百万に余り販売が行われてをります」[98]と、合計して 100 万冊ほど売られていることがわかる。図書の内容としては、時期によって多少差が出てくるが、「在住同胞の読書といへば娯楽的という方が主」[99]と娯楽的なものが多いと述べられている。具体的には以下のように述べている記事がある。

> 一等良く読まれるものは文学物で次は宗教と云った風のものですが工学、理学、医学、教育学と云った専門的のものになると殆んど出ないと云って良いくらいです、文学の内でも夏目さんや黒岩さんの小説から講談本は矢張り歓迎を受け雑誌の中では婦人に関するものが一番良く売れ解放、改造のやうな高級のものや運動の雑誌も相当に出ています[100]

このように、文学、講談など「軽い読み物」が中心であるが、宗教系の図書も需要があったことがわかる。雑誌の中では婦人向けのものが多く、これは他の記事でも言及されているため、当時の日系人の中で主流であったことがわかる。2 世の購入する図書に関しては「教科書としてよく読まれるのは文部省編纂の国定教科書の修身、読本等であるが第二世の中には既に『ほととぎす』『金色夜叉』などを読むお嬢さん達も多く益々この傾向が著しくなつてくる」[101]と書店では教科書とされる図書をよく購入しており、それ以外のものであっても固い図書を購入するため、日本語図書を購入する 2 世は学習に対しての意識が高いことが伺える。

さらに、「一部堅実の婦人間には家庭向きの実用的な読み物が流行している尚ほその多くは邦訳ものよりは原書」[102]と記述されているように、アメリカでの家庭向きの実用的な図書が一部女性の間で流行しており、アメリカに関する情報を読書から得ていることがわかる。さらに注目すべき点は、「昨今の図書館等は之等の婦人（筆写注：家庭向きの実用的な

読み物を読む女性）が多数を占めている」[103]とアメリカの公共図書館か日本語図書館か言及されていないためどちらか不明ではあるが、日系人の女性がアメリカに関する情報を求めて図書館を訪れていたことがわかる。

以上をふまえると、まず、読書の意義としてあげた 5 点中 3 点が読書の教育的側面に関して言及していたことから、読書を教育活動の一部として考えられていたといえる。さらに、娯楽の向上のために読書を推奨している理由として、賭博などの防止をするためということが強調されている。しかし、実際に購入されていた図書は娯楽や趣味のものが多く、読書の意義で強調されている点と実態には差があったといえるだろう。つまり、日系人の多くは趣味として軽い読み物を好んで読んでいたのである。

アメリカ化の視点から読書の状況をみると、婦人向けの雑誌や図書などでアメリカの習慣を学んでいるという点から、実際に日系人は読書からアメリカに関する情報を得ていたことがわかる。さらに、女性がそれを図書館で利用していたと報告されていることから、図書館におけるアメリカ化運動が機能していたといえる。しかし、読書の手段として図書館を推奨する記事はほぼ見受けられず、図書が高いため図書館を設立すべきだという主張が中心であった。

5.4.2. 『新世界新聞』

読書の意義について、『新世界新聞』では 3 点言及している。まず注目すべき点はアメリカへ同化する一手段として読書を挙げている点である。「沿岸に於ける同胞が外人と同化せざるの理由は外見にあらず風采にあらず皮膚の色にあらず、宗教及び文学の趣味にあり」[104]と、同化出来ない原因を宗教や文学にみる意見があった。これを受け、

> 文学上より同化の実を論ずる者はすくなけれど学実に於いてはもっとも実行しやすき方法なりとす文学に於て趣味思考を同ふすれば黄白人種も塵を交へて共に学び、共に語り意気投合して友愛の情出で其間少しの懸隔を見るなしこれ高尚なる同化の方法ならずや

と文学を通してアメリカの考え方などの知識を学び、アメリカ人と交流をもつことによってアメリカ化を図ろうとする主張がある。さらに、家庭の主婦の趣味に関する問題を扱った記事では「米国の平易な雑誌でもポツポツ読み始め何時になつても日本の婦人雑誌にばかりかぢりついて居らず米国の婦人雑誌を読んで米国の方の知識や趣味を取り入れる方が善からう」[105]とアメリカに関する情報を進んで入手し、生活の中にアメリカ的な趣味を取り入れることを奨励している。つまり、読書を通して日系人のアメリカ化を行おうとしていたといえる。

2 点目は知識獲得のためである。「研究に資し、修養に有益ある書籍を多く座右に備へる

ことは、朝夕師友に接すると同じである。（中略）書籍を師友としていると、書籍は絶えず座右にあるものであるから、之に依つて朝夕師友として有益なる訓戒を受ける事が出来、種々の知識を得る事が出来る」[106]と教養を学ぶための図書を積極的に読み、知識を獲得する事が重要であると考えられていた。例えば、女性に対して「『女の読み物』として書かれた低級な物」[107]ではなく、「男の読み物を読む習慣を付けて現代人として知るべきことを男と対等に知識しやうと努力せねばなりません」[108]と呼びかけている記事がある。ここでいう「男の読み物」とは「近頃の新聞や男子の読む雑誌には可成有益な学説が掲載され、また現代人として真面目に考へて見ねばならぬ個人及び社会の問題がいくつも掲載されている」[109]ものである。つまり、男性だけでなく、女性も知識を得るための図書を読まなければならないと主張されていた。さらに、「読書によって自己教育を試みる」[110]と新たな知識を吸収するための読書を教育であると明言している記事もある。

これら 2 点の目的を持って読書を行うことを次のように述べている記事がある。「読書と静思とは慰安也、教訓也、指導者也、又悟達の道者也。而して同胞社会を健全に発達せしむ可き要素の一たり」[111]。つまり、読書の教育的側面、加えて慰安的な側面は日系人社会の生活の質を高めることが出来ると考えられていた。

3 点目は心を豊かにする作用である。子どもの教育に読書を用いる理由の中で「想像力を豊富に」[112]するためと挙げられている。「児童文学は児童の想像に訴へるものが多く従つて無限の想像の世界に彼等を導いてゆきますそれからそれと盛んな想像を巡らせてから児童の想像力の養成には甚だ価値があります」[113]と読書によって想像力が高められることを示している。これは言い換えると読書によって心を豊かにするということである。さらに、子どもに読書習慣をつけることを訴えた記事では「彼等（子ども）に心の富を与へよ」[114]と読書が心の富となることを示している。この読書の意義の対象は主に子どもであることがわかる。

さて、このような意義のもと、実際の日系人の読書環境はどのようなものであったのだろうか。『新世界新聞』では日系人の書店は図書が充実していたことを指摘している。「在留日本人の社会における民衆図書館とも云ふて良いあれだけの多種に上る書籍を積み重ね並べたてて居る書籍店が此の移民地に多数あるのは寧ろ脅威であると新渡米の知識階級の人々が口を揃えて講釈する」[115]。このように、図書館と表現するほどの図書が書店に並んでいた。さらに、「燈火まばらに輝く夜の日本人街を歩むものはこの民衆図書館に群がる多数の日本人を見るであらう。婦人多数も交へて新しい単行本や雑誌のページを繰る音が静かな書籍店のうちの空気に響いている」[116]と多くの日系人が書店を利用していたことがわかる。

子どもの家庭での読書環境に関して「親達は事業の経営に余りに忙しくて子供の教養の

事を考へて居られない」[117]と子どもの読書状況が不十分であった事が伺える記述がある。その環境の中でも、子どもに対する図書選択法に関して提案している記事がある。子どもの読む図書は「感受性の鋭敏な児童に単に面白いからといふ理由だけで何等の選択もしないで手当たり次第に好きな者を読ませるといふことは甚だ乱暴なやり方で児童の性格上に良くない変化を来」[118]すと、どんな図書を読んでもいいということではない。「児童の読み物は大体左の二つに区別する事が出来ます、一つは情操方面に属するもので、此の一つは知的方面に置するものであります」[119]と子どもの図書を情操面と知識面の二つにわけ、前者は「伝記とか逸話」[120]、後者は「簡単な機械科学や物理、科学等の知識」[121]を得られる図書、さらに「新聞」[122]などを推奨している。このような推奨図書は、先に示した読書の意義の「知識獲得のため」「心を豊かにする作用」の 2 点と合致している。

つづいて、実際に当時どのような図書がよく読まれていたのかをみていく。読書界の状況については様々な記事で取り上げられている。例えば、1916 年には「如何な本が読まれる」と題して、以下の様な内容が取り上げられた。

> 近頃如何な本が最も売れるかを五車堂（筆者注：日系人書店）に聞いて見る、雑誌では依然として太陽の部数が多くて之は内容が如何とか云ふよりも名で行動を継いでいる傾きがある、次は婦人世界あたりで之は日本人婦人の増加は無論第一の原因だが男子の読者も相当にあるそうである、近時特に売れるのは講談類の雑誌だ、之には目下五種計りあるが何れも羽の生へた様に売れ行きが良い、これに実業の日本、実業の世界等も好評だと云ふ、書籍では女に関したものが最も売れる [123]

最も読まれている本は娯楽雑誌や講談ものなど軽い読み物であり、婦人雑誌を男性も読んでいた事がわかる。つまり、男性も女性も読書を娯楽として楽しむ人が多かったといえる。さらに、男性の中では職業上役立つ雑誌も多く読まれていたことから、仕事に関する情報収集なども図書を通して行っていたことがわかる。一方、1924 年の記事では十年前の読書事情と比較して次のように述べている。

> 同胞読書界の模様はと聞いて見ると十年前と今日とを比較して驚くのは智識階級の非常な増加です徒然を慰める暇つぶしに安価な三文小説と云つた風の単行本や雑誌がむかし全盛だつたのが今の読書子は自ら研究する態度で種々の高踏的な本を買つて行くと云ふ有様となつて来ました、雑誌にしても現代とか中央公論とか云ふ新時代を標榜した雑誌が第一位を占め次が地方うけの講談倶楽部とか云ふ講談ものです、（中略）婦人公論とか云ふ様な新時代の諸相を伝へる雑誌の売れ行き旺盛は時代に目覚めた婦人の多い事を物語るものです、単に通俗の婦人雑誌では既にだめになってきました、

このように、10 年前と比べ読書事情が明らかに変化ていた。1916 年の記事では主に娯楽雑誌が流行していると述べられ、1924 年の記事でもそれを指摘している。しかし、1924 年現

在は、講談ものなどの軽い読み物の需要大きいが、知識獲得を目的として読書を行う人が増加した事がわかる。つまり、年が経るにつれて読書の目的が娯楽という側面から教育的なものへと変化していったといえる。

まず、同化の方法の一つとして読書を提案している記事から、日系人は読書を通してアメリカ化を行う事が出来ると考えていたと思われる。この読書の意義を含め、当時の日系人は読書を教育的な役割があると考えていた。子どもに対する図書の選択方法からも、子どもに教育を推進していたといえよう。一方、実際に読まれていた図書をみていくと、1910年代は娯楽雑誌や講談などの軽い読み物が多く、読書の意義と乖離していた。しかし、1920年になると、日系人は軽い読み物を読むものの、それだけでは満足せず、知識獲得を目的とした読書を行うなど、意義に近づいていることがわかる。読書の意義の中で、アメリカ化を行う事ができると述べられていた反面、実際にはアメリカ化に関する図書の読書に関して記したものはなかった。

5.4.3. 両新聞のまとめ

両新聞とも読書を教育活動の一環とすることを強調している。しかしながら、実態としては娯楽としての軽い読み物がよく読まれていたという現状であった事も共通している。『新世界新聞』からは、時期によって図書の流行が変化していたことが判明し、1910年代までは軽い読み物が中心であったが、1920年代になると教育的な図書も読まれる傾向にある事が明らかになった。アメリカ化に関しても、両新聞ともに読書は日系人がアメリカ化する手段の一つとして考えられていた。『新世界新聞』では「同化」という言葉を直接使用してアメリカ化の一手段としてアメリカの文学を読むことを推奨している。一方『日米新聞』からは雑誌や図書の内容からアメリカの習慣を日系人が学んでいた事がわかる。

5.5. 日本語新聞に見る日系人の図書館意識

以上に見てきた内容を総括して日系人の図書館意識について考察する。『日米新聞』は発行者である安孫子の影響から、教育に焦点を当てた記述が多い。対して『新世界新聞』は客観的に出来事を報告する記事が多い。しかし、両新聞に意見の大きな相違が見受けられなかったため、本節では区別せずに考察する。

当時の各新聞記事からみると、日系人の読書に対する意識は高かったといえる。読書を推奨するだけではなく、図書の質についても言及しているため、読書の質も重視していることがわかる。読書環境としては日本の図書が英語の図書よりも価格が高い、読書をする時間がないなどの課題はあったが、読書が趣味であるという人は他の移民グループよりも多いとアメリカ人からも評価されていた。読書の内容は娯楽が中心だったが、1920年代に

なると教育的な内容のものやアメリカに関する情報も読書を通して入手していた。

このような環境の中、日系人はアメリカ公共図書館と日本語図書館に対してどのような意識を持っていたのだろうか。まず、アメリカ公共図書館である。アメリカ公共図書館の利用状況が書かれている記事では日系人に関して言及されず、アメリカ人の利用状況が中心であった。さらに、日本関係の蔵書が少なかったことから、日系人の求めている図書の提供は少なかったと考えられる。また、アメリカ化運動に関する活動についての報告がほぼなかったことから、少なくとも英語が不得手な日系人にとってアメリカ公共図書館は身近なものではなかったのではないだろうか。しかし、子どもには図書館利用を推奨していたので、日系人 2 世がアメリカ公共図書館に対して英語が不得手な日系人と同じ感情を持っていたとは言いがたい。

両新聞ともアメリカ公共図書館と日系人の関わりがほぼ見受けられない中で、日米新聞では、「国立図書館内のアセムブリーホールで当市教育監察官グラエン氏主催の下に『リーディングプログラムコムミテイー』が開かれ日本人ボーイスカウツへも代表者を送るやう招待があった」[124]と、サンフランシスコ市立図書館で日本のボーイスカウトが図書館サービスの活動に招待されたことが取り上げられている。加えて、1915 年のサンフランシスコ市立図書館年次報告書において、各支部図書館の報告で「子どもがより良い読書を求めている。多くの討論会が近隣の学校で行われており、日系人高校の討論クラブ（Japanese High School debate club）でも行われている」[125]と日系人に関して触れられている部分がある。さらに、同年の年次報告書で「この支部（著者注：ノースビーチ支部図書館＜North Beach Branch＞）は他の支部より多くの外国の資料が割り当てられている。図書館を利用する中国系と日系人の学生に対して注意を払う必要がある」[126]と日系人学生に対して図書館サービスを喚起するような記述が見て取れる。つまり、サンフランシスコ市立図書館の支部図書館を学生の日系人は利用しており、サンフランシスコ市立図書館はそれを認識していたと考えられる。ただし、これらの記述は「学生」に限定しており、日系人全体に対しての言及は確認できなかった。こうしたことから、英語を理解できる日系人は、英語が不得手な日系人よりアメリカ公共図書館を身近に感じていたと推測できる。

つづいて日本語図書館について考察していく。日本語図書館設立の意義、実際の設立時の理由を比較した結果から、日本語図書館は教育施設として強く認識されていた事がわかる。蔵書内容から、アメリカに関する情報を提供する場として認識していた層もある。さらに、雑誌を提供していることなどから娯楽を提供する場としても認識されていることがわかる。これは、世代によって差があると考えられる。日本に関する図書の提供を強調している日本語図書館があるため、英語が不得手な日系人、主に 1 世は日本語図書館を娯楽の場、日本文化を享受する場と認識していたのではないだろうか。一方、日系人の指導者

層は 2 世が日本を学ぶ事によって日米の架け橋となることを推奨していた。そのため、日本語図書館を利用していた 2 世は、日本語図書館を日本について学ぶ場と認識していたと考える事ができる。

これらの状況から、日系人にとっての日本語図書館は、⑴次世代の教育の場、⑵矯風活動の一環として健全な趣味を提供する場、⑶アメリカに関する情報を入手する場、という３つに整理することができる。まず、⑴次世代の教育の場である。これは、特に日系人 1 世が日本語図書館に持っていた意識である。日系人 1 世は 2 世に対して多くの知識を得ることを奨励していた。そのための教育の場の一つとして日本語図書館が提唱されていたのである。ここでいう知識とは、アメリカに関する知識だけではなく、主に日本に関する知識のことを指す。2 世が日米の懸橋となることを期待していた 1 世は、日本語図書館に日本に関する図書を所蔵することにより、2 世が日本に関する知識を学ぶ機会を作っていた。つまり、日系人 1 世にとって図書館とは、2 世が日本に関して学ぶ場という認識を持っていたといえる。さらに、その日本語図書館を利用していた 2 世は日本語図書館を日本について学ぶ場と認識していたと考える事ができる。

つづいて、⑵矯風活動の一環として健全な趣味を提供する場という認識についてである。1910 年代から 1920 年代にかけて、日系人の指導者層は日系人排斥の解決を目的として日系人の生活習慣を改善するための活動を行っていた。これを矯風活動と呼ぶ。矯風活動はアメリカの生活文化を学習するというアメリカ化運動の役割も担っていた。この活動の一環として、日系人の指導者層は賭博やビリヤードなどの娯楽に代わり読書を推奨していた。この影響から、日本語図書館を娯楽提供の場として設立する動きが起こった。つまり、日系人の指導者層はサンフランシスコ市に居住する英語が不得手な日系人に対して日本語図書館を娯楽の場として認識させたいと考えていたといえるだろう。日系人の書店には多くの人々がいると明言されているように、サンフランシスコ市に居住する日系人は読書欲があったと考えられる。そのため、日系人は書店で図書を購入する代わりに、日本語図書館で娯楽として読書をする機会があったのではないだろうか。

⑶アメリカに関する情報提供に焦点を当てる。在米日本人会が設置した図書館にアメリカ情報に関する図書を提供していたこと、さらに、それらの図書が一般日系人も利用可能であったことから、在米日本人会が設置した図書館はアメリカの情報に関する図書の提供を行っていたと考える事ができる。さらに、アメリカの情報に関する図書は在米日本人会や日本人職業会議所[127]などの日系人組織へ寄附されていた。このことから、アメリカの情報に関する図書が日本語図書館に配架されていた可能性があると言えるだろう。実際の利用に関しても、アメリカでの生活に必要な情報が掲載されている図書を図書館に求めている女性がいたため、図書館がアメリカに関する情報を提供する場として認識されていたと

考えられる。このことから、少なくとも日本語図書館の機能の一つとしてアメリカ情報の提供が行われていたと言える。

最後に、アメリカ化という視点から以上の内容を考察していく。まず、アメリカ情報に関する図書の提供が行われていたこと、さらに、日系人の女性がアメリカに関する情報を求めて図書館を訪れていたことから、移民サービスにおけるアメリカ化運動の 1 つである「アメリカ情報の提供」が日本語図書館で行われていたことがわかる。さらに、読書からのアメリカ化も行われており、アメリカでの仕事や知識を記した雑誌などが発行されている。残念ながら、これらの雑誌が日本語図書館で収集されているとは明言されていないが、「アメリカ情報の提供」が日本語図書館で行われていたため、これらの雑誌が図書館で収集されていた可能性はあるだろう。「アメリカに関する情報の提供」は *Library Journal* においてもアメリカ化運動の 1 つとしてとりあげられている。そのため、アメリカ化運動の機能として、日本語図書館は「アメリカに関する情報の提供」を行っていたといえる。

一方、同じく *Library Journal* でアメリカ化運動として取り上げられていた英語学習に関するサービスは、図書館サービスとして行っていると明言されていなかった。日系人に対する英語学習は各教会や在米日本人会、カリフォルニア大学の提供の下で行われていた。他の移民も、アメリカの英語教育強制の影響で各地のソーシャル・ワーカー、社会改革者や協会は、移民をアメリカ化するために英語教室を実施していた[128]。これに追従するように公共図書館も英語教室開催を主張し、実施されていた。それにも関わらず、日本語新聞において、英語学習に関するサービスが図書館サービスとして行われていると明言されていない。そのため、アメリカ公共図書館の日系人に対する意識が欠落していた可能性を否定できない。

---

1 「加州人は案外読書する」，『日米新聞』, 1925 年 12 月 18 日
2 「日々五千人が図書館へ」，『日米新聞』, 1927 年 2 月 4 日
3 同上
4 同上
5 「図書館の設置」，『日米新聞』, 1928 年 12 月 26 日
6 「9 ヶ月間にわたる米国生活の断片 2、3」，『日米新聞』, 1921 年 1 月 23 日
7 同上
8 「排日協会委員長の指名を拒絶した米婦人」，『日米新聞』, 1920 年 2 月 1 日
9 「英文雑誌刊行の儀」，『日米新聞』, 1919 年
10 同上
11 「排日協会委員長の指名を拒絶した米婦人」，『日米新聞』, 1920 年 2 月 1 日
12 「議院図書館」，『新世界新聞』, 1910 年 12 月 10 日
13 「新図書館二月半ば改装」，『新世界新聞』, 1917 年 1 月 29 日
14 「羅府人士の読書欲」，『新世界新聞』, 1924 年 11 月 12 日
15 「最近米国における進歩発達の諸現象」，『新世界新聞』, 1927 年 12 月 10 日

[16] 「子供等の読む本」, 『新世界新聞』, 1928 年 1 月 6 日
[17] 「白人家庭労働者は主人に書籍を贈れ」, 『新世界新聞』, 1919 年 10 月 9 日
[18] 「オリエンタル雑誌」, 『新世界新聞』, 1908 年 9 月 18 日
[19] 「白人に日本の近状を知らしむるため各地の図書館に日本の書籍を寄贈しては如何」, 『新世界新聞』, 1920 年 2 月 1 日
[20] 「『米亜』雑誌の配布」, 『新世界新聞』, 1907 年 8 月 30 日
[21] 「シカゴ図書館より依頼」, 『新世界新聞』, 1920 年 3 月 30 日
[22] 「書籍寄贈の申し込み」, 『新世界新聞』, 1920 年 8 月 14 日
[23] 「図書館の設置」, 『日米新聞』, 1928 年 12 月 26 日
[24] 「サター青年会」, 『日米新聞』, 1921 年 2 月 8 日
[25] 「図書館を有たぬ在米同胞」, 『日米新聞』, 1920 年 3 月 1 日
[26] 同上
[27] 「読書子のために」, 『日米新聞』, 1921 年 9 月 11 日
[28] 同上
[29] 「図書館創設桑港読書会」, 『日米新聞』, 1922 年 10 月 23 日
[30] 「2 世のための図書室」, 『日米新聞』, 1926 年 1 月 8 日
[31] 「図書館の設置」, 『日米新聞』, 1928 年 12 月 26 日
[32] 同上
[33] 「図書館を有たぬ在米同胞」, 『日米新聞』, 1920 年 3 月 1 日
[34] 「桑日事務所の階下を解放し気軽な娯楽集会所」, 『日米新聞』, 1921 年 6 月 4 日
[35] 同上
[36] 同上
[37] 「新市民協会が図書館設立決議」, 『日米新聞』, 1928 年 11 月 8 日
[38] 「新市民協会が図書館設立決議」, 『日米新聞』, 1928 年 11 月 8 日 ;「図書館の設置」, 『日米新聞』, 1928 年 12 月 26 日 ;「図書館設置は当分握潰に一致」, 『日米新聞』, 1929 年 6 月 8 日
[39] 「青年等の文庫設置計画」, 『日米新聞』, 1925 年 11 月 30 日
[40] 「総領事館内に図書館を新設」, 『日米新聞』, 1929 年 5 月 31 日
[41] 「農業部担当に際して」, 『日米新聞』, 1920 年 5 月 21 日
[42] 「図書館設立に就いて」, 『新世界新聞』, 1909 年 3 月 21 日
[43] 「文化事業」, 『新世界新聞』, 1922 年 10 月 13 日
[44] 「図書館設置の秘訣」, 『新世界新聞』, 1928 年 12 月 20 日
[45] 「図書館設立に就いて」, 『新世界新聞』, 1909 年 3 月 21 日
[46] 「お金がなくては図書は買へませぬ」, 『新世界新聞』, 1928 年 12 月 19 日
[47] 「日本人会の備附図書」, 『新世界新聞』, 1909 年 6 月 19 日
[48] 同上
[49] "Opening exfrcises of first Japanese library", *San Francisco Chronicle, November 3,* 1912.
[50] 吉田亮,『アメリカ日本人移民とキリスト教社会』, 日本図書センター, 1995, p20-23, 282
[51] 同書, p20-23
[52] 「ストージ図書館開館式」, 『新世界新聞』, 1912 年 10 月 15 日
[53] 吉田亮, 『アメリカ日本人移民とキリスト教社会』, 日本図書センター, 1995, p##
[54] 「ス図書館開館式順序」, 『新世界新聞』, 1912 年 11 月 3 日
[55] 「子供図書館開館式」, 『新世界新聞』, 1917 年 2 月 22 日
[56] 蛯原八郎, 『海外邦字新聞雑誌史』, 名著普及会, 1980, p173
[57] 「新しい趣向の雑誌図書館」, 『新世界新聞』, 1922 年 12 月 5 日
[58] 「文学物は下火だ」, 『日米新聞』, 1922 年 9 月 9 日

59 同上
60 「博道に好適の小冊子」, 『日米新聞』, 1928 年 11 月 6 日
61 「米化教育の邦語訳」, 『日米新聞』, 1928 年 4 月 5 日
62 同上
63 「米国主義と米化運動」, 『日米新聞』, 1919 年 3 月 22 日
64 「英語の学習」, 『日米新聞』, 1920 年 1 月 10 日
65 「在日会に参考書続々」, 『新世界新聞』, 1915 年 6 月 10 日
66 同上
67 「日本人会の備附図書」, 『新世界新聞』, 1909 年 6 月 19 日
68 「英語を習へ」, 『新世界新聞』, 1908 年 3 月 16 日
69 「英学校の開講」, 『新世界新聞』, 1907 年 8 月 1 日
70 「同胞婦人のための特別英語教室」, 『新世界新聞』, 1926 年 10 月 19 日
71 「授業料なしで英語教育」, 『新世界新聞』, 1926 年 11 月 7 日
72 「ポテート耕作参考書」, 『新世界新聞』, 1915 年 7 月 5 日
73 「『北米の日本人』発行, 『新世界新聞』, 1909 年 9 月 10 日
74 「桑港案内出版準備」, 『新世界新聞』, 1910 年 8 月 22 日
75 「実業会の案内冊子」, 『新世界新聞』, 1927 年 11 月 4 日
76 「外人に読ませる合衆国便覧」, 『新世界新聞』, 1928 年 4 月 23 日
77 「新日本を配布」, 『新世界新聞』, 1912 年 12 月 15 日
78 「日本人会の会報発行」, 『新世界新聞』, 1909 年 8 月 24 日
79 「文明人たるの有難味」, 『日米新聞』, 1923 年 11 月 19 日
80 「各学園に理想的小図書館の設置すすむ」, 『日米新聞』, 1927 年 2 月 11 日
81 「同胞を危機より救へ」, 『日米新聞』, 1923 年 7 月 14 日
82 「青年修養上の読み物」, 『日米新聞』, 1924 年 2 月 24 日
83 「英語を学ぶ方法」, 『日米新聞』, 1919 年 5 月 29 日
84 「米人教師から見た同胞児童の真面目」, 『日米新聞』, 1919 年 10 月 6 日
85 「国語教育」, 『日米新聞』, 1919 年 10 月 6 日
86 「同胞婦人へ読書を勧む」, 『日米新聞』, 1919 年 9 月 15 日
87 「邦字新聞と在米同胞青年」, 『日米新聞』, 1922 年 1 月 8 日
88 「同胞を危機より救へ」, 『日米新聞』, 1923 年 7 月 15 日
89 「本が高過ぎるよ」, 『日米新聞』, 1921 年 9 月 13 日
90 「日本の雑誌の高いのは販売制度が悪い為」, 『日米新聞』, 1924 年 2 月 21 日
91 「燈火親しむ読書子が昨今の愛読書は何」, 『日米新聞』, 1921 年 11 月 14 日
92 「文明人たるのありがたみ」, 『日米新聞』, 1923 年 11 月 19 日
93 同上
94 「新聞は日常生活の教科書」, 『日米新聞』, 1923 年 11 月 11 日
95 「子どもの絵本は子どもに選ばせて」, 『日米新聞』, 1925 年 11 月 1 日
96 同上
97 「最近の読書界」, 『日米新聞』, 1922 年 11 月 7 日
98 「日本の雑誌の高いのは販売制度が悪い為」, 『日米新聞』、1924 年 2 月 21 日
99 「本屋から見た同胞の読書界」, 『日米新聞』, 1927 年 10 月 31 日
100 「夏の読書は軟らかいもの」, 『日米新聞』, 1922 年 6 月 20 日
101 「本屋から見た同胞の読書界」, 『日米新聞』, 1927 年 10 月 31 日
102 「文学物は下火だ」, 『日米新聞』, 1922 年 9 月 9 日
103 同上
104 「同化と文学」, 『新世界新聞』, 1912 年 1 月 1 日
105 「家庭主婦の趣味の問題」, 『新世界新聞』, 1923 年 6 月 6 日

[106] 「本を読む道楽」, 『新世界新聞』, 1912 年 5 月 11 日
[107] 「今後の婦人に男の読み物が必要」, 『新世界新聞』, 1916 年 2 月 27 日
[108] 同上
[109] 同上
[110] 「旅行と読書」, 『新世界新聞』, 1920 年 6 月 20 日
[111] 「読書と静思」, 『新世界新聞』, 1912 年 3 月 14 日
[112] 「児童文学の教育的価値」, 『新世界新聞』 1918 年 1 月 4 日
[113] 「児童文学の教育的価値（３）」, 『新世界新聞』, 1918 年 1 月 6 日
[114] 「家庭と文化」, 『新世界新聞』, 1920 年 11 月 24 日
[115] 「まづ桑港日本人村の民衆図書館といふ格」, 『新世界新聞』, 1924 年 5 月 20 日
[116] 同上
[117] 「家庭と文化」, 『新世界新聞』, 1920 年 11 月 24 日
[118] 「読書の指導は小さい中から」, 『新世界新聞』, 1928 年 5 月 21 日
[119] 同上
[120] 同上
[121] 同上
[122] 同上
[123] 「如何な本が読まれる」, 『新世界新聞』, 1916 年 8 月 7 日
[124] 「少年に良書を読ませる」, 『日米新聞』, 1926 年 10 月 3 日
[125] San Francisco Board of Supervisor, San Francisco municipal reports Fiscal year 1914-15, “Report of Board of Trustees of the San Francisco Public Library and Reading Room”, 1915, p422
[126] *Ibid*, p422-423
[127] 「小冊子無料進呈」, 『新世界新聞』, 1918 年 4 月 30 日
[128] 松本悠子, 『創られるアメリカ国民と「他者」』, 東京大学出版会, 2007, p28

6. 考察

本研究では、20 世紀前半にアメリカに居住した日系人の状況とアメリカ公共図書館におけるアメリカ化運動に着目し、当時の日系人の図書館意識について考察した。

まず第 2 章では、アメリカにおける日系人の状況と日系人のアメリカへの同化について概観した。時期によって差はあるものの、20 世紀前半、アメリカに居住する約 50%前後がカリフォルニア州に居住していた。その中で日系人 1 世が最も多く就いていた職は農業関係の労働であった。ただし、サンフランシスコ市やロサンゼルス市などの主要都市では小規模店舗などの経営者が多かった。このように、日系人がアメリカに定着していく反面、サンフランシスコ市で「日本人児童隔離問題」が発生するなどの日系人排斥運動が起こる。1910 年代になると 1 世は帰化権を得ることができないとの理由から法的な差別に苦しめられた。それに対して、日系人 2 世の生活環境の向上、さらにアメリカ人と日系人の懸橋的存在になるように 1 世は 2 世に対する教育に注力した。実際、日系人の教育状況を 1 世と 2 世で比較すると、2 世の教育レベルは 1 世より高かった。一方、1 世も日系人排斥の解決とアメリカへの同化を目的として、矯風活動や講演会、パンフレットなどを利用してアメリカの生活を学ぶなどの活動を行っていた。つまり、20 世紀前半の日系人はアメリカ化の意識が高かったことを明らかにした。

つづいて第 3 章では、アメリカ公共図書館の移民サービスとアメリカ化運動の関係について概観したのち、*Library Journal* を対象に 1900 年から 1929 年までの移民サービスに関する論文を量的に分析した。アメリカ公共図書館におけるアメリカ化運動としての移民サービスに関する議論は、主に 1910 年代から 1920 年代前半にかけて盛んに行われ、その後徐々に減少していった。これは、1920 年代に入り、アメリカ化運動が、移民のみならずアメリカ人も対象になったことにより、移民サービスとして認識されることが減少していったためだと考えられる。具体的な移民サービスは、⑴英語学習資料の提供、⑵英語教室、⑶アメリカ情報の提供、⑷市民権獲得支援、⑸図書リストの作成、⑹母語図書の提供、⑺展示があげられる。中でも最も多く取り上げられていたのは母語図書の提供であった。母語図書の提供は移民を図書館へ呼び寄せ、これをきっかけに英語の図書を移民が読むようになるという目的で行われ、当時の図書館関係者は母語図書の提供をアメリカ化運動の 1 つであると考えていた。ただし、このサービスは、アメリカ化運動による英語強制の風潮に逆行しており、「言語面」に関しては強制的なアメリカ化を否定していたといえる。しかしながら、母語図書の提供の実態は移民の娯楽を提供するものであったと考えられる。よって母語図書の提供は移民サービスとしての機能を果たしていたが、アメリカ化運動を積極的に推進できたかは不明である。

より直接的なアメリカ化運動として取り上げられたサービスとしては、⑴英語学習資料

の提供、⑵英語教室、⑶アメリカの情報提供、⑷市民権獲得支援が挙げられる。中でも、英語学習資料の提供やアメリカの情報提供に関する記事が多く、公共図書館で意識されていたサービスだといえる。なお、移民サービスに関する議論は全ての移民に対して平等に言及されていたわけではない。白人のヨーロッパ系移民が議論の中心であり、日系人や中国系などのアジア系に対する言及は人口数に応じたものとは言いがたい。また、日系人が取り上げられた記事の半数がカリフォルニア州に集中している。その記事の中でも 2 世や英語のできる 1 世に対する言及が多く、英語が不自由な 1 世に対しての記述は少なかった。公共図書館は、帰化不能外国人である日系人 1 世ではなく、アメリカへの同化の可能性がある 2 世に対して移民サービスを行っていたと考えられる。

第 4 章では、アメリカで発行された日本語新聞について概観し、サンフランシスコ市で最も有力紙であった『日米新聞』と『新世界新聞』を用いて、日系人の図書館意識や読書欲を量的に明らかにした。両新聞の図書館等の関連記事は年を追うごとに増加傾向にあり、年とともに図書館や読書に関する関心を高めていたといえるだろう。収集基準項目別に記事数を見ると、図書館に関する記事 99 件のうち 66 件が日本語図書館に関する記事であり、アメリカ公共図書館より日本語図書館の方が注目されていたことがわかる。さらに、読書に関する記事が多く（123 件）、日系人は読書に対して関心があり、日系人の指導者層は読書を推奨していたといえる。アメリカの情報提供についての記事が一定数あることから、日系人社会においてもアメリカの情報は需要があったと考えられる。

第 5 章では、『日米新聞』と『新世界新聞』から収集した記事を各新聞ごとに KJ 法を用いて内容分析を行い、「アメリカ公共図書館に対する認識」「日本語図書館に対する認識」「アメリカ化と図書館」「読書の意義と現状」の 4 つのグループに分けて検討した。最後に日本語新聞にみる日系人の図書館意識とアメリカ化運動の視点から図書館について考察した。まず、日系人のアメリカ公共図書館への意識である。アメリカ人の利用を中心に記述していたこと、さらに日本語関係の図書が少なかったことから、少なくとも英語が不得手な日系人にとってアメリカ公共図書館は身近なものではなかった可能性がある。一方、日本に関する図書を図書館の要請にあわせて寄贈していることから、日本の情報を提供する場として図書館をとらえていたと推測できる。次に、日系人の日本語図書館への意識として、⑴次世代の教育の場、⑵矯風活動の一環として健全な趣味を提供する場、⑶アメリカに関する情報を入手する場、という 3 つをあげることができる。日系人 1 世にとって日本語図書館は、次世代の教育の場であり、娯楽を享受する場でもあった。さらに、一部の日系人はアメリカに関する情報を入手する場として利用していた。日本語図書館を利用していた 2 世は日本を学ぶ場として認識していたと考えられる。最後にアメリカ化運動の視点からである。移民サービスにおけるアメリカ化運動の 1 つである「アメリカ情報の提供」が日本

語図書館で行われていた。読書を通じても日系人のアメリカ化が行われており、アメリカに関する情報を掲載した雑誌などが日本語図書館で収集されていたと推測できる。一方、英語学習もアメリカ化の一環として取り組まれていたが、図書館との関連性は言及されなかった。当時のアメリカ公共図書館の状況から、アメリカ公共図書館の日系人に対する意識が欠落していた可能性がある。

さて、こうした日系人の図書館に対する意識から何が読み取れるだろうか。サンフランシスコ市に焦点を絞って考察していく。まず、調査期間における記事内容の変化についてである。日本語新聞でサンフランシスコ市立図書館について取り上げた記事は日米新聞 2 件、新世界新聞 4 件の計 6 件と少数であったが、その中でも内容に変化がみられる。1906 年の新世界新聞では「桑港書藉館の損害」[1]として、サンフランシスコ大震災における具体的な被害状況について言及している。さらに 1917 年には改築したサンフランシスコ市立図書館に関する内容を取り上げているが、これらは限られた内容であるといえる。しかし、1927 年の日米新聞では、サンフランシスコ市立図書館の貸出数や貸出図書の内容などの具体的な利用状況について言及している。

日本語図書館に関しては、1909 年から図書館設置を推進する記事が掲載されている。1909 年当時から、日系人の知識向上は重視されており、図書館設置の理由も日系人の知識獲得が強調されている。一方、1920 年代になると、日系人 2 世の教育が注目されはじめ、図書館設置の理由も 2 世に対する教育的役割が強調される。

これらの変化は、1922 年に出た小沢裁判の判決と、1924 年に制定された排日移民法が影響していると考えられる。第 2 章で述べたとおり、小沢裁判で日系人 1 世が帰化不能外国人であると実質的に認定され、排日移民法は日本からの移民を完全に禁止した。このような状況から、日系人 1 世は日系人排斥を解決するために 2 世に対して日本とアメリカを繋ぐ懸橋的存在となるよう期待した。この結果、年を追うごとに、日系人はアメリカ公共図書館に対して関心を高めていったのだと推測でき、さらに日本語図書館は 2 世に対する教育機能を求められるようになったと考えられる。

つづいて、本研究に川崎の提唱した制度的差別と実質的差別を適用する。　この 2 分類は 1963 年の『公共図書館へのアクセス』で用いられた「直接的差別」と「間接的差別」を用いて定義されている。制度的差別は、黒人の図書館利用を完全に排除したり、黒人の利用に一定の制限を設けたりする状態を示す「直接的差別」[2]を基に、政府の行為や法律によって生じた制度的な図書館利用での差別や隔離と定義されている[3]。

一方、実質的差別は、分館の立地密度や資源における質や量が異なることで、黒人が白人と比べて劣ったサービスしか受けられない状態を示す「間接的差別」[4]を基に、行政の行為や法による影響ではなく、私人や何らかの要因から結果として生じる差別や隔離と定義

されている[5]。一般的には住居パターン、人口移動、経済状態から生じ、本格的に隔離を目的にするものではない政府の方針によってこの状況が助長されることが多い。なお、アメリカ最高裁は、このような隔離について、裁判所の救済の必要はないとしている[6]。

本研究で取り上げた日本語新聞、*Library Journal* の記事及び、卒業研究で取り上げたサンフランシスコ市立図書館の議事録、現在調査可能である 1917 年までのサンフランシスコ市立図書館の図書館年次報告書などの公文書から差別に関する記事や訴えなどを得ることはできなかった。加えて、1915 年の年次報告書からは日系人の学生についての記述も確認できる。つまり、日系人は図書館へのアクセスという点に関して制限されていなかったため、日系人に対する制度的差別はなかったといえる。

サンフランシスコ市の公共図書館は、1909 年にイタリア系移民のためにイタリア語図書のコレクションを構築するという移民サービスを行っている[7]。しかし、同州のロサンゼルス市立公共図書館は*Library Journal*に移民サービスに関する記事をいくつか投稿しており、それと比較するとサンフランシスコ市立図書館自体が移民サービスの情報を積極的に発信していなかった可能性があるだろう。そのため、日系人はアメリカ公共図書館に対して「アメリカ化運動」の機能があると認識していなかったのではないかと考えられる。確かに、サンフランシスコ市立図書館は少数ながら日本語の図書の蔵書もあり、日系人 2 世に対してサービスを行っていたとうかがえる。それにも関わらず、日本語新聞にはサンフランシスコ市立図書館の利用を奨励する記事などは見受けられなかった。アメリカ公共図書館が行っていたさまざまな取り組みに関して日系人に伝わっていなかった可能性が考えられる。これは、サンフランシスコ市立図書館の日系人に対する関心の薄さが一因と推測できる。政府の行為や法律によって生じた制度的な図書館利用での差別や隔離はないものの、図書館関係者の日系人に対する関心の薄さが実質的差別を引き起こしていたことは否定できない。これらの状況を解決するために、日本語図書館が「教育」や「娯楽としての母語図書提供」、「アメリカ情報提供」の機能を担っていたといえるのではないだろうか。

さらに、図書館議事録、図書館年次報告書及び *Library Journal* に報告されている日系人の状況や、先行研究からみて、アメリカ公共図書館は日系人 2 世をターゲットにした移民サービスを行っており、日系人 2 世も利用もしていたと考えられる。つまり、少なくとも 1 世より 2 世の方がアメリカ公共図書館を身近に感じていたと推測できる。

ところで、和田敦彦の『書物の日米関係』によると、日本人排斥の傾向が強まった 1920 年代に、外務省などの関連機関は日本に関する情報を提供するために、日本語図書をアメリカへ送っており、その送付先は議会図書館や大学図書館が中心であった[8]。アメリカ在住の日系人には公共図書館をアメリカ情報提供の場として捉えていた層があったのに対して、日本の政府機関などにはアメリカ公共図書館は「情報発信の場」として認識されていなか

ったといえる。20 世紀前半の公共図書館に対する日米の意識の違いがこうした点に現れているといえるだろう。

本研究では、アメリカ化運動の視点から、1900 年から 1929 年までのサンフランシスコ市で発行されていた日本語新聞を分析対象として、日系人の図書館意識を明らかにした。しかし、サンフランシスコ市立図書館の情報が限られたものしか収集できず、サンフランシスコ市立図書館とサンフランシスコ市の日本語図書館という視点からの分析が不十分なものとなってしまった。ついては、1920 年代より多数の日系人が居住するようになったロサンゼルス市まで対象地域を拡大して、日系人の図書館意識をより明らかにすることで、さらなる研究の深まりが可能になる。また、本研究で、日系人に対して実質的差別があった可能性を示唆したが、日系人にのみ着目した考察であったため、十分であるとはいえない。日系人と同じく差別を受けていた中国系移民に対する移民サービスと比較検討することでより詳細な分析が可能になる。さらに、本研究はアメリカ全土のアメリカ化運動に着目したため 1900 年から 1929 年までと対象期間を設定したが、日系人の歴史から日系人の図書館意識を明らかにするために、今後は第二次世界大戦開始以前の 1941 年まで期間を拡大し、日系人の図書館意識がどのように変化していったのかを明らかにできれば、法律に基づく隔離が行われていないが、社会的に偏見をもたれている民族に対する図書館サービスを考える際に、より有益なものになるだろう。これらの点を今後の課題としたい。

---

1 「書藉館の損害」, 『新世界新聞』, 1906 年 5 月 27 日

2 International Research Association, *Access to Public Libraries*, American Library Association, 1963, pxx.

3 川崎良孝,『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会 ： 理念と現実との確執』, 京都大学図書館情報学研究会, 2006a, p31.

4 International Research Association, *op. cit.*, pxx.

5 川崎, 前掲書, 2006a, p31.

6 同書

7 San Francisco Board of Supervisor , “Librarian report”, *Municipal Report of City of San Francisco 1909-1910,* 1910, p951

8 和田敦彦, 『書物の日米関係』, 新曜社, 2007, p11-36

7. 参考文献一覧

- 明石紀雄, 飯野雅子編, 『エスニック・アメリカ』, 第 3 版, 有斐閣, 2011, 416p.
- 油井大三郎, 遠藤泰生編, 『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ』, アメリカ太平洋研究叢書, 東京大学出版会, 2003, 316p.
- 飯野正子, 「米国における排日運動と一九二四年移民法制定過程」, 『津田塾大学紀要』(10), 津田塾大学紀要委員会, 1978, p1-41.
- イチオカ, ユウジ著／富田虎男ほか訳, 『一世 : 黎明期アメリカ移民の物語』, 刀水書房, 1992, 283p.
- ウィリアムズ, パトリック著／原田勝訳, 『アメリカ公共図書館史 1841-1987 年』, 勁草書房, 1991, 209p.
- ウィルソン, Rovert Arden, ホソカワ, Bill 著／猿谷要訳, 『ジャパニーズ・アメリカン』, 有斐閣, 1982, 381p.
- 上原要佐, 「日米関係の日系アメリカ人への影響」, 『経営情報学部論集』9(1), 1996, p17-34.
- ウェルトハイマー, アンドリュー, 「アメリカの強制収容所内での文化空間の創造 : 浅野七之助とトパーズ日本語図書館 1943-1945」, 『図書館界』54(1), 日本図書館研究会, 2008, p1-15.
- ヴァンスリック, アビゲイル, A 著／川崎良孝, 吉田右子著, 『すべての人に無料の図書館 : カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920 年』, 京都大学図書館情報学研究会, 2005, 274p.
- 蛯原八郎, 『海外邦字新聞雑誌史』, 名著普及会, 1980, 372p.
- 太田孝子, 「排日運動下におけるシアトル穂高倶楽部（II）:「写真結婚」と「外国人土地法」を中心に」, 『岐阜大学留学生センター紀要 2000』, 岐阜大学, 2001, p3-16.
- 大谷泰夫, 『アメリカ在住日系人強制収容の悲劇』, 世界人権問題叢書, 1997, 242p.
- 岡元彩子,『アメリカを生き抜いた日本人』, 日系新書 323, 日本経済新聞社, 1980, 217p.
- 賀川真理, 『サンフランシスコにおける日本人学童隔離問題』, 論創社, 1999, 430p.
- 川崎良孝, 『図書館の歴史アメリカ編』, 増訂, 日本図書館協会, 2003, 291p.
- 川崎良孝, 黒人への公共図書館サービスの転機 :『公立図書館へのアクセス』（1963 年）の意義（1)」, 『図書館界』57(5), 日本図書館研究会, 2006a, p294-310.
- 川崎良孝, 黒人への公共図書館サービスの転機 :『公立図書館へのアクセス』（1963 年）の意義（2)」, 『図書館界』57(6), 日本図書館研究会, 2006b, p358-372.
- 川崎良孝, 『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会 : 理想と現実との確執』, 京都大学図書館情報学会, 2007, 397p.

・ キクムラ, アケミ・ヤノ編／小原雅代訳, 『アメリカ大陸日系人百科事典』, 明石書店, 2002, 424p.
・ クロースフォード, ジェイムズ著／本名信行著, 『移民社会アメリカの言語事情』, ジャパンタイムズ, 1994, 413p.
・ 児玉正昭, 「明治期アメリカ合衆国への日本人移民」, 『社會經濟史學』47(4), 社会経済史学会, 1981, p423-449.
・ 小林卓, 「今世紀初頭のアメリカにおける移民へのサービス」, 『社会教育学・図書館学研究』(17), 東京大学教育学部社会教育学研究室, 1993, p23-33.
・ 小林卓, 杉本ゆか, 「『図書館利用に障害のある人々』へのサービス」, 『図書館界』61(5), 日本図書館研究会, 2010, p476-494.
・ 小林卓, 高橋隆一郎, 「図書館の多文化サービスについて」, 『情報の科学と技術』59(8), 社団法人情報科学技術協会, 2009, p397-402.
・ ゴルヴィツァー, ハインツ著／瀬野文教訳, 『黄禍論とは何か』, 草思社, 1990, 261p.
・ シェラ, ジェシー・H 著／川崎良孝訳, 『パブリック・ライブラリーの成立』, 日本図書館協会, 1988, 363p.
・ 深豊幸, 「ヴァレンタイン・スチュアート・マクラッチーとカリフォルニア州日本人移民排斥運動：1910 年代後半を中心に」, 『同志社アメリカ研究』(40), 同志社大学, 2004, p65-81.
・ スタイナー, J. F.著／森岡清美訳, 『人種接触の社会心理学：日本人移民を巡って』, ハーベスト社, 2006, 246p.
・ 竹沢泰子, 『日系アメリカ人のエスニシティ：強制収容所と補償運動による変遷』, 大学出版, 1994, 262p.
・ 田中景, 「20 世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業」, 『社会科学』(68), 同志社大学人文科学研究所 p303-334.
・ 田中圭治郎, 『教育における文化的同化』, 本邦書籍, 1986, 271p.
・ 田村紀雄, 白水繁彦編, 『米国初期の日本語新聞』, 勁草書房, 1986, 453p.
・ 田村紀雄, 『アメリカの日本語新聞』, 新潮社, 1991, 236p.
・ 田村紀雄, 『海外の日本語メディア』, 世界思想社, 2008, 330p.
・ 同志社大学人文科学研究所編,『北米日本人キリスト教運動史』, PMC 出版, 1991, 910p.
・ 常盤繁, 「アメリカ公共図書館における教育的サービスの発達」, 『Library and Information Science』(15), 三田図書館・情報学会, 1977, p107-119.
・ 中山愛理, 「アメリカ図書館法制度と図書館関係立法」,『情報の科学と技術』 59(2), 社団法人情報科学技術協会, 2009, p573-578.

・ 中山愛理, 『図書館を届ける：アメリカ公共図書館における館外サービスの発展』, 学芸図書, 2011, 320p.
・ 日米編集局編, 『日米年鑑第 7 巻』, 復刻版, 日本図書センター, 2002, 200p.
・ 日米編輯局編, 『日米年鑑 11 巻』, 復刻版, 日本図書センター, 2002, 264p.
・ ナッシュ, ジェラルド D.著／朝日由紀子訳, 『20 世紀のアメリカ西部：未来を映す都市オアシス文明』, 玉川大学出版, 1999, 365p.
・ 日本図書館協会障害者サービス委員会編, 『「多文化サービス実態調査 1998」公立図書館編報告書』, 日本図書館協会, 1999, p28.
・ 阪田安雄, 「衝突点へ向かう機動：明治期における日本人のアメリカ出稼 1」, 『大阪学院大学国際学論集』3(6), 大阪学院大学, 1992a, p51-102.
・ 阪田安雄, 「衝突点へ向かう機動：明治期における日本人のアメリカ出稼 2」, 『大阪学院大学国際学論集』3(11), 大阪学院大学, 1992b, p35-91.
・ 阪田安雄, 「衝突点へ向かう機動：明治期における日本人のアメリカ出稼 3」, 『大阪学院大学国際学論集』5(6), 大阪学院大学, 1994, p103-148.
・ パンヂトア, バーナ L 著／根本彰ほか訳, 『公共図書館の運営原理』, 日本図書館協会, 1988, 256p.
・ 藤倉晧一郎, 「アメリカ市民権の喪失」, 『同志社アメリカ研究』2, 同志社大学, 1965, p22-36
・ 法務省入国管理局, 「平成 24 年末現在における在留外国人数について（速報値）」, 法務省, http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00030.html, （最終アクセス日：2014 年 1 月 16 日）
・ 松尾弋之, 『民族から読み解く「アメリカ」』, 講談社, 2000, 268p.
・ 松本悠子, “アメリカ人であること・アメリカ人にすること”, 『思想』(884), 岩波書店, 1998, p52-75
・ 松本悠子, 『創られるアメリカ国民と「他者」』, 東京大学出版会, 2007, 328p.
・ マックウィリアムス, ケアリー著／鈴木次郎・小野瀬嘉慈共訳, 『アメリカの人種的偏見：日系米人の悲劇』, 新泉社, 1970, 440p.
・ 南川文里, 『「日系アメリカ人」の歴史社会学』, 彩流社, 2007, 245p.
・ 蓑原俊洋, 『排日移民法と日米関係』, 岩波書店, 2002, 342p.
・ 三輪公忠編, 『日米危機の起源と排日移民法』, 論創社, 1997, 621p.
・ 村岡和彦, 「＜発表 1 ＞日本の多文化サービス：現状と課題（＜特集＞2007 年度図書館学セミナー：多文化社会の図書館サービス）」, 『図書館界』59(6), 日本図書館研究会, 2008, p339-344.

- 吉田亮, 『アメリカ日本人移民とキリスト教社会』, 日本図書センター, 1995, 358p.
- 吉田亮, 『アメリカ日本人移民の越境教育史』, 日本図書センター, 2005, 316p.
- レイデンソン, アレックス著／山本順一訳, 『アメリカ図書館法』, 日本図書館協会, 1988, 204p.
- 和田敦彦, 『書物の日米関係』, 新曜社, 2007, 406p
- American Library Association, *Survey of Libraries in the United States vol.3*, American Library Association, 1927, https://archive.org/details/surveyoflibrarie027173mbp, (accessed 2014-1-16)
- Asato, Noriko, *Teaching Mikadoism*, University of Hawai'I Press, 2006, 176p.
- Britton, Jasmine, "The library's share in Americanization", *Library Journal vol.43 no.10*, 1918, p723-727.
- Carr, John Foster, "Books in foreign languages and Americanization", *Library Journal vol.45 no.4*, 1919, p245-246
- Countryman, Gratia, "Shall public libraries buy foreign literature for the benefit of the foreign population?", *Library Journal vol.23 no.6*, 1898, p229-231.
- Campbell, J. Maud, "What the foreigner has done for one library", *Library Journal, vol.38 no.11*, 1913, p610-615.
- Cordell, Pauline, W, "A revisit to the San Francisco Public Library by a former patron", *Library Science no.6493*, 1972, p1-33.
- Gaillard, Edwin W., "Why public libraries should supply books in foreign languages.", *Library Journal vol28 no2*, 1903, p67.
- Held, R. E, *The rise of the public library in California*, American Library Association, 1973, 203p.
- Helling, Madelyn, "History of the San Francisco Public Library 1906-1917", Univ. of Calif., 1966, Libr.2250, 18p.
- Horton, Marion, "Library Work with the Japanese", *Library Journal vol.47*, 1922 p157-160.
- International Research Association, *Access to Public Libraries.* Chicago, American Library Association, 1963, 160p.
- Jones, Plummer Alston. Jr., *American public library service to the immigrant community 1876-1948*, University Microfilmes International, 1991, 617 p.
- Jones, Plummer Alston. Jr., *Libraries, immigrants, and the American experience*, Greenwood Press, 1999, 236p.

- Jones, Plummer Alston. Jr, *Still struggling for equality: American public library services with minorities*, Library Unlimited, 2004, 269p.
- Josephson, Aksel. G.S, "Foreign books in American library", *Library Journal vol.19 no.11*, 1894, p364.
- Kellor, Frances A., "What is Americanization", *Yale Review January*, 1919, reprinted in Phlip Davis, *Immigration and Americanization*, 1920, p623-638
- Kutler, Rosalind, "An interpretative history of the San Francisco Free Public Library 1877-1917", San Jose State Univ, 1995, Libr.280, 25p.
- Levine, Geno N., *The Japanese American community*, Praeger, 1981, 242p.
- Maltby, Adelaideb B., "Immigrants as contributors to library progress", *Bulletin of the American Library Association*, 1913, p150-154
- McMullen, Haynes, "Service to minorities other than Afro Americans And American Indians.", *A Century of service*, Chicago, American Library Asociation, 1976, p42-61.
- Olneck, Michael R., "Americanization and the education of immigrants, 1900-1925", *American Journal of education vol.97 no.4*, 1989, p398-423.
- Prescott, Della R., "What Americanization is not", *Library Journal vol.44 no.3*, 1920, p218.
- San Francisco Board of Supervisor, *Municipal Report of City of San Francisco 1909-1910,* 1910, https://archive.org/details/sanfranciscomuni59sanfrich, (accessed 2014-1-16)
- San Francisco Board of Supervisor, San Francisco municipal reports Fiscal year 1914-15, 1915, https://archive.org/details/munisanfrancisco64sanfrich, (accessed 2014-2-27)
- San Francisco Public Library, *Borrowers' Handbook*, San Francisco, 1901, 16p. http://sfpl.org/pdf/libraries/main/about/borrower_handbook.pdf, (accessed 2014-1-16) .
- San Francisco Public Library, "Library Timeline", San Francisco Public Library, http://sfpl.org/index.php?pg=2000105801, (accessed 2014-1-16) .
- Spickard, Paul, *Japanese Americans : the formation and transformations of an ethnic group*, Rutgers University, 2009, 257p.
- Stern, Stephen, "Ethnic libraries and librarianship in the United States: models and prospects", *Advances in librarianship vol.15*, 1991, p77-102.
- *The Revised Statutes of the United States second edition*, fovernment printing office, 1878, p380,

http://memory.loc.gov/cgi-bin/ampage?collId=llsl&fileName=018/llsl018.db&recNum=1 (accessed 2014-1-16)

- U.S. Census Bureau, "1.Nativity of the Population and Place of Birth of the Native Population: 1850 to 2000", *Historical Census statistics on the foreign-born population of the United States: 1850-2000,* http://www.census.gov/population/www/documentation/twps0081/twps0081.html, (accessed 2013-11-18)
- U.S. Census Bureau, "Volume2. Population, 1920. General report and analytical tables.", *Census of Population and Housing, 1920*, http://www.census.gov/prod/www/decennial.html, (accessed 2014-1-7)
- Wertheimer, Andrew, *Japanese American community libraries in America's concentration camps, 1942-1946*, University of Wisconsin, Madison Ph.D.Dissertation, 2004, 264p.
- Yust, William F. "What of the Black and Yellow Races?" *Bulletin of the American Library Association* July, 1913, p159-163.
- "Amendments to the Constitution of the United State of America", U. S. Government Printing Office, http://www.gpo.gov/fdsys/pkg/GPO-CONAN-1992/pdf/GPO-CONAN-1992-7.pdf, (accessed 2014-1-11)
- "editor", *Library Journal vol.19 no.10*, 1894, p328.
- "Foreigners work with", *Library Journal vol.40 no.4*, 1915, p292-293.
- "Japanese library formally opened", *San Francisco Chronicle,* November 5*,* 1912.
- "Oakland (Cal.) F. L.", *Library Journal vol.37 no.1*, 1912, p51.
- "Opening exfrcises of first Japanese library", *San Francisco Chronicle,* November 3*,* 1912.
- "September 30 1876", *American Library Journal vol.1*, 1876, p12.
- "The new building of the New York Public Library", *Library Journal vol.36 no.5*, 1911, p223-228.
- "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.11*, 1917, p336
- "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.13,* 1919, p342-343
- "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.14*,

1920, p299-300
・ "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.15*, 1921, p35
・ "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.16*, 1922, p228-229
・ "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.17*, 1923, p209-210
・ "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.18,* 1924, p249-250
・ "Work with the Foreign Born", *Bulletin of the American Library Association vol.19*, 1925, p220-221

＜分析文献＞

・ 『新世界新聞』, 1906 年～1929 年
・ 『日米新聞』, 1919 年～1929 年
・ *Library Journal vol.25 no.1～ vol.54 no.24*

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にご協力を頂きました。

海外移住資料館図書館資料室の井上さんを始めとする図書館員の方々には日本語新聞を収集するにあたり大変お世話になりました。調査日の調整時に気を使って頂いたり、資料収集時にも声を掛けてくださり嬉しかったです。色々ご迷惑もかけたと思います。本当にありがとうございました。さらに、卒業研究時から引き続きサンフランシスコ市立図書館のサンフランシスコヒストリーセンター（San Francisco History Center）の方々にはお世話になりました。サンフランシスコ市立図書館に関してメールでのレファレンスを受けてくださり、さらに簡単に解答しにくい内容の上、私の拙い英語の文面をくみ取って丁寧に解答をしてくださり、とても感謝しております。

様々な方にお世話になりながらも、収集してきた文献を充分生かしきれなかったのは、私の力不足以外ありません。今回収集した資料は、今後の研究で活用できるように研究室への提供、保存をしたいと思っています。

また、卒業研究の時から数えると 3 年間、共に奮闘してきた冷静さんにも感謝の言葉を伝えたいと思います。お互いの研究について話したり、研究に真摯に向き合っている仲間を見ることができ、よく怠けてしまう私も修士論文を書ききることができたのだと思っています。

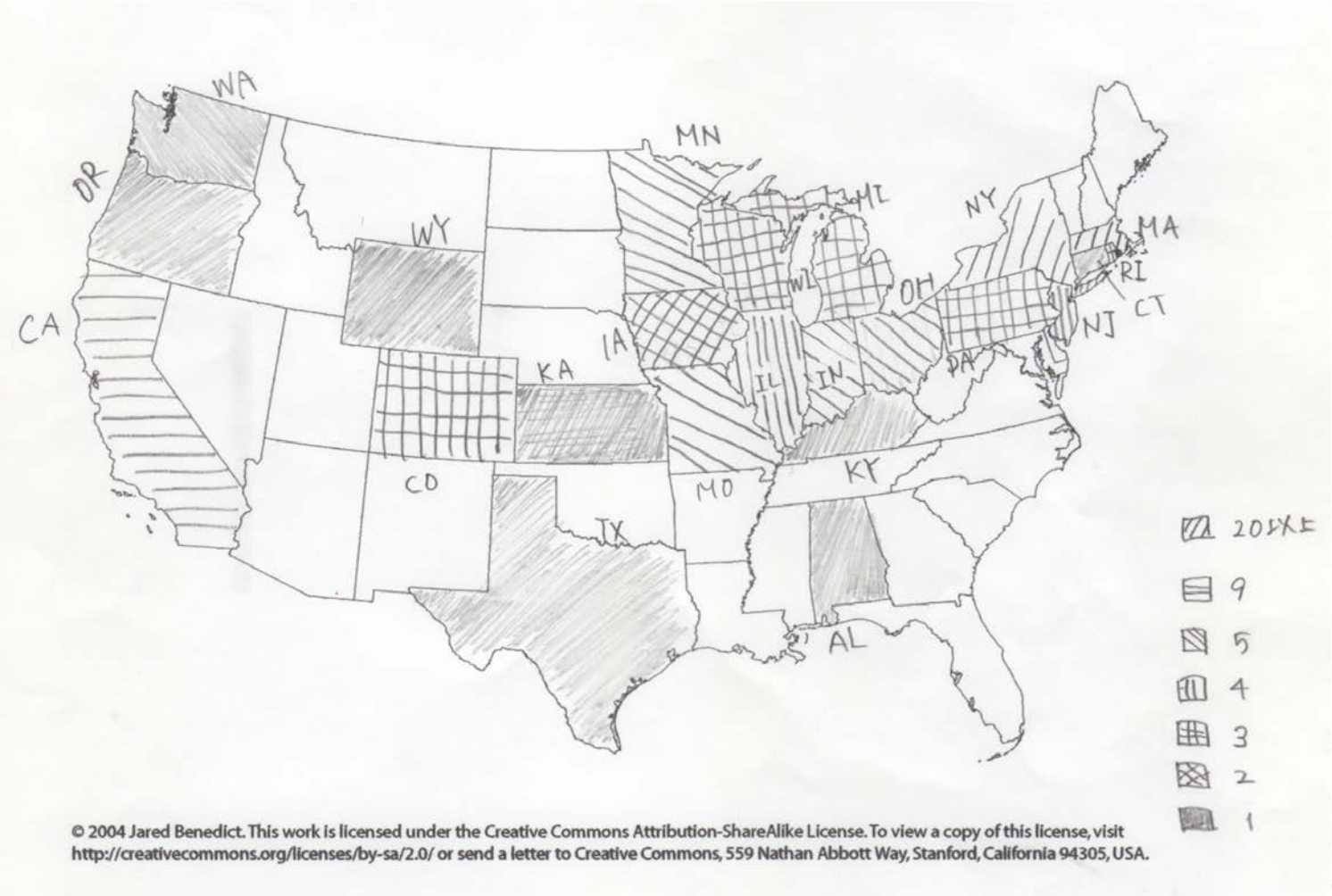
そして、副指導教官の呑海沙織先生には、研究に対しいつも鋭い質問と指摘を頂きました。新たに発見することや、より深く研究について考えるきっかけとなりました。ありがとうございました。

指導教官の溝上智恵子先生には、卒業研究の時から約 3 年間、本当に本当にお世話になりました。最後の最後まで研究をみてくださり、厳しくも優しい指導をして頂きました。最初から最後まで、溝上先生にはご迷惑・ご心配ばかりかけてしまいました。大変にお忙しい中、この 3 年間辛抱強く見守ってくださり、言葉では言い表せないほど、とても感謝しております。本当にありがとうございました。

最後に、家族からの支援がなければ学生としてここまでやり遂げることはできませんでした。ありがとうございました。

付録 1

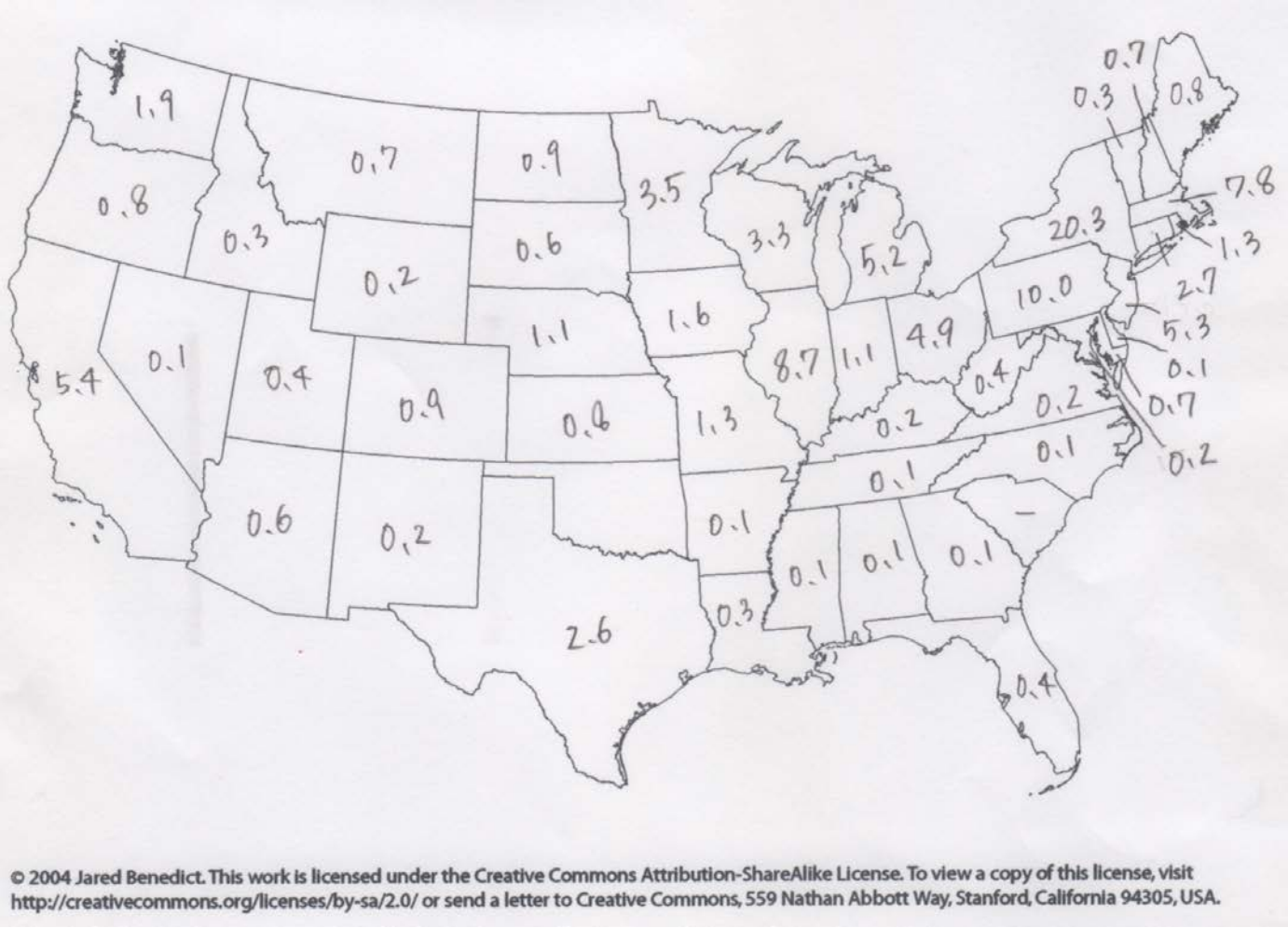
Library Journal 掲載の州別移民サービスに関する記事（1900-1929）



（筆者作成）

付録 2

全体を 100%とした時の外国人出身者の分布（1920 年）（%）



（筆者作成）

付録3　*Library Journal*収集記事一覧（1900年-1929年）

no.	year	*vol.*	*no.*	pages	title	author	speaker	affiliation	state/city	immigrant group	service/program
1	1903	*vol.28*	*no.2*	p67	″Why public libraries should supply books in foreign languages″	Gaillard, Edwin. White	0	0	ニューヨーク	ドイツ、フランス、ボヘミア、スラブ	外国語図書コレクション
2	1904	*vol.29*	*no.2*	p65	″Supplying books in foreign languages in public libraries″	Campbell, J. Maud	0	Librarian Passaic PL	ニュージャージー、ニューヨーク	ドイツ、フランス、ボヘミア、スラブ、オランダ、イタリア、ロシア、ポーランド、ヘブライ、イディッシュ	外国語図書が図書館の集客になる
3	1904	*vol.29*	*no.9*	p476-477	″Notes on children's reading″	0	0	0	0	ユダヤ、ハンガリー、ボヘミア、ロシア、ポーランド、スラブ、イタリア、アイリッシュ	移民の子供に対する選書
4	1905	*vol.30*	*no.10*	p797	″A proposed guide to the selection of vurrent Italian books″	W. W. B.	0	0	0	イタリア	最新のイタリア語図書の選書方法
5	1906	*vol.31*	*no.7*	p65-67	″The library in relation to specian classes of readers: Books for the foreign population I″	Canfield, James Hulme.	0	Librarian of Columbia University	ニューヨーク	イタリア	必要な情報を提供すれば、移民は良い市民になる
6	1906	*vol.31*	*no.7*	p67-70	″Books for the foreign population II″	Bostwick, Arthur E.	0	Chief of Circulation Department, New York PL	ニューヨーク	ロシア、ヘブライ、ボヘミア、ハンガリー、イディッシュ、ルーマニア、スウェーデン、ノルウェー、ギリシャ、フランス、イタリア	余暇のため、祖国に帰国する際の知識のために外国語図書を利用している，移民がアイデンティティとアメリカ化の狭間で葛藤しているということを示している，アメリカ化したら外国語図書いらない

7	1906	*vol.31*	*no.7*	p70-72	″Books for the foreign population III″	Campbell, J. Maud	0	Librarian Passaic PL	ニュージャージー、ニューヨーク	スペイン、ドイツ、イディッシュ、イタリア	アメリカの情報に関する母国語の図書を増やすべき
8	1907	*vol.32*	*no.4*	p157-158	″An educational opportunity and the library″	Campbell, J. Maud	0	Librarian Passaic PL	ニュージャージー、ニューヨーク	0	図書館が成人教育の場
9	1909	*vol.34*	*no.4*	p171	″New York Public Library children's books in foreign	A. C. M.	0	0	ニューヨーク	ボヘミア	移民サービスの活動の紹介
10	1909	*vol.34*	*no.11*	p469-470	″editor″	0	0	0	0	0	外国語図書がどのような層に読まれているか
11	1910	*vol.35*	*no.4*	p161	″Use of the library by foreigners as shown by the Carnegie library of Homestead, PA″	Stevens, W. F.	0	0	ペンシルバニア	フランス、ドイツ、イタリア、リトアニア、スラブ	外国語図書コレクション，活用方法
12	1910	*vol.35*	*no.6*	p242	″editor″	0	0	0	ニューヨーク	ボヘミア	移民サービスの活動の紹介
13	1911	*vol.36*	*no.1*	p4-9	”The Christmas book exhibit in library”	Plummer, Mary W.	Mary W. Plummer	プラット図書館学校（Pratt Institute Library School）	ニューヨーク/ブルックリン	0	クリスマスプレゼントとしての本についてレファレンスサービス
14	1911	*vol.36*	*no.1*	p37	“Carnegie Library of Pittsburgh”	Olcott, Francis J.	Jane Maude Campbell	パッセイク公共図書館（Passaic Public Library）	ニュージャージ	0	「パッセイク公共図書館における外国人との仕事（”The work with foreigners in Passaic Public Library”）」と「移民委員会の仕事（”The work of the Immigrant Commission”）」という講義を行った

15	1911	*vol.36*	*no.1*	p32	“Keystone State Library Association”	Wilder, Gerald G.	Peter Roberts	青少年キリスト教会（Young Men’s Christian Association）の国際委員会（International Committee）員	キーストーン	0	「アメリカで、図書館員は外国語話者の人々に対して何ができるのか（”What can the library do to aid the foreign speaking people in America”）」のセッション。外国人に対するサービス
16	1911	*vol.36*	*no.2*	p51-54	“On the college professor”	Salmon, Lucy M.	Lucy M. Salmon	ニューヨーク市にある大学教授	ニューヨーク	0	移民を含めた様々な人に向けて、たとえばアメリカの歴史など主題別にリストを作る。
17	*1911	*vol.36*	*no.2*	p55-62	“The psychological moment”	Freeman, Marilla W.	Marilla W. Freeman	ニューワーク公共図書館（Free Public Library, Newark）レファレンス員	ニュージャージ	中国	中国人をルールを守らず、文句を言う人々と描く
18	1911	*vol.36*	*no.2*	p82-83	″New York Library Club″	Hutchinson, Susan A.	Charles R. Towson	Industrial department, International Committee, Y. M. C. A.	ニューヨーク	0	外国人への英語教授。図書館では9クラス開かれている。Peter Robertの英語学習方法を紹介
18	*1911	*vol.36*	*no.2*	p82-83	″New York Library Club″	Hutchinson, Susan A.	Vladimir Simkhovitch	Greenwich House	ニューヨーク	スカンジナビア、ドイツ、ユダヤ、イタリア	大人に対してのストーリーテリング/英語の古典を田の言語に訳す

18	*1911	*vol.36*	*no.2*	p82-83	"New York Library Club"	Hutchinson, Susan A.	Maltby	Tompkins Square Branch	ニューヨーク	ハンガリー	Y. M. C. A.と協力して英語教室/アシスタントとして外国人に協力してもらうことを主張
18	*1911	*vol.36*	*no.2*	p82-83	"New York Library Club"	Hutchinson, Susan A.	Burns	Hudson Park Branch	ニューヨーク	イタリア	イタリア人の図書の好みの傾向分析(空想・恋愛小説、詩)/外国人の要望:法律や行政の図書、シンプルで分かりやすい「移民のためのガイド」
19	1911	*vol.36*	*no.2*	p91-92	"Springfield, Mass. City L. Assoc."	0	0	Springfield, mass City L Assoc.	マサチューセッツ	0	外国人利用者の増加/定期的に外国語図書を購入している/簡単な英語の図書購入予定
20	1911	*vol36*	*no.4*	p180-181	"The bibliographic work of the library of the United States Bureau of Education"	Greenman, Edward Douglas	0	0	0	ドイツ、フランス	書誌事項には、英語の教育関係図書だけでなく、ドイツ語とフランス語の図書も含まれている。
21	1911	*vol36*	*no.4*	p213	"San Francisco (Cal.) P. L."	0	0	0	カリフォルニア	イタリア	支部図書館で大きなイタリア語図書のコレクション開始
22	1911	*vol36*	*no.5*	p223-228	"The new buliding of the New York Public Library"	0	0	NYPL職員	ニューヨーク	スラブ、ユダヤ、東洋、(日本)	スラブ語、イディッシュ語、東洋のコレクションがある特別な部屋を新たに設置(移民へのサービス目的かは不明)
23	1911	*vol36*	*no.5*	p233-237	"The New York Public Library"	Billings, John S.	0	Director of the Library	ニューヨーク	東洋、アイルランド、ユダヤ	東洋のコレクションはある手続きを行い許可されたもののみ閲覧可能。アメリカの歴史、ユダヤの歴史、スラブ文学、東洋文学あり。/価値ある日本語(Japanese prints)コレクションあり。/アイルランドの歴史と文学が1,200冊
24	1911	*vol36*	*no.5*	p266-267	"Cedar Rapids (Ia.) F. P. L."	0	0	0	アイオワ	ボヘミア、ドイツ	学校にボヘミア語の大人用の図書を配架した。/外国語図書は少ないながら着実な利用がある。349冊のドイツ語図書、616冊のボヘミア語図書が1年間で発行されている。

25	1911	*vol36*	*no.5*	p267	″Fitchburg (Mass.) P. L.″	0	0	0	マサチューセッツ	フランス、スウェーデン、ギリシャ	フランス語とスウェーデン語の外国語図書の貸出が増加している。/ギリシャ語の古典も需要が高まっている。
26	1911	*vol36*	*no.5*	p269	″Troy (N. Y.) P. L. Hart Memorial Building″	0	0	0	ニューヨーク	フランス、ドイツ、イタリア、ポーランド	外国語文書は833冊：仏312、独334、伊130、波57/波図書は移動図書館で貸出している。読者は少ないが最も熱心
27	1911	*vol36*	*no.6*	p278-285	″The relation of the public library to technical education″	Ranck, Samuel H.	0	公共図書館員（Grand Rapids, Mich.）	ミシガン	ドイツ、イタリア、ポーランド、スカンジナビア、リトアニア、ギリシャ、シリア、アルメニア	移民が多いという市の状況をふまえ、工業技術などに関するサービスについて述べられている。必要としている本、技術講習、移動図書館での提供が示されている。
28	1911	*vol36*	*no.6*	p299-300	″Branch library uses″	Leonard, O'scar	0	St. Louis public library	ミズーリ	ポーランド、ユダヤ、ルーマニア、ハンガリー、アイルランド、ロシア	自主学習のためのグループを作る。特に、移民の技術系労働者は学校や労働組合などからグループを設立した。
29	1911	*vol36*	*no.6*	p311-312	″Buffalo (N. Y.) P. L.″	Brown, Walter L.	0	0	ニューヨーク	イディッシュ、イタリア、ドイツ、スペイン	イディッシュ語とイタリア語の需要が増加し、ドイツ語とスペイン語の需要が低下している。
30	1911	*vol36*	*no.6*	p312	″Chicago, Ill. John Crear L.″	C. W. Andrew	0	0	イリノイ	東南アジア、中国	東南アジアの言語の図書の収集/価値のある中国文学をコレクションしている
31	1911	*vol36*	*no.6*	p314	″Leavenworth (Kan,) F. P. L.″	0	0	0	カンザス	ポーランド、ドイツ	ポーランドとドイツ人の読者が増加している。両者は学校からの貸出も大きい。
32	1911	*vol36*	*no.6*	p315	″Pittsburgh (Pa.) Carnegie L.″	Craver, Harrison W.	0	0	ペンシルバニア	ドイツ、イディッシュ、ポーランド	外国語の図書が増加し、ドイツ語、イディッシュ語、ポーランド語の蔵書が外国語図書蔵書数の3/4になった。

33	1911	*vol36*	*no.7*	p345	"The Pasadena exhibit of Library work with Children"	Humphreyss, Antoinetee M.	0	0	カリフォルニア	0	図書館での特別展がアメリカ人、外国人、黒人の子どもと協力して開催されたとの報告。
34	1911	*vol36*	*no.7*	p372	"Rhode Island Library Association"	0	0	0	ロードアイランド	0	「英語話者ではない人々との仕事」("Work with the non-English speaking people")で4人がプレゼンを行った。
35	1911	*vol36*	*no.7*	p383	"Haverhill (Mass.) P. L."	0	0	0	マサチューセッツ	フランス、イタリア、イディッシュ、ギリシャ	フランス語、イタリア語、イディッシュ語、ギリシャ語の100巻の外国語図書を購入
36	1911	*vol36*	*no.7*	p384	"New York, N. Y. American Seaman's Friend Society L."	0	0	0	ニューヨーク	ドイツ、ノルウェー、スウェーデン	英語が主流だが、ドイツ語、ノルウェー語、スウェーデン語の図書が所蔵されている
37	1911	*vol36*	*no.8*	p432-433	"Massachusetts Library Club"	MacNell, Laila A.	Keslie Hayford	secretary of the North American Civic League for Immigrant	マサチューセッツ	0	会議：図書館は大人の移民に対して、市民としての振る舞いを教えることができると主張。
38	1911	*vol36*	*no.8*	p438	"Pittsburgh (Pa.) Carnegie L."	0	0	0	ペンシルバニア	ポーランド、ヘブライ、イディッシュ、ハンガリー、ロシア	ポーランド、ヘブライ、イディッシュ、ハンガリー、ロシア語は、レファレンスコレクションにおいて主要なものが所蔵されていない。
39	1911	*vol36*	*no.9*	p461-463	"The social work of the St, Louis Public Library"	E. Bostwick	0	0	ミズーリ	ロシア、ポーランド、ボヘミア、スロバキア、リトアニア、ギリシャ、ルーマニア	図書館は個人の組織を作ることを支援している：高校の卒業生の組織が最近移民してきた人々に対して英語を教えている。/アメリカに来て間もなく、英語が少ししか理解できない人々のために、ロシア語、ポーランド語、ボヘミア語、スロバキア語、リトアニア語、現代ギリシャ語、ルーマニア語という読めない言語の図書も購入している。

40	1911	*vol36*	*no.10*	p496-499	“The library and the foreign-speaking man.”	Roberts, Peter	0	青少年キリスト教会(Young Men’s Christian Association)の国際委員会(International Committee)員	ニューヨーク/Tompkins Square Library	0	民主主義を実行するために図書館利用/図書館が英語を勉強する機会・図書館を訪れる機会をつくり、英語を話すことを促進する事が重要/帰化支援/アメリカに関する正確な知識/アメリカ人の移民に対する知識/どのような音楽に親しみがあるか、どのような絵画を好むのかなど、文化的側面を充実させることによって精神的な満足感を与える/(事例)アシスタントとして移民雇う
41	1911	*vol36*	*no.11*	p582-585	″Minnesota Library Association″	Conner, Elizaveth	Lily Borreson	Librarian of Two Harbors Public Library	ミネソタ	スカンジナビア、ドイツ、フィンランド、イディッシュ	図書館は外国人の母語の図書を提供すべき:子どもは英語はなせるが、大人は英語の習得が遅い。/スカンジナビア人、ドイツ人、フィンランド人、イディッシュは彼らの間で図書館に自分の母語の図書をリクエストしている
42	1911	*vol36*	*no.12*	p609	″editor″	0	0	Hartford Public Library	コネチカット	中国	新たな使節団はこず、中国人は貧しい人や反乱を起こす人ばかりのため、昔に中国から使節団がきた際の図書を破棄することを検討している。
43	1912	*vol.37*	*no.1*	p51	″Oakland (Cal.) F. L.″	0	0	0	カリフォルニア	エジプト、ドイツ、イタリア、日本、 チベットなど	エジプト、ドイツ、イタリア、日本、 チベットなどの写真コレクションあり
44	1912	*vol.37*	*no.1*	p51	″Salem Mass. Essex Inst. L.″	0	0	0	マサチューセッツ	中国	この図書館にある中国のコレクションはアメリカ1であり、海軍部屋(marine room)に1,200記録、商業海運関連が1,500冊ある。
45	1912	*vol.37*	*no.2*	p103	″Pratt Institute School of Library Science″	0	0	0	ニューヨーク	イタリア	イタリア語のカタログに関する講義が行われた

46	1912	*vol.37*	*no.2*	p115	″San Francisco (Cal.) P. L.″	0	0	0	カリフォルニア	イタリア	支部図書館では、10%の大人がイタリア語の図書を借りる。/中央図書館では、蔵書の6.5%しか外国語図書がないにも関わらず、1.5～2倍の貸出がある。
47	1912	*vol.37*	*no.3*	p137-140	″Library Appointments″	0	0	0	ケンタッキー/Louisville Free Public Library	フランス、ドイツ、ラテン、ギリシャ	フランス語:5,500巻、ドイツ語:4,500巻、ラテン語とギリシャ語:100/これらの図書を使ってアメリカにおけるマナーを学んで欲しい
48	1912	*vol.37*	*no.4*	p202-205	″Massachusetts Library Club″	Mc Neil, Laila A.	Marguerite Reid	Foreign Department of the Providence Public Library	ロードアイランド	0	17カ国語の図書を計7,500巻所蔵している。これらの図書は他の図書と分けている。/大人の移民に対し、英語を学ぶことができるように、文法に関する図書、仕事に役に立つ(貿易など)単語を集めた図書を準備している。/アメリカの歴史、行政、旅行、新たな市民のために役に立つ図書などを揃えている。/外国語図書コレクションで多くを援助している。/特に大人の移民は自分の言語や文化、自国の文学を恋しいと思っている。
48	*1912	*vol.37*	*no.4*	p202-205	″Massachusetts Library Club″	Mc Neil, Laila A.	May Ashley	Greenfield the local chapter of the Daughters of the American Revolution	インディアナ	ポーランド	大人のポーランド人に教育を行っている。その時に図書を配架する。/学校は生徒にポーランド語とフランス語の本やプリントを配布し、親に利用してもらう。
48	*1912	*vol.37*	*no.4*	p202-205	″Massachusetts Library Club″	Mc Neil, Laila A.	H. H. Ballard	Pittsfield	マサチューセッツ	イタリア	イタリア人移民に向けたガイドを提供している。内容は、アメリカの歴史、行政、法律、州行政、選挙権、教育、宗教について。

49	1912	*vol.37*	*no.4*	p207	″Wisconsin Library Association″	Ovitz, Delia G.	Flora B. Roberts	0	ウィスコンシン	0	″The library and the foreign citixen″で、外国語図書を提供することは英語獲得に関係があり、同化を促進することになると主張。
50	1912	*vol.37*	*no.5*	p251-256	″The children's share in a public library″	Carson, Jessie M.	0	Children Librarian Takoma Public Library	ワシントン	0	移民のことその親に対するサポートについて（要チェック）
51	1912	*vol.37*	*no.5*	p289	″Cleveland (0.) P. L.″	Brett, William H.	0	0	オハイオ	0	最も大切なことは分類された図書を配架することである。8カ国語の外国語コレクションをよく利用される分館へ移動させた。
52	1912	*vol.37*	*no.5*	p290	″Davenport (Ia.) P. L.″	Rose, Grace D.	0	0	アイオワ	ドイツ、ボヘミア、スウェーデン	ドイツ語：262巻、ボヘミア語:24　他の言語も含め計2,653巻/スウェーデン語図書を新たに購入予定
53	1912	*vol.37*	*no.6*	p379	″Other reference books″	0	0	0	0	フランス、ドイツ、ハンガリー、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク	publishing boardが各言語の図書のリストを発行。各言語を扱う人によって作られたリスト。
54	1912	*vol.37*	*no.7*	p389	″How libraries advertise″	0	J. C. Dana	librarian Newark, N. J.	ロードアイランド州/プロビデンス	ヘブライ、ポルトガル、ロシア、イタリア、ギリシャ	ロードアイランド州の図書館では各言語のリストと報告書を展示している。政治、文化、歴史、福祉の知識を得るための本を図書館で教えてもらう。
55	1912	*vol.37*	*no.7*	p349-350	″Connecticut library association″	Wright, Harriet S.	Emma E. Beardsley		Goshen Public Library	フランス、スイス、ロシア	フランス人、スイス人、ロシア人の多い地域の図書館。会話から手助け、リストの提供。

56	1913	*vol.38*	*no.10*	p566-568	"What the library can do for our foreign-born"	Carr, John Foster	0	0	ニューヨーク/Mount Vernonを例に	0	簡単な英語で簡単な講座を行い、図書館を知ってもらい、使い方を学ぶ。図書館に来るようにアプローチする。/外国語の図書、雑誌などを揃える/移民のためのアメリカガイドを各言語揃える(これらの実戦例をイタリア人を使って記述している)
57	1914	*vol.39*	*no.1*	p49	"California Library Association: fourth district branch"	0	J. L. Gillis	State Librarian	カリフォルニア	フランス、ドイツ、ポルトガル、スペイン、メキシコ、イタリア、ロシア、スウェーデン	外国人が利用する本を購入し、サンノゼの4地区の図書館に配架する。/英語が話せる外国人の図書の要望に応える。8カ国語の図書を購入する予定。/外国語の定期刊行物や新聞の購入の検討
58	1914	*vol.39*	*no.1*	p83	"Foreigner, work with."	0	J. M. Campbell	Massachusetts Frere Public Library Commission	マサチューセッツ	0	図書館で外国人を雇うことを推奨。/彼らの手で彼ら自身の言語でアメリカについて伝える重要性。外国人が欲しいと思う図書を得られる。教える側は自信に繋がる
59	1914	*vol.39*	*no.2*	p162	"Foreigner, work with."	0	0	0	Indianapolis Public Library	ルーマニア、スラブ、ハンガリー、ギリシャ、ブルガリア	ルーマニア語、スラブ語、ハンガリー語の図書ある。/ギリシャ語とブルガリア語の図書のリストを作成中
60	1914	*vol.39*	*no.2*	p162	"Foreigner, work with."	0	0	0	Chicago	0	アメリカ初の中国図書館がオフィシャルガゼット図書館(Official Gazette Library)として設置

61	1914	*vol.39*	*no.2*	p162	"Foreigner, work with."	0	0	0	マサチューセッツ	0	非英語話者が多い地域に図書館を設置し、外国語図書があると知らせる。/移動図書館を移民が多い地域に巡回させる。/要望があった本はできるだけ早く支部図書館や移動図書館に配架する。/12の図書館では移民の手を借りて、外国語図書のリストを作成した。/「現代と古代のローマ」("Modern and Ancient Rome")という題でイタリア人に講座を行ってもらった。
62	1914	*vol.39*	*no.6*	p475	"Birmingham"	0	0	0	アラバマ	0	外国人に対して図書館利用を進める。/英語が勉強できる図書を揃えている。
63	1914	*vol.39*	*no.8*	p604-605	"Southern Tier Library Club"	Ruckteshler, N. Louise	Adelaide Bowles Maltby	Librarian of Tompkins Square branch	ニューヨーク	0	外国人に対し、図書館に来るように呼びかける。/外国人のニーズを得る事が大切。/よい市民になるために教育する
64	1914	*vol.39*	*no.8*	p606-607	"New York Library Club"	Frick, Eleanor H.	0	0	ニューヨーク	0	移民がニューヨークに与える影響についての会議/衛生面、経済面、雇用に関しての影響(直接図書館について議論はしていない)
65	1915	*vol.40*	*no.2*	p132-133	"Books for foreigners"	Newberry, M. A.	John Foster Carr	Immigrant Publication Society/New York	ワシントン、フランクリン、ジェファソン、リンカン	イディッシュ、スペイン	Immigrant Publication Societyは移民に対し、アメリカの歴史、行政、考え方などが書かれた図書を提供する。労働者に対しても適応できる図書。/イディッシュ語のリスト、スペイン語話者に対してガイドの提供、ワシントン、フランクリン、ジェファソン、リンカンでは、簡単な英語でガイドの提供を予定している。
65	*1915	*vol.40*	*no.2*	p132-133	"Books for foreigners"	Newberry, M. A.	Betteridge	N. Y. State Library	ニューヨーク	0	信頼のおけるリスト、主題ごとのリスト、簡単な英語での図書を出版

65	*1915	*vol.40*	*no.2*	p132-133	"Books for foreigners"	Newberry, M. A.	Lapes	North American Civic League for Immigrants	ニューヨーク	0	移民の母親に対するパンフレットなどが必要/学校、子どもの教育、料理、家事、買い物などの知識を求めている
65	*1915	*vol.40*	*no.2*	p132-133	"Books for foreigners"	Newberry, M. A.	Campbell	0	0	0	移民に対して、農業に関する本をできるだけ早く提供できるように準備する必要がある
66	1915	*vol.40*	*no.4*	p233-239	"The foreign child and the book"	Poray, Aniela	0	0	ミシガン/デトロイト	ユダヤ、ポーランド、ハンガリー、ボヘミア、イタリア、ドイツ	選書は移民の精神的側面、母国の文化、文化継承という観点で選ぶとよい。/移民のことを理解するために外国人のリーダーに仕事をしてもらう。/外国人住居地区に小さい図書館ステーションを設置した。/各言語によって好む図書が違う事を明らかにして、例を挙げて説明している。(ユダヤ、ポーランド、ハンガリー、ボヘミア、イタリア、ドイツ。ユダヤ、イタリアの説明が多い。)/学校と同様に、図書館もアメリカ化を援助できる。アメリカ化を目指す。
67	1915	*vol.40*	*no.4*	p273-274	"Chicago Library Club"	Shearer, A. H.	Grace Abbott	Immigrants' Protective Leaque	イリノイ/シカゴ	0	各言語で移民へ情報を提供する必要がある。/アメリカの方法や市民権に関する知識を得られる定期刊行物や新聞を提供すべき。シカゴは少しづつはじめている。
68	1915	*vol.40*	*no.4*	p273-274	"Chicago Library Club"	Shearer, A. H.	Henry E, Legler	Chicago Public Library	イリノイ/シカゴ	0	外国語図書は、16ヶ国語で60,000巻所蔵、うち開架式で閲覧できるのは18,000巻。読書部屋には新聞や定期刊行物もある。/移民の子どもに対し英語でお話し会/事務所、移動図書館、学校、公私問わず協会でもサービスしている。

69	1915	*vol.40*	*no.4*	p292-293	″Foreigners, work with″	0	0	immigration committee of Y. W. C. A.	ニューヨーク/Binghamton Public Library	ハンガリー、ボヘミア、スロバキア、ルーマニア、アルメニア、イタリア、日本、中国、シリア、ロシア	世界の手工業店を行う。外国人が図書館を訪れる機、アメリカ人が移民について知る機会として/所蔵しているのはアルマニア語、イタリア語、ポーランド語、イディッシュ語であり、貸出数多い。アメリカ市民としての意識を芽生えさせる。
69	*1915	*vol.40*	*no.4*	p292-293	″Foreigners, work with″	0	Simpson	Comission a traveling library in Armenian	マサチューセッツ/Chelsea	アルメニア	アルメニア人地区に対して移動図書館を巡回させている。アルメニア人をアシスタントとして雇い、アルメニア語の選書・カタロギングを行っている。
70	1915	*vol.40*	*no.4*	p292-293	″Foreigners, work with″	0	J. M. Campbell	Public Library Commission	マサチューセッツ/Chelesa	アルメニア	よく利用される図書のリストを作成する。
71	1915	*vol.40*	*no.6*	p402-405	″Problems of foreign registration″	Bancroft, Edna H.	0	0	ニューヨーク/Brownsville branch of the Brooklyn Public Library	ユダヤ	ユダヤ系移民は、すんでいた国によって方言があり、英語での発音の癖、表記方法も若干違う。名前が英語で書けないことがあるため、図書館が発音の癖や表記の違いを整理してファイリングしている。
72	1915	*vol.40*	*no.6*	p450	″Foreigners, Holiday receptions for″	0	0	0	ペンシルバニア/Philadelphia, オハイオ/Cleveland, メリーランド/Baltimore, カリフォルニア/Los Angels	0	移民が帰化した際に、祝賀会を行っている地域がある。図書館が協力している。帰化した記念に小さなアメリカ国旗、美術館のチケットなどをプレゼントする。

73	1915	*vol.40*	*no.8*	p621	″Foreigners, work with″	0	0	0	ミネソタ	フラマン、イタリア、スロバニア、ボヘミア、ノルウェー	5カ国語の図書を所蔵/Chisholm libraryでフラマン語、イタリア語、スロバニア語を先導者に対して提供を始めた。/新しい市民に対して分かりやすい英語でリストを提供/
73	*1915	*vol.40*	*no.8*	p621	″Foreigners, work with″	0	0	0	マサチューセッツ	スウェーデン、アラビア、フィンランド、フランス、ドイツ、ギリシャ、ハンガリー、イタリア、リストアニア、ノルウェー、ポーランド、ポルトガル、ロシア、スペイン、イディッシュ	スウェーデン語:50巻/地元の新聞などであることを宣伝する/60の移動図書館で8カ国語の図書提供/外国語図書購入リストから24のリクエストを得ている。
74	1915	*vol.40*	*no.8*	p621	″Greeks, work with″	0	0	0	コロラド	ギリシャ	英語をギリシャ語に訳す講座を行う。
74	*1915	*vol.40*	*no.8*	p621	″Greeks, work with″	0	0	0	ニューヨーク	ギリシャ	ギリシャ語の図書を50巻所蔵。
75	1915	*vol.40*	*no.9*	p684	″Foreigners, work with″	0	0	0	マサチューセッツ	イタリア	イタリア人の講座を行う/州はイタリア移民に教育、工業、図書館利用について講座/委員会は外国人をアシスタントとして雇用/外国語図書の移動図書館。60の移動図書館で8カ国語を扱う。
76	1915	*vol.40*	*no.11*	p827	″Boston″	0	0	0	マサチューセッツ	0	ボストンでの移民の様子などについてのレポートをまとめる

77	1915	*vol.40*	*no.12*	p851-855	"The foreign child at a St.Louis Branch"	McPike, Josephine M.	0	0	ミズーリ	ユダヤ、イタリア、ポーランド、アイルランド、ロシア	移民は子ども部屋にも関わらず滞在しているので、他の場所へ移動してほしい/図書館で起きる移民の問題(ユダヤ、イタリアの例を取り上げる)は、アメリカと考え方が各々異なるために起きると主張。/図書館員が違いを理解し、それに則したアプローチを行う必要性/子どものアメリカ化目指す
78	1916	*vol.41*	*no.1*	p73	"Foreigners, work with"	0	Frances Earhart	Librarian of the Public Library of Duluth	テキサス	スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、イタリア、クロアチア、フランス	移民のために適切な図書、最新書を購入するために移民を雇うことを主張/図書館は移民教育において最も影響がある。学校、YMCA、夜間学校と協力して教育を行うべき。/3カ月毎に各図書館に置く外国語図書を回している/フランス作家の図書の翻訳をすすめる
79	1916	*vol.41*	*no.2*	p151	"Foreigners, work with"	0	0	Public Library at Lynn	マサチューセッツ	0	市民権に関する外国人向けの講座を11月に行うため準備中である。/帰化に関するセッションを外国人を交えて行った。
80	1916	*vol.41*	*no.4*	p303	"Foreigners, work with"	0	0	Public Library in Portland	オレゴン	0	市民権と英語の学習に関する外国語の図書を揃えている。/帰化に関する援助、帰化の試験に対してサポート
81	1916	*vol.41*	*no.4*	p438-439	"Foreigners, work with"	0	0	Detroit Public Library	ミシガン	0	アメリカ市民になる移民を図書館と群職員が援助する。群職員は移民に特別なカードを配付し、それを見せると図書館員が移民に役立つ図書をレファレンスするサービス。

82	1916	*vol.41*	*no.6*	p478-479	″The library and the immigrant in St. Louis″	0	Ruth Crawford	0	ミズーリ	ドイツ、フランス、ポーランド、ボヘミア、デンマーク、ハンガリー、イタリア、スペイン、クロアチア、ユダヤ、アラビア	″The immigrant in St. Louis″の内容の抜粋。/移民がよい市民になるために支部図書館を移民地区の近くに設置。/図書館は、54カ国語の図書を所蔵。/定期刊行物は、ドイツ語:41、フランス語20、ポーランド語7、ボヘミア語17、デンマーク語2、ハンガリー語3、イタリア語4、スペイン語2、クロアチア語3、イディッシュ語7、アラビア語1、英語50/移民の子どもはアメリカ人が両親の子どもとは違ったナショナリティを持つので、注意してサービスする。/図書館はYMCAなどの外の協会などと協力して移民へのサービスを行っている。
83	1916	*vol.41*	*no.8*	p552-557	″Some of the people we work for″	Carr, John Foster	0	Director Immigrant Publication Society		イタリア、イディッシュ、	移民へのサービスに関する傾向を地域ごとにまとめる。
84	1916	*vol.41*	*no.8*	p577-578	″Second session″ (″The library's part in the Americanization of the immigrant″という題のセッション)	0	Shiels, Albert	reference division of the New York Board of Education	0	0	″The immigrant, the school, and the library.″と題してスピーチ。夜間学校などで移民を採用することを提案。
84	*1916	*vol.41*	*no.8*	p577-578	″Second session″ (″The library's part in the Americanization of the immigrant″という題のセッション)	0	Wheaton, H. H.	Federal Bureau of Education	0	0	″An Americanization program for libraries″ 夜間学校より、図書館の方がひろい世代に教育できる。提案:1)コミュニティの移民数と民族を調査、2)図書館の外国語図書が充分か、図書が法律や習慣理解の助けになっているか調査する。図書館はニーズを知ることができる。外国語でのポスター宣伝、夜間学校、協会での広報

84	*1916	*vol.41*	*no.8*	p577-578	"Second session" ("The library's part in the Americanization of the immigrant"という題のセッション)	0	Campbell, J. Maud	Massachusetts Frere Public Library Commission	0	0	より良い本と雑誌を移民に提供する
84	*1916	*vol.41*	*no.8*	p577-578	"Second session" ("The library's part in the Americanization of the immigrant"という題のセッション)	0	Carr, John Foster	Director Immigrant Publication Society	0	0	移民を採用することは、双方(移民と住民)に利点がある
85	1917	*vol.42*	*no.1*	p21-22	"Libraries and the "America first" campaign"	Wheaton, H. H.	0	Specialist in Immigrant Education, United States Bureau of Education	ニューヨーク、ロードアイランド/プロビデンス(Providence)	0	図書館は、夜間学校を支援することが出来る。夜間学校はアメリカ化を行う機関のひとつ。英語を勉強する移民が読むことが出来る外国語新聞などをリスト化して提供する。翻訳できればそれも提供。手法を提案。
86	1917	*vol.42*	*no.2*	p81-82	"editor"	0	Carr, John Foster	Immigrant Publication Society	0	0	次世代の移民(2世)の知識・教養を支援することが活力のある新しいアメリカ市民を育成する。/コピーした新聞の提供を行う
87	1917	*vol.42*	*no.2*	p159-160	"The immigrant Publication Society needs support"	Anderson, E. H.	0	New York Public Library	ニューヨーク、	イタリア、イディッシュ、ヘブライ、ポーランド	移民事務局は移民に対してアメリカの基本情報が記されたガイドを作成している。図書館がそれを提供できる。「移民と図書館」というガイドを出版している(移民事務局)/市民権のガイド、アメリカの歴史、農業についての図書提供/外国語図書のリスト/移民事務局と図書館と協力して移民に情報を提供する
88	1917	*vol.42*	*no.6*	p429-431	"Opportunities abroad : A suggestion to library school students"	Dickinson, Asa Don	0	0	0	0	外国人サービス(foreign service)を考えるためにも海外の図書館を見ることは重要であるとして、ヨーロッパとアジアの図書館の様子を調査

89	1918	*vol.43*	*no.1*	p4	″editor″	0	0	0	0	ドイツ	ドイツ語図書の輸入について、研究などで使われる図書は輸入するが、いかがわしいとされる図書に輸入制限を描ける条例（Trading with the Enemy Act)ができた。いかがわしい図書とは文学、技術書なども含まれるとALAは問題提起した。
90	1918	*vol.43*	*no.2*	p120	″American Library Association″	0	0	0	0	0	外国人サービス委員会(committee on work with the foreign born)がALAで設立した。移民サービスの情報を収集、提供、手法の提案などを行う。
91	1918	*vol.43*	*no.2*	p140	″Foreigners, work with″	0	0	0	マサチューセッツ	0	議会から図書館に移民サービスに関する資金援助。図書購入、非英語話者をアシスタントとして雇用するなどの費用に充てる。移民が良い市民になるための対策。
92	1918	*vol.43*	*no.5*	p339	″Carnegie Corporation to study Americanization″	0	0	0	0	0	カーネギー協会(Carnegie Corporation)がアメリカ化運動について、どのような研究分野があるのか、それらの分野における有効なサービス手法を調査する。
93	1918	*vol.43*	*no.7*	p475	″Using films to Americanize the alien″	Kempis, Thomas A.	0	0	0	0	図書館の取り組みではない。/無料で労働者に映画を見せる。アメリカ化の面で重要な役割を果たした。
94	1918	*vol.43*	*no.7*	p505	″Personnel of Americanization surbey″	0	0	0	0	0	アメリカ化運動調査の各分野における専門家紹介

95	1918	*vol.43*	*no.10*	p723-727	"The library's share in Americanization	Britton, Jasmine	0	Superbisor of Juvenile Department, Los Angeles Public Library	カリフォルニア/ロサンゼルス	イタリア、イディッシュ、メキシコ、日本、ギリシャ、ボヘミア	ロサンゼルスで行われている移民サービスはアメリカ化につながるとしてまとめている。各国語との英雄伝を提供/放課後のストーリークラブに図書を提供/夜間学校と連携し、図書館に来館するような仕組み作り(男性向け)/母親向けの家事に関する英語講習、図書提供/イディッシュのための雑談会/YMCAへ図書提供、ストーリータイムを行う/移民団体へ図書館サービスについての宣伝
96	1918	*vol.43*	*no.12*	p884-885	"Americanization thru foreign print"	Prestott, Della R.	0	Free Public Library, Newark, N. J.	ネワーク/ニュージャージー	0	10-15年間ほど図書館は教育やアメリカ化に注力してきた。/学校は教育、図書館はそれを手助けする存在/手紙やインタビュー、移民の有識者からの意見を外国語図書の選書に取り入れる。/本当に必要な図書を提供:料理本、法律、考え方、エスニック新聞に求めている情報が書かれている
97	1918	*vol.43*	*no.12*	p906	"Americanization"	Walker, Irma M.	0	0	ダルース(Duluth)/ミネソタ	ボヘミア、リトアニア、スロバキア、スロベニア、モンテネグロ、クロアチア、ブルガリア、オーストラリア、イタリア、ユダヤ、スカンジナビア、中国	移民の自国の風習は足かせになっている。そのため、アメリカ化は必須/図書館は学校の近くにある。子どもが学校のクラスで図書館にいくようになり、大人に伝えることができる。/大人に正しい情報を図書館から伝えることが大切

98	1919	*vol.44*	*no.3*	p139-142	"Here in the land of promise"	Horton, Marion	0	Acting Principal, Library School of the Los Angeles Public Library	0	0	学校図書館の教育内容について/移民の自国のレシピを取り入れた料理本を収集。それを通して文化を尊重、図書館に来るきっかけ/アメリカ化、図書館が地域の中心になることに繋がる。
99	1919	*vol.44*	*no.4*	p245-246	"Books in foreign languages and Americanization"	Carr, John Foster	0	Director, Immigrant Publication Society	0	0	英語の読み書き会話を学ぶことはアメリカ化に最も必要。/図書館がなぜ外国語図書を持つべきか:1,移民と英語の掛け橋となる2.子どもはすぐ英語を習得するが大人は習得が遅いため英語を学ぶ機会となる
100	1919	*vol.44*	*no.5*	p	"editor"	0	0	0	0	0	1世は英語習得が遅いので、母語が図書館からなくなったら図書館を音連れなくなるため、母語は必要である/子どもに対してはアメリカの歴史などを提供/アメリカ化を強要すべきではない
101	1919	*vol.44*	*no.10*	p657-658	"Citisenship"	0	0	0	0	0	策定委員会(Executive Board)も移民サービスを促進している/市民権を得るために英語の習得を母語で行う、習慣についての講習も/移民の自国の文化も尊重する
102	1919	*vol.44*	*no.10*	p668-669	"Americanization"	0	Frank, Mary	Rivington Street Branch of the New York Public Library	0	ネワーク	提案:アメリカの習慣を映像で見せる(ネワークでは実施している)、出版社にリスト作成をしてもらう
102	*1919	*vol.44*	*no.10*	p668-669	"Americanization"	0	Quigley, Marjorie	0	0	0	英語と母国語を用意することで両親と子どもが同じ話を読むことができる/小規模の図書館は共同で図書を購入するとよい/

102	*1919	*vol.44*	*no.10*	p668-669	"Americanization"	0	Bailey, Louis J.	0	ガリー(Gary)/インディアナ(Indiana)	0	アメリカ化機関(Americanization agency)が夜間学校に図書館を併設、YMCAなどの移民に関する機関が自由に図書館を利用できるようにした
102	*1919	*vol.44*	*no.12*	p729-730	"Americanization"	Gratiaa, Josephine	0	St. Louis public library	セントルイス	ハンガリー、クロアチア、ドイツ、スロバキア、ボヘミア、ギリシャ、オーストラリア、アルバニア、ルテニア、ポーランド、ユダヤ、セルビア、イタリア、ロシア、ウクライナ、リトアニア、スペイン、中国	図書館にくるための最初の取り組み:古典と同じくらい各国の有名な図書を母語で提供、移民のリーダーから意見を得て選書、エスニック新聞が宣伝に使える/次の取り組み:アメリカ化に向けて帰化権を得る支援、各機関と協力、エスニック新聞記者や有識者の意見の元各国ごとにリスト作成、英語教室/中国移民向けのイベントを行う
103	1919	*vol.44*	*no.12*	p732	"Colorado"	H, C.	0	0	デンバー(Denver)/コロラド(Colorado)	0	アメリカ化を行いやすくするために改装/料理教室、西方教室ができる部屋、各機関との協力
104	1919	*vol.44*	*no.12*	p759	"Libraries in relation to citizenship and Americanization"	Peter, Orpha Maud	0	Acting Librarian, Gary (Ind.) Public Library	ガリー(Gary)/インディアナ(Indiana)	イタリア、ポーランド、ロシア、ギリシャ	図書館はアメリカの考え方を浸透させ、本当のアメリカ市民にすることができる/英語図書と同じくらい良質な外国語図書を提供する/母親に対してアメリカの考え方、英語教育、図書館で行えるクラブ活動などを提供することにより図書館にいく習慣をつける/図書館は移民に対して共感、お互い理解することを望んでいるという姿勢が大切/図書館のアメリカ化は移民だけでなくアメリカ市民も対象としている

105	1919	*vol.44*	*no.12*	p792	"Americanization"	Ledbetter, Eleanor E.	0	Cleveland Public Library	クレベランド(Cleveland)	ボヘミア、ポーランド	1世のために母語の図書とエスニック新聞の提供、2世に対しては英語図書を提供/ボヘミア人が選書を手伝う/図書館のニュースをボヘミア語で提供/母国に関する図書を2世に提供
106	1920	*vol.45*	*no.1*	p42	"Missouri"	A. E. B.	0	St. Louis public library	0	ギリシャ	ギリシャ系移民に向けたイベントを開催。 ギリシャ語図書、歌、絵の展示などのプログラムを行う。
107	1920	*vol.45*	*no.5*	p209-212	"Making Americans"	Carr, John Foster	0	Director Immigrant Publication Society	0	0	移民の状況を理解せず行う移民サービスは適したサービスではない。移民にとって有意義な図書を収集し、リストを作ることが大切。
108	1920	*vol.45*	*no.5*	p213-214	"The immigrant Publication Society"	0	0	0	0	0	Immigrant Publication Societyの紹介。1914年にCarrが率先して作った組織。移民に対してアメリカのガイドブックの提供などを行っている。
109	1920	*vol.45*	*no.5*	p214-215	"The ten points of Americanism"	Crane, Frank	0	0	0	0	アメリカ化運動を行う際に重要な10点を記す。
110	1920	*vol.45*	*no.5*	p215-216	"The gifts of tha Nations"	Wright, Ida Faye	0	Librarian, Evanston Public Library	0	0	アメリカ化運動についての具体例。図書館と防衛委員会(Council of Defense)が共同で主催。図書館のクラブ室を利用して、移民が自分に関する話をし、アメリカ人としての自覚を高める。英語教室の開催。市民権獲得支援。
111	1920	*vol.45*	*no.5*	p217	"How atlittle booth helped a bid movement"	Woodford, Jessie M.	0	Head of Documents Division, Chicago Public Library	0	0	シカゴで開催された博覧会で移民やアメリカ化運動に関して言及した。具体的な移民に提供している資料を展示。移民はアメリカの文学や音楽に貢献している。

112	1920	*vol.45*	*no.5*	p218	"What Americanization is not"	Prescott, Della R.	0	In charge of work with the foreign born, Free Public Library, Newark, N. J.	0	0	強制的なアメリカ化運動を批判した記事。英語教育は推奨している。アメリカのことのみ教育するのはアメリカ化ではない。
113	1920	*vol.45*	*no.5*	p218	"'New Americans' and the Tacoma Public Library"	0	0	Tacoma Public Library	0	0	タコマ公共図書館での移民サービスについて。英語と母語でのアメリカに関する情報についての図書や講演の提供。
114	1920	*vol.45*	*no.5*	p221-222	"editor"	0	0	0	0	0	アメリカ化について。ぼんやりしたものである。Carrの主張を引用している。アメリカの歴史の紹介や市民権獲得支援は移民にとって酔い影響を与える。
115	1920	*vol.45*	*no.5*	p255-266	"Foreign exchange"	Raney M. Llewellyn	0	Librarian, The John's Hopkins University	0	0	ヨーロッパで発行された図書の価格について。
116	1920	*vol.45*	*no.5*	p326	"A history of the United States for the foreign-born"	Campbell, J. M.	0	Director Work with foreigners, Free Public Library Commission of Massachusetts, State House, Boston	0	イタリア	イタリア語のアメリカの歴史の図書を出版。英語のページもある。

117	1920	*vol.45*	*no.10*	p804	″Americanization work″	0	Ellis, Hannah C.	Hamilton Fish branch of the New York Public Library	ニューヨーク	0	ストーリーテリングやコーラスを行うことで友人を作る機会を提供する。映画上映。
117	*1920	*vol.45*	*no.10*	p804	″Americanization work″	0	Quigley	0	0	0	外国語図書を複数の小図書館で共同出資して購入するプログラム。
117	*1920	*vol.45*	*no.10*	p804	″Americanization work″	0	0	0	アラバマ	イタリア	情報局が移民に対してシンプルで有益な図書を提供することを提案。
118	1920	*vol.45*	*no.12*	p871	″Americanization by Indirection″	Daniels, John	0	0	0	0	アメリカ化とは、アメリカ化運動とは、という概論からはじまり、図書館は何ができるのかということまで言及している。1)大衆向けの外国語の図書の収集、2)外国語図書のコレクションと、簡単な英語の図書のコレクション、3)リストの作成、4)外国語新聞収集
119	1921	*vol.46*	*no.2*	p90	″Wisconsin″	0	0	0	ウィスコンシン	0	新聞部門で外国語新聞の収集（605vol）
120	1921	*vol.46*	*no.4*	p170-171	″Report of the librarian of congress for 1920″	0	0	0	0	ドイツ	14のファイルのドイツ語新聞、いくつかのヨーロッパの新聞の収集
121	1921	*vol.46*	*no.5*	p234	″Minesota″	0	0	0	ミネソタ	スウェーデン	スウェーデン系移民に対してパンフレット、新聞、図書の提供（5,000アイテム）
122	1921	*vol.46*	*no.7*	p322	″New Jersey″	0	0	0	ニュージャージー	0	技術書・アメリカ化のための図書を揃える。

123	1921	*vol.46*	*no.8*	p350	"Library needs of immigrants"	0	0	0	0	0	読書を通してアメリカ化していくまでの流れについて。新聞の日曜版を読む→アメリカのプランや仕事に関する図書を読む→アメリカの歴史や考え方などの図書を読む→移民が図書をリクエストする→学習のための図書を読む。これらは図書館で行うのが最も効率的。
124	1921	*vol.46*	*no.8*	p359-360	"Foreign arts and crafts exhibits at Los Angeles"	Shannon, Monica	0	0	カリフォルニア	メキシコ	メキシコに関する企画展を行った
125	1921	*vol.46*	*no.9*	p411-412	"New York Public Library's report for 1920"	0	0	0	ニューヨーク	ロシア、シベリア ユダヤ移民 東洋移民	スラブ系移民(ロシア、シベリア)、ユダヤ系移民、東洋系移民に対する部署があり、図書を提供している。
126	1921	*vol.46*	*no.20*	p856-857	"Work with the Foreign Born"	0	0	0	0	チェコスロバキア系移民	チェコスロバキア系移民に対するサービスに関しての特集。図書と音楽のコレクション構築、アメリカの生活のイラスト本(母語に翻訳したもの)の提供、図書のリスト作成。
127	1921	*vol.46*	*no.23*	p977-979	"Yiddish literature"	0	0	0	0	イディッシュ	外国人出身者サービス委員会の作成したイディッシュ語の図書のリストと、イディッシュ系移民についての紹介。
128	1922	*vol.47*	*no.2*	p67-70	"The Polish immigrant and the library"	Ledbetter, Eleanor E.	0	the A. L. A. Committee on Work with the Foreign	0	ポーランド	図書館員もポーランドに関する知識を得る必要がある。図書館と他機関(協会、学校、セツルメント、エスニック新聞)の連携方法について記述。
129	1922	*vol.47*	*no.5*	p218	"Americanization thru the library"	0	0	0	0	0	よい市民になるための取り組み。ストーリアワー、サイエンスクラブ、資格獲得の読書など提供できる。
130	1922	*vol.47*	*no.8*	p354	"Book on America in Foreign languages"	0	0	0	0	イディッシュ	移民出身者サービス委員会の取り組みについて。アメリカの生活や文化についての図書の翻訳を試みている。

131	1922	*vol.47*	*no.9*	p400-404	"Roumanians in the United States and their relations to Public Libraries"	Gratiaa, Josephine	0	Librarian of the Soulard Branch, St. Louis Public Library	0	ルーマニア移民	ルーマニア系移民の状況の紹介。ルーマニア語の図書のコレクション構築、英語教室、英語学習資料の提供、
132	1922	*vol.47*	*no.4*	p157-160	"Japanese immigrant"	Horton, Marion	0	Principal of the Los Angeles Library School	カリフォルニア/ロサンゼルス	日本	日系人に対するサービスについて。日系人の状況なども紹介。アメリカに関する情報提供。
133	1922	*vol.47*	*no.11*	p496-498	"Polish immigrant and the library"	Ledbetter, Eleanor E.	0	Librarian, Broadway Branch, Cleveland Public Library	0	ポーランド	1922年2月に発表された記事の続編。翻訳。有名なポーランドの図書の紹介。コレクション推進。
134	1922	*vol.47*	*no.16*	p663	"Work with the Foreign Born"	0	0	0	0	0	移民出身者サービス委員会の会議についての報告。ルーマニア、ポーランドの新聞に関してのディスカッション。
135	1922	*vol.47*	*no.18*	p751-###	"Source of material for library extension service"	Dimmitt, LeNoir	0	Extension librarian, University of Texas	0	0	移民に関するリスト有
136	1922	*vol.47*	*no.20*	p863-865	"The Greek immigrant and the library"	Quigley, Margery	0	Librarian Endicott(N. Y.)Free Library	0	ギリシャ	ギリシャ系移民についての基本的な知識の紹介。ギリシャ系移民に向けたイベントの開催。英希辞書提供。翻訳本の提供
137	1922	*vol.47*	*no.20*		"Selection and ourchase of Modern Greek books"	0	0	Chatham Square Branch, New York Public Library	0	ギリシャ	NYPLはギリシャのコレクションが構築されている。推奨するギリシャ語の図書のリスト。

138	1922	*vol.47*	*no.20*	p875-876	"American books in Yiddish"	0	0	0	ニューヨーク	イディッシュ	外国人出身者サービス委員会が会議で報告した内容について。アメリカの歴史や生活についての本をイディッシュ語に翻訳するプロジェクトを進めている。
139	1923	*vol.48*	*no.8*	p367-372	"Yiddish literature"	Meyrowitz, Jennie	0	Librarian of the Amalgamated clothing workers' library, New York City	0	イディッシュ	イディッシュ語の図書のリスト
140	1923	*vol.48*	*no.5*	p391-406	"Visiting branch libraries in Los Angeles"	Kennedy, Helen J.	0	Principal of Branches Department	カリフォルニア州/ロサンゼルス	ロシア、イディッシュ、フランス、ドイツ、スペイン、スカンジナビア	母語のコレクション構築（人口比で調整）
141	1923	*vol.48*	*no.5*	p406	"A. L. A. Committee on Work With Foreign Born"	0	0	0	0	イディッシュ、チェコ語	論文発表の報告、アメリカの歴史に関する本の翻訳活動
142	1923	*vol.48*	*no.9*	p421-423	"French literature in 1922"	0	0	0	0	フランス語	フランス語図書のリスト
143	1923	*vol.48*	*no.6*	p623	"Wisconsin"	0	0	0	ウィスコンシン州	0	外部で行われているアメリカ化のクラスを訪ね、図書館に関する説明を母語で行う。 簡単な英語の図書の準備
144	1923	*vol.48*	*no.9*	p724-726	"Massachusetts Library Club"	Whitmore, Frank H.	Johnston, Esther	New York Public Library	ニューヨーク	ロシア系ユダヤ人	ロシア系ユダヤ人に対してアメリカに関する入門書を英語でそろえるべき。

145	1923	*vol.48*	*no.9*	p724-726	"Massachusetts Library Club"	Whitmore, Frank H.	Wetmore, Marguerite Reid	Foreign Department of the Providence Public Library	ロードアイランド州/プロビデンス	0	アメリカ化のプロセスについて。暮らしと健康を整える。その後英語の習得。具体的なアメリカ化のプログラムの提案
146	1923	*vol.48*	*no12*	p911-915	"The Csechoslovak immigrant and the Library"	Ledbetter, Eleanor E.	0	Librarian of the Broadway Branch Cleveland Public Library/ Chairman of the A. L. A. committee on Work with the Foreign Born	クレバーランド州	チェコスロバキア系移民	チェコスロバキア系移民に関する歴史的背景について。2世に対する図書館サービスについて
147	1924	*vol.49*	*no.9*	p427	"What Swedish-Americans read"	0	0	0	0	スウェーデン移民	移民の特徴について。スウェーデン語の図書の蔵書状況について。スウェーデン系移民がどのような図書を読むのか解説。
148	1924	*vol.49*	*no.11*	p533	"Slav literatures"	Ledbetter, Eleanor E.	0	librarian of the broadway branth of the Cleveland public library	0	チェコ、スロバキア、ポーランド、ロシア、ウクライナ、スロバキア、セルビア・クロアチア語	スラブ語系の図書のリスト
149	1924	*vol.49*	*no.18*	p738-739	"Polish literature in English"		0	0	0	ポーランド	英訳されているポーランドの文学が少ないため、どのようなポーランド文学を英訳すればよいのか。

150	1924	*vol.49*	*no.20*	p969-973	"The immigrant and the library"	Panunzio, Constantine	0	C. L. S. C. Associate Director, Foreign Language Information Service	0	0	民サービスを行う意義について。サービス：母語図書・新聞の収集、アメリカの生活や考え方についての図書（母語を強調）、翻訳
151	1924	*vol.49*	*no.20*	p974-976	"Encouraging the foreign reader"	Phillips, Enda	0	Workswht Foreigners, Division of Public Libraries, Massachusetts Department of Education	マサチューセッツ	ロシア、アルメニア、イディッシュ、ボヘミア、中国、フィンランド、フランス、スウェーデン、ポーランド	マサチューセッツ公共図書館の移動図書館での外国語図書の提供状況について。母語の蔵書（29言語）、リストの提供、英語学習のための図書、アメリカの生活や仕事、歴史に関する図書の提供。
152	1924	*vol.49*	*no.20*	p974-976	"Italian and the Public library"	Sweet, May M.		Branch librarian, Cleveland Public Library	0	イタリア	イタリアを理解するための図書が少ない。市民権獲得の試験を支えるためにも図書館のサービスは重要。
153	1924	*vol.49*	*no.20*	p981	"The Foreign Language Information Service"	0	0	Panunzio	0	0	アメリカに関する情報を母語で提供する必要性、アメリカの精神を学ぶために移民の通訳の仕事をスト酔い。移民に関するサービスについて情報を図書館員や教員に対して作成する。そのために教員らは移民やサービスに関心を持たなければいけない。
154	1924	*vol.49*	*no.20*	p989	"editor"	0	0	0	0	0	同化は文化を捨てることではない。移民の精神を学ぶ図書が必要。 移民の精神面に寄り添ったサービスを行っていくべき。

155	1925	*vol.50*	*no.1*	p72	"The German book exhibit"	T. W. K.	0	0	シカゴ、ニューヨーク	ドイツ	ALAの大会でドイツ語図書の展示会を行うことが決定した。図書輸入の情報収集のため。シカゴとニューヨークで行われる。
156	1925	*vol.50*	*no.1*	p73-75	"Books in immigrant languages"	Ledbetter, Eleanor E.	0	Chairman of the A. L. A. committee on Work with the Foreign Born	0	イタリア、スロバキア、ポーランド、	現在の図書館事情について。翻訳。「ヨーロッパ」と限定して移民について言及。アメリカの歴史や健康についてのパンフレットの提供(Immigrant Publication Societyが発行している)、ヨーロッパの図書の出版状況、ヨーロッパでアメリカに関する図書が増えている。
157	1925	*vol.50*	*no.4*	p125-127	"The German book exhibit"	Koch, Theodore w.	0	Librarian, Northwestern University, Evanston	シカゴ	ドイツ	ALAの大会できかくされたドイツ語図書の展示会が行われ、その報告について。
158	1925	*vol.50*	*no.6*	p261-262	"French literature in 1924"	Schinz, Albert	0	Professor of Franch language and literature, Smith college	0	フランス	1924年に出版されたフランス語図書の推奨リスト
159	1925	*vol.50*	*no.10*	p414-415	"New York"	0	0	0	ニューヨーク	ユダヤ移民、オリエント、スラブ語	ユダヤ系部(Jewish Division)、東洋系部(Oriental Division)、スラブ語部(Slavonic Division)のコレクションの増加と利用数の増加。
160	1925	*vol.50*	*no.22*	p898-900	"Yiddish literature 1923-1925"	Meyrowitz, Jennie	0	0	0	イディッシュ	イディッシュ語の図書のリスト

161	1926	*vo.51*	*no.1*	p11-12	″Foreign library periodicals″	Schnacke, Mahlon K.	0	0	0	オランダ、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ポルトガル、スカンジナビア	ヨーロッパ各国で発行されている定期刊行物の中で、アメリカ公共図書館で所蔵するとよいもののリスト
162	1926	*vo.51*	*no.1*	p36	″Massachusetts″	0	0	0	0	0	図書館とアメリカ化に関して、図書館は教育機関と移民社会と協力して教育を行う。図書館利用を促す。
163	1926	*vo.51*	*no.2*	p121-124	″Expansion of the Los Angeles Public Library″	Hyers, Faith Holmes	0	0	0	イディッシュ、チェコ、スカンジナビア、ロシア、ハンガリー(グ) スペイン、フランス、ロシア、イタリア、スウェーデン、ロルウェー、イディッシュ、チェコ	28言語の文学の蔵書がある。図書館は、母語の図書を読むだけでなく、アメリカ人の友人を作る場所になる。アメリカ化やアメリカ化のクラスに関する情報を提供している。今まで入っていなかった言語の図書もコレクションをはじめている。(アイスランド語、アラビア語、フィンランド語、ハンガリー語)
164	1926	*vo.51*	*no.3*	p222-225	″Social activities of the County Library″	Etheridge, Mabel Wilkinson	0	0	ワオミング州	ギリシャ、イタリア(グ)	採鉱キャンプにて、読書室の提供。母語の図書提供。 (ボストン)各移民グループに対して図書を選択、YMCAの施設へ提供。 (全般)アメリカの基準的な考えや習慣を学ぶための資料を提供。
165	1926	*vo.51*	*no.12*	p978-979	″Work with the Foreign Born″	Quigley, Margery	0	0	デトロイト、クレバーランド、シカゴ、ニューヨーク、ミルウォーキー	0	各言語のカタロギング方法についての情報交換

166	1926	*vo.51*	*no.12*	p978-979	"Work with the Foreign Born"	Quigley, Margery	Goldstein, Fanny	Sedt End Branch Library, Boston	ボストン	イディッシュ	イディッシュ語だけのリストではなく、ユダヤ系に対して英語のリストも提供する。
167	1926	*vo.51*	*no.12*	p978-979	"Work with the Foreign Born"	Quigley, Margery	0	American-Scandinavian Foundation	ニューヨーク	スカンジナビア	スカンジナビア語のリスト、スカンジナビア語図書のコレクション
167	*1926	*vo.51*	*no.12*	p978-979	"Work with the Foreign Born"	Quigley, Margery	Hrbkova, Sarka	the Foreign Language Information Service	0	チェコ	チェコに関する主題リスト、チェコ語図書の購入
167	*1926	*vo.51*	*no.12*	p978-979	"Work with the Foreign Born"	Quigley, Margery	Hrbkova, Sarka	the Foreign Language Information Service	0	0	アメリカ市民権(citisenship)に関する図書の提供。簡単な英語図書の提供。
168	1927	*vol.52*	*no,1*	p37-38	"Massachusetts"	0	0	0	0	フランス	移民サービスのラウンドテーブル。フランス系へフランス語の新聞を6紙提供。
169	1927	*vol.52*	*no.3*	p237-238	"Cataloging of foreign books"	Taylor, Lucian E.	Wetmore, Francis	Providence Library	マサチューセッツ	0	外国語のカタロギングの問題点①名前・タイトルの音訳が困難②各言語できる人がいるとは限らない。→翻訳のための雑誌などを用いて行う。 レファレンスのために主題カードは個別に作るべき。

169	*1927	*vol.52*	*no.3*	p237-238	"Cataloging of foreign books"	Taylor, Lucian E.	Currier, T. Franklin	Harvard College Library/A. L. A. Catalog Committee	マサチューセッツ	0	特に少ない言語の図書は項目を省略してカタロギングする。特別に分けたカタログを作成する。
169	*1927	*vol.52*	*no.3*	p237-238	"Cataloging of foreign books"	Taylor, Lucian E.	Hyde, Mary Elizabeth	simmons College Library School	マサチューセッツ	0	外国語図書を使いやすくする義務がある。 言語ごとにリストorカタログを作成。タイトル、著者、主題で各言語毎に整理する。
169	*1927	*vol.52*	*no.3*	p237-238	"Cataloging of foreign books"	Taylor, Lucian E.	Coe, Frances R.	Massachusetts Library	マサチューセッツ	0	英語と同様の項目を設けるべき。言語毎に分ける。聖書、数学、アメリカの歴史などの決まった主題ごとに分ける。 カードには原語を書く。
170	1927	*vol.52*		p603	"Foreign language press publicity"	0	0	0	0	0	エスニック新聞に図書館の広告を掲載することは重要。 新しい本のリスト、本のレビュー、図書館で行っている展示会、講習などを掲載する。
171	1927	*vol.52*	*no.21*	p1007-1011	"How to file books in Chinese"	Chiu, Alfred Kaiming	0	Custodian of the Chinese and Japanese collection at Harvard college library	0	中国	中国語の図書をどのようにカタロギングするか、手法について説明

172	1928	*vol.53*	*no.12*	p539-541	"Some foreign books of 1927and 1928"	Cowgill, Rush				イタリア、フランス、スペイン、スウェーデン、ノルウェー	移民出身者サービス委員会が作った図書リスト。各言語のリストが掲載されている。
173	1928	*vol.53*	*no.16*	p669-670	"Work with the Foreign Born round table"	Etxkorn, Leo R.	Cowgill, Ruth	Detroit(Mich.)Public Library	ミシガン/デトロイト	イタリア、フランス、スペイン、ドイツ、スカンジナビア、スウェーデン	移民の文学の特徴の紹介。子どもに対して英語学習。語彙を増やす。アメリカと出身国両方の歴史を学ぶこと重要。他機関との連携。
173	*1928	*vol.53*	*no.16*	p669-670	"Work with the Foreign Born round table"	Etxkorn, Leo R.	Ledbetter, Eleanor E.	Public Library, Cleveland	0	0	外国語図書は通常よりお金がかかる。そのため、どのグループに対してお金を使うか見極めなければならない。少ない移民グループに対しては、州の図書館委員会がいくつかの図書館をまとめて共同出資して図書を購入し、利用する。
174	1929	*vol.54*	*no.6*	p239-243	"Buying books for a New England Library"	Brown, Great E.	0	0	ニューイングランド	フランス、イタリア、スペイン、スウェーデン、ポーランド、ボヘミア、イディッシュ、ロシア	12言語の図書を所蔵している。各言語の買い付け方法記載。フランス、イタリア、スウェーデン、スペインは比較的購入しやすい。ポーランドとボヘミアは業者に頼む、イディッシュとロシアは図書館員がたびたび買い付けに。似通った言語あるのでそれで対応できる。子どもに対して外国語の絵本の収集、英語学習の入門書の提供、アメリカに関するマナー、文化などを簡単な英語で提供。仕事に関する情報。
175	1929	*vol.54*	*no.14*	p622-623	"Work with the Foreign Born"	Quigley, Margery	0	Acting Secretary	マサチューセッツ	0	外国人出身者サービス委員会のラウンドテーブルについて。読んで価値のある本は市民権やリーダーシップ、文化に関する図書。28言語の図書、簡単な英語で書かれた図書。移民の子供に向けたストーリーアワー

175	*1929	*vol.54*	*no.14*	p622-623	"Work with the Foreign Born"	Quigley, Margery	The New Jersey Federation of Women's Clubs	Acting Secretary	ニュージャージー	0	女性クラブの取り組み。異文化相互理解のための図書リスト作成。
175	*1929	*vol.54*	*no.14*	p622-623	"Work with the Foreign Born"	Quigley, Margery	0	Acting Secretary	ニューヨーク	ロシア、ポーランド、ドイツ	ニューヨークではロシアとポーランドとドイツ語の図書が要求されている。委員会を通してではなく各館で提供している。
175	*1929	*vol.54*	*no.14*	p622-623	"Work with the Foreign Born"	Quigley, Margery	David, Orlando C.	Acting Secretary	0	0	英語が話せてもアメリカの知識が少ない人がいる。それを教えるための機関として図書館は有効
176	1929	*vol.54*	*no.19*	p843-849	"Dictionaries in English and foreign language"	Geddes, James Jr.	0	Professor of Romance languages, Boston University	0	フランス、イタリア、スペイン、ポルトガル、ドイツ、エスペラント	各言語の良い辞書の紹介。
177	1929	*vol.54*	*no.20*	p888-890	"The Contacts a Children's Librarian makes for the library"	Johnston, Esther	0	0	ニューヨーク	ギリシャ、イディッシュ	アメリカの生活を映画で移民（母国語話者、英語理解できる子どもを対象に）に見せる。翻訳者もいる。（ギリシャ、イディッシュなど）
178	1929	*vol.54*	*no.23*	p898-900	"Czech literature for children"	Suk, V. F.	0	Editor of Uhor Magazine	0	チェコスロバキア系移民	子どもに対して良書と考えられるチェコスロバキア文学の紹介
179	1929	*vol.54*	*no.24*	p948	"Book selection on foreign countries"	0	0	0	0	日本	異文化理解を推進するために、英語で書かれた各国の状況に関する図書を収集する必要がある。そのための図書リストを提供している。日本に関する図書リスト。

付録4:日米における図書館を中心とした内容に関する記事（1919年～1929年）

no	年	月日	タイトル	内容
1	1919	12月31日	在米署名刺の愛読書	日米新聞社がアメリカに在住する人々に対してどのような図書を読んでいるのかを調査
2	1919	12月31日	在住法人の社会教育	社会教育の方法について。英語習得/読書/米人の講演会などへの参加し、交流を持つこと/新聞の定期購読（日本語、英語ともに）/「清潔な娯楽機関」の設備
4	*1919	1月15日	米国に於ける東洋図書：米国の東洋語学教育奨励を望む	大学図書館に研究のために収集されているが、数が不十分である。東洋に関する研究を行っている教授と、日本人、中国人が閲覧に来るのみ。
5	*1919	1月22日	米国に於ける東洋図書：米国の東洋語学教育奨励を望む	収集していても、利用されていないのが現状である。そのため、各大学に東洋語学を享受する学科を新設し、日本語・中国語を読める人材を増やすべきである。
6	1919	2月22日	英語奨励と啓発講演：在米日本人会実行方針	英語奨励とアメリカ在住に関する啓発について。青年会移民部から出ている移民読本、アメリカ生活に関する注意などの講演、新聞からの啓蒙、小冊子の作成など
7	1919	2月28日	婦人と新聞紙	社会の出来事を迅速に報道するもの。主義主張を学べるものである。
8	1919	3月13日	今14日は日本デー：児童の展覧会	チルドレン・ウェルフェア委員会主催の児童展覧会にて、日本デーを設けた。日本特有の子どもの衣装や人形、乳母車、図書などを展示。
9	1919	3月21日	米国主義と米化運動	移民はアメリカに関する知識が乏しく、英語が理解出来ない。そのため、各団体と協力してアメリカ化運動を行うべき。
10	*1919	3月28日	婦人に適する図書の整理	東京女子大学に図書の整理に関する学科を設置するという計画がある。アメリカでは専門的に行われている。女性に適した職である。
11	1919	5月28日	英語を学ぶ方法	日本人学生は難しい読み物を読みたがる傾向がある。読んで意味がよくわかる本、雑誌などを多く読むのがよい。
12	1919	6月20日	独書の購買許可	ドイツを敵国として書籍などの書類の購入を禁止されていたが、今回解禁された。

13	1919	7月7日	読書家は青年が多い	近頃日本からの先便がなく新歓雑誌があまりない。夏場は堅苦しい刊行物はほとんど売れず、講談ものや女の世界浮世式の読み物がでる。
14	1919		米国における日本文学	東洋研究が進歩している。日本文学を、日本の生活が分かるものとしてニューヨークタイムスの新刊紹介欄でとりあげられたりしている。
15	1919		英文雑誌刊行の議	排斥を緩和するためにはアメリカ人が日本のことを知る必要がある。そのため、日本の立場を明確にした英文雑誌を刊行する必要がある。
16	*1919	8月19日	日本婦人の盛んな渡米熱	津田塾大学の生徒。アメリカに図書館制度を研究するために渡米。日本は研究不足のため。
17	1919	8月27日	日米貿易の新雑誌現はる	貿易に関する情報を配信。貿易仲介商社の紹介など症状に関する通信を掲載する。
18	1919	8月31日	文芸の意義と移民地文芸	日本の文学を好む人は移民地での文学を発展させるべき。日本からのも多くの雑誌がアメリカへくる。
19	1919	9月14日	同胞婦人へ読書を進む	精神的な疲労を緩和するために読書は有効。アメリカの常識を知るために有効。
20	1919	10月5日	米人教師から見た同胞児童の真面目	子どもに芝居風の書物を使い与え繰り返し読むことによって英語を学習させるとよい。
21	1919	10月5日	国語教育	子どもに適する雑誌、新聞小説、課外読本を読ませることで文献を理解する能力が高まる。（日本語）
22	*1919	10月15日	教育から見た娯楽の機関をいかに施設すべきか	知識趣味の向上を図るために社会教育施設を改善する必要がある。今までは娯楽という側面が強かった。そのため、文部省は図書館員講習会を行った（日本）
3	1920	1月9日	英語の学習	アメリカ化運動の一環として英語の習得を行う必要性を言及

23	1920	12月31日	移民地文芸雑感	移民地文芸の小説の紹介。日系人は自己内外の生活の質を高めるべき。読書は生活の生死み面を高めるために効果的。
24	1920	1月31日	排日協会委員長の指名を拒絶した米夫人	日本の正確な情報を提供するために日本及日本人に関する書籍を図書館に寄贈することを主張している。
25	1920	2月29日	番頭さんの社会教育観	サンフランシスコ在住の書店支配人が社会教育として新聞雑誌、図書館をあげている。日本の図書館、蔵書数が増加していると指摘している
26	1920	2月28日	図書館を有たぬ在米同胞	図書館は社会教育に欠かせないものだが、アメリカに日本の図書館らしいものはない。ユタ州サンユイサイドには日本読書会、カリフォルニア州には私立の和歌山文庫、サンフランシスコには青年会に書籍があるが、図書室程度である。
27	1920	5月9日	公立図書館の希望する日本の書籍	サンマテオ日会が図書館に日本に関する書籍を寄付するために問い合わせ、いくつかの図書を寄付することになった。
28	1920	5月20日	農業部担当に際して	日米新聞社内に農業に関する図書室を設け、各種参考書類、試験場報告、各種標本等を収集して、読者の便を計る。
29	*1920	6月6日	米国研究書	カーネギー平和財団より東京市に対し書籍二千冊を寄付
30	1920	8月5日	日米親善のため英文雑誌の発行を計画す	日米親善、日本人に対する誤解を解くために英文雑誌を発行することを計画している。主として米国知名の人、シナ在住の米人らに配布する計画。
31	*1920	8月8日	切支丹の珍書を発見	岩崎家のモリソン文庫は東洋に関する書籍収集に力を入れており、文庫に東洋研究所を附設する方針。（日本）
32	1921	1月22日	9ヶ月間にわたる米国生活の断片2、3	アメリカの図書館に関して記述。無料、丁寧に応対し、読者の便宜を高ずる。収入など関係なく手軽に新聞雑誌が読める。これらの環境が米人の社会教育の発達につながっている。
33	1921	2月7日	サター青年会	サター街の基督青年会について。図書室へは2560名が訪れたと統計されている。

34	1921	5月11日	米国出版界不振	アメリカで出版されている図書の状況について、1917年と現在の出版数を比較している。
35	1921	5月22日	日米両国人が歓を尽くした日本夜	ウェスタン美術協会主催でジャパンナイトが行われた。日本に興味のあるアメリカ人が参加。
36	1921	6月3日	桑日事務所の階下を解放し気軽な娯楽集会所	将来的に日系人の集会場に新聞雑誌を配置し、自由に閲覧出来るようにしたい。
37	1921	6月12日	時候と反対に霜枯の書物屋	不景気で本が売れない。最近売れているものに関する記述。固いものより通俗小説が売れている。
38	1921	9月10日	読書子のために	各学園や協会にわずかばかり本が於いてあるが、日本人図書館が無い。本も高いため頻繁に買えない。日本人の知識と文化を維持するために図書館は必要である。
39	1921	9月12日	本が高すぎるよ	幼年雑誌、小学読本のマージンが高いため、本が高い。日本から直接輸入するとよい。
40	1921	9月14日	本屋の代弁	投書欄に本が高くて日本の書物が読めないという非難が多く届く。本屋は値段の付け方を検討すればどうか
41	*1921	11月1日	著しく減少した図書の出版	日本の出版界では図書が減少している。読書家が減少したわけではなく、印刷代などの影響だと思われる。
42	1921	11月13日	燈火親しむ読書子が昨今の愛読書は何	11月は農閑期に入るので読書する機会が増える。図書の売れ行きについて記述。小説、雑誌（夫人向き）が多く売れている。
43	1922	1月7日	邦字新聞と在米同胞青年	英語を読める人でも、英字新聞のみではなく邦字新聞も読むべき。双方からの意見を得られる、職業上の情報収集ができるなど。
44	1922	3月20日	石本男が書物屋に早変わり	アメリカ流のメールオーダーサービスを用いて、日本より安価に要所を提供する書店開業

45	1922	3月25日	読書会の設立	自由図書館風のものを設立するために読書会を組織し、毎月一定の新聞紙及び書籍を購入し、現在の図書室を一般に自由開放する。
46	1922	4月10日	このごろの読書会はまじめだ	最近の読書界の状況について。研究書が多く読まれている。諸々の理由でドイツ図書が多く入ってくる。
47	1922	6月19日	夏の読書は軟らかいもの	最近の読書界の状況について。読みやすい文学、婦人用の雑誌がよく売れている。
48	1922	8月2日	読書会再開	自分の研究を発表する目的で行っていたのを中止していたが、再開する。
49	1922	8月6日	男子のお株を奪って婦人の間に洋書熱	最近の売れ行きについて。女学生：研究に用いる書物が多い。婦人：子ども洋服、編み物、刺繍。日本のものは高いので英語のものを買っていく。
50	1922	8月24日	読書の期間が来た	読書界の状況について。宗教・哲学系の図書が増えている。アメリカの活動写真もよく出る。
51	1922	9月8日	文学物は下火だ	一般の知識階級の婦人は恋愛に関するものがよく読まれている。家庭向きの実用的な読み物も流行している。原書で、図書館にもこれを求めてくる人が多い。
52	1922	9月17日	読書会にてマ氏の講演	サンフランシスコ読書会でマクラッチー氏の講演を行う。
53	*1922	9月18日	日本書籍輸入に課税さる	今までの課税法とこれからの状況について
54	1922	10月22日	図書館創設桑港読書会	文化の中心となって人をつくるに必要な図書館の建設を提案していた。ブキャナン街聖公会ホールの一部を解放して一般に使用する。新聞や雑誌約数千冊。
55	1922	11月1日	読書界の趣旨書	桑港読書会で創設した図書館についての趣意書を作成、各方面に配布。日米問題研究資料として8冊の寄贈有り。

56	*1922	10月30日	内務省の見た日本の出版物	日本での1年間の図書の出版物の統計。
57	*1922	11月5日	巡回図書館	フレスノ佛教会は巡回図書館を計画している。800冊の書籍提供
58	1922	11月6日	最近の読書界	最近の読書界の状況について。流行作家、翻訳書がよく売れる。古本屋では低下より6割ほどで購入できる
59	1922	11月16日	書物の注文	労働者は新聞雑誌を注文していても受け取れないことが多い。そのため読書から疎遠になり、情報に取り残されてしまう。
60	1922	11月26日	読書界の傾向は一般にまじめである	最近の売れ行きについて。文化主義の価値や運動に関する図書がよく売れる。人相、手相など運勢の図書、雑誌が婦人の間でも流行している。
61	1923	1月6日	賑やかな米国の創作界（上）	米人間で流行している図書の紹介。米人の読書熱が高まったため、図書がよく売れている。
62	1923	1月7日	賑やかな米国の創作界（下）	米人著の注目すべき図書の紹介。今年の出版量は多いが質は貧弱であるとの結論。
63	*1923	1月17日	在米日本人学生の為に華府東洋文庫設立	学生が東洋を研究する際、日本語、中国語の資料が少ないため、卒業論文のために取り寄せなければ行けない。しかし、金銭面、時間の点から困難なため、学生のために東洋文庫を設立した。
64	1923	2月11日	婦人と文芸	婦人の間に文学がはやっている。娯楽としてではなく、悩みなどを解決するために読む人が多い。
65	1923	2月20日	春先の読書界	最近の売れ行きについて。雑誌がよく売れる。図書だと宗教書が売れている。翻訳書は売れない。
66	1923	4月1日	読まねばならぬ大著述紹介	世界重要の本10冊をアメリカの雑誌でまとめたものを紹介。

67	1923	5月13日	閑散な向暑の読書界	最近の読書界の状況について。音楽・美術の図書が現れてきた。仕事に関連して電気工学書や機械に関する物が売れている。婦人や子どもの雑誌が多く発行され、運動雑誌がよく売れている。
68	1923	5月18日	英文の日本文明史	日本の文明を外国人に知ってもらうために日本に日本文明史に関する図書をアメリカへ送るよう要求。図書館大中学校、在米各日本人会へ寄贈。
69	*1923	6月8日	未曾有に多くなった印刷物の発売禁止	日本で発売禁止になる雑誌、図書の内容について。
70	1923	7月13日	同胞を危機より救へ	賭博の代わりに健全な娯楽の必要性。特に二世は知識をつけなければ行けないので、音楽、美術、文芸に触れるべき。
71	1923	7月14日	同胞を危機より救へ	仕事が忙しくて文化活動をする時間がない。
72	1923	7月22日	文壇漫語	移民小説家と日本の文芸について
73	1923	8月14日	女子青年会講習会	女子青年会では様々な講習会が行われている。英会話など。
74	1923	8月17日	判決の小冊子配布	ホワイト・ポイント事件判決文の小冊子を在日会が配布。
75	1923	8月21日	在日会小冊子配布	在日会に到着した小冊子を無題で配布
76	*1923	9月30日	雑誌が全滅した	関東大震災によって雑誌の発行ができない。
77	*1923	10月20日	歌集大学から帝大へ図書六百冊寄贈	加州大学から東京帝国大学へ600冊の外国語図書を寄贈

78	1923	10月21日	帝大図書館の再建米国に期待す	アメリカの図書館は古書は少ないが、学習参考書は豊富である。
79	*1923	10月29日	被災地の子どもにどんな玩具がよいか	被災地では知識欲を満たせない子どもが多いと考えられるため、アメリカから絵本を送る予定。
80	*1923	11月9日	帝大図書館復興のため須氏大学が大応援	スタンフォード大学から帝大図書館へ500冊の図書を寄贈
81	1923	11月10日	新聞は日常生活の教科書	新聞を子どもに読ませることは大切。教科書替わりになる。
82	1923	11月15日	子どもの書籍週	10日から17日まで児童読書週間。書店で児童書籍展覧会開催。日本人のお客は新刊洋書を読まないため全く顔を見ない。
83	1923	11月18日	文明人たるのありがたみ	読書についての一考察。アメリカ人より日本人の方が読書をする。
84	1924	12月31日	在米日本人と永住土着観念	在米の有名日系人へのアンケート。愛読書を聞いている。
85	*1924	1月4日	外国人の見たる日本	日本のように読書が普及しているのは珍しいと評価
86	1924	1月13日	子どもさんに勧めたい本	アメリカ人が経営している書店で子どもの本をセールしている。オススメ本の紹介。
87	1924	1月14日	教育館援助運動開始される	リフォームド教会に教育館を建設、図書室を設置予定。
88	1924	2月12日	桜府に新設中の州立図書館	サクラメント市に建設中の州立図書館の写真

89	1924	2月16日	日本デー	婦人団体のセンチュリー・クラブ主催で日本デー開催。美術特集。
90	1924	2月20日	日本の雑誌の高いのは販売制度が悪いため	日本人はいかなる階級でも雑誌を購読しない人はいない。婦人雑誌発行数増加。しかし高い。
91	1924	2月23日	青年修養上の読み物	青年の修練のためには伝記を読むのがよい
92	1924	3月2日	太平洋問題の講演会	アメリカ人が経営している書店で、毎月新刊書籍に関連する後援会を開催している。お知らせ。
93	1924	3月5日	華やかな手踊りに賑わった日本デー	センチュリークラブ主催の日本デーの様子について
94	1924	4月4日	新しい日本を知りたい	シカゴ市で発行されている小学読本に日本の情報を掲載したいとサンフランシスコ市の日本人商業会議所に依頼。日本文化を伝えるチャンスであると日系人会教育部へ依頼、資料収集中。
95	1924	7月8日	偉い勢いで単行本が復活してきだした	最近の売れ行きについて。日本人街の書店。婦人物、講談もの、子ども雑誌、中央公論の順番。
96	1924	7月17日	雑誌が生まれた	スターエンドサン誌創刊。英文欄あり。
97	*1924	7月26日	千人も追帰される上野の図書館子	上野、日比谷の市立図書館が盛況。
98	1924	9月11日	『春秋ろう記』いよいよ配本	日本で話題になっている『春秋ろう記』(随筆集)が着本し、配本。
99	1924	10月31日	日米問題中心の読書界	最近の読書界について。地震の影響で単行本は少ない。日米問題の書籍が多い。

100	1924	12月11日	読書界講演会	読書界講演会のおしらせ
101	1925	1月16日	賑々しい読書界	最近の読書界の流行について。読書界が震災から持ち直してきており、クリスマス、正月も相まって盛況である。
102	1925	2月8日	最近の読書界	知識欲の盛んな人と、単に生活を慰めるための娯楽物として読むという2種類に分けられる。前者：社会学、哲学。通俗ものがよく売れる。
103	1925	2月15日	社会教育の施設について	社会教育の範囲は広い。図書館もその中に入る。社会教育機関として進展してきた。
104	*1925	2月21日	同化主義の変遷	同化主義についての近年のまとめ
105	1925	5月17日	英文『大海』誌発行	英文雑誌発行について。アメリカ人社会にも販売し、日本を知ってもらうことを目的にしている。親のために訳文掲載。
106	1925	6月12日	明日リ教会の子どもディ	リフォームド教会が子どもディを主催する。
107	1925	6月21日	米人が愛読する雑誌はどんなもの	アメリカ人の雑誌の趣向について。日本に負けないくらい様々な雑誌が出ている。肩のこらない物が中心。
108	*1925	7月11日	全国の町村に小図書館を	勉学の機会向上のために全国の町村に図書館を設置することを計画している。現在は全国で3551館
109	1925	8月8日	趣味一点張り雑誌楽天現る	趣味と娯楽の雑誌である『楽天』が創刊される。
110	*1925	10月11日	伊英両語の新聞創刊	イタリア語と英語両方を用いた新聞が発行される。今まで寮後を用いた新聞はサンフランシスコ市で発行されていなかった。

111	1925	10月29日	王府佛教会新刊書を購入	オークランド市では図書室を佛教会内に新設予定。300ドルで新刊書を購入する。
112	1925	10月31日	子どもの絵本は子どもに選ばせて	幼児の頃に読み聞かせる絵本は注意が必要である。子どもは何でもまねするので害にならないような絵本を選ぶようにする。
113	1925	11月29日	青年等の文庫設置計画	サンノゼで、2世が研究向上のために文庫を設置。元々図書館などは1世がつくるのが役割である。しかし、そのような計画はされてこなかった。
114	1925	12月1日	読書の習慣を家庭に入れたい	日本では、学者の家庭さえも家で子どもが本を読む環境がつくられていない。本を読む環境を作ることが大切。
115	1925	12月17日	加州大学学生倶楽部雑誌学窓を復活	加州大学学生クラブが雑誌を発行2世の論文中心になる。
116	1925	12月17日	加州人は案外読書する	加州図書係官が発表した加州の図書館利用の統計。小説が最も読まれている。
117	1926	1月5日	発行遅れの婦人雑誌	日本で起こっている印刷所のストライキのせいで新年に婦人雑誌がこない。新年は雑誌を読んで過ごす人が多い。
118	1926	1月7日	2世のための図書室	2世は日本人としての民族的誇りを持たなければ行けない。そのため、日本の歴史文学、美術、宗教、道徳などに関する英語の図書を各地図書室に備えるべきだと考えている。
119	*1926	1月15日	書籍類の保存法	西洋風の図書を感想や湿気から守る方法について。
120	1926	2月25日	たくさんな話を聞かすと子どものため悪い	日比谷図書館長の意見。子どもにおもしろがられる話は数えるほどしか無いので沢山の話を聞かすより一つのはなしをするのがよい。
121	1926	3月21日	移民問題の新刊書	移民問題の基本書である『移民問題』が改訂、出版された。紹介。

122	*1926	6月11日	米支図書館協会交歓	アメリカ図書館協会が中国の図書館事業を視察するために協会会員を派遣した。
123	1926	6月13日	新刊の日墨教会報	メキシコの農業や日本との関係を紹介した図書を発行
124	*1926	6月13日	図書館研究に学者が渡米	米国図書館50周年記念に日本からも図書館関係者が招待される。
125	1926	6月20日	在米日本人歌集出版	太平洋沿岸の歌人が南詠会創立1周年を記念して歌集を作成中。クリスマスまでに配本予定。
126	1926	6月29日	雑誌第一線桑港で発売	労働問題、婦人問題、階級問題、農村問題に言及した雑誌を創刊した。
127	1926	7月11日	閑散期に直面した法人の読書界	最近の読書界について。読書は趣味ではなく生活に必要な要素になってきた。婦人物はよく売れる。
128	1926	8月3日	読書界の新傾向	最近の読書界について。日本の流行と同様の動きがサンフランシスコ市でも見られる。
129	*1926	9月16日	図書館会議の日本代表	アメリカ図書館50周年祝賀会のために日本から図書館代表者が派遣された。
130	1926	10月2日	少年に良書を読ませる	サンフランシスコ図書館内のアセムブリーホールで教育監督官グウエン氏主催の下に「リーディングプログラムコミュニティ」が開かれ、日本人ボーイスカウトへも代表者を送るよう招待があった。ボーイスカウトのための目録作成、書棚をつくる計画。
131	1926	10月11日	米人小学校父兄会で『日本日』を開催	アーゴンスクールの父兄会が日本日を主催。日本の風俗などを研究する予定。
132	1926	10月21日	国語字引の編纂や児童文庫の完備を協議	児童文庫の完備についての議論を行い、決議を通過した。

133	*1926	11月6日	女学校の英語は役に立たぬのか	市内各図書館において婦人の語学研究のために実生活を中心とした外国雑誌やその他書籍を備えておくが、見る婦人は皆無
134	1926	11月23日	横浜港の紹介冊子	神奈川県庁は横浜港などを外人に紹介するため英文の案内所をサンフランシスコの日本人商業会議所へ送ってきた
135	1927	2月3日	日々五千人が図書館へ	サンフランシスコ市はアメリカでも比較的知識階級の人々が多い。日々5千人、平均25万冊を利用している。哲学需要多い。
136	1927	3月2日	パンフレットで日本紹介	ニューヨークのジャパンソサイエティは日本に関するパンフレットを発行配布、サンフランシスコへも送付
137	1927	4月1日	モンテベロ青年会図書館設立協議	モンテベロ青年会では青年を中心に図書館設立の協議を行った。
138	1927	4月6日	読んで聞かせよ	語学を豊かにするためにできるだけ本を読んで聞かせることが大切。
139	1927	8月6日	参考書の選び方	洋服手芸の方面の英語の書籍雑誌を読む婦人が増加してきた。洋服手芸の参考書について紹介
140	1927	9月10日	本社の二大計画	日米新聞社は加州各邦語学園に児童文庫を寄贈した。
141	1927	9月21日	サンファーナンド青年会図書館	サンファーナンド青年会では図書館設立のため、各方面から図書を収集していた。完成したため、祝賀会開催
142	1927	9月23日	日本人町紹介の印刷物を発行	日本人会で、日本人街発展政策として日本人町紹介の印刷物を発行することを決定した。
143	*1927	10月8日	移民が読む新聞	移民が読む新聞の内容について出身国ごとに分析

144	1927	10月23日	近事雑事	1世の多数は日本の出版物を読む人のため、出版に関する情報を早く伝える工夫が必要。新聞の広告や新刊批評でもよい。
145	1927	10月27日	邦人大人に英語教育	夜間学校に通学出来ない成人に向けて英語教授のクラスを設ける。外国人講師。
146	1927	10月30日	本屋から見た同胞の読書界	最近の読書界について。娯楽的な物が多く読まれる。2世の読み物は、教科書として読まれるものを多く読む。次点『ほととぎす』『金色夜叉』など
147	1928	4月4日	米化教育の邦語	移民のためにアメリカの政治、各州の政治、移民法、憲法などの概念を教え、善良な市民になることを目標として発行されたドウターオブザアメリカンレボリューションという小冊子が日本語に訳されている。日本人会に無料で800部送付。
148	*1928	4月12日	日本から児童作品	米国赤十字社少年部主催で全米の小学児童の各種作品を集め、サンフランシスコオデトリアム階上に陳列されている。
149	1928	5月30日	圓本や全集も下火読書界の昨今	最近の読書界について。軽い読み物、趣味中心。雑誌は婦人もの。本屋はロスの方が単行本、雑誌とともに先行している。
150	1928	8月22日	9月より趣味雑誌半額	読書の期間に入ってきたため、趣味雑誌などを半額で販売。その他最近の売れ行きについて記述。
151	1928	11月5日	小冊子	一般邦人の精神修養と2世の宗教や育奨励のために『在米日本人と宗教』という小冊子を出版
152	1928	11月7日	新市民教会が図書館設立決議	サンフランシスコの日系市民教会が図書館設立に関する会議を行った。
153	1928	12月25日	図書館の設置	サンフランシスコ日本人会は東京関係の書籍を収集し、図書館を設置するための計画がある。しかし、予算が無いので寄付金募集している。日本人自身が日本を知るために学ぶことは重要。日米関係向上する。日本関係の図書は少しならアメリカ人の図書館でも得られるが、多数の図書は望めない。

154	1929	1月20日	日本から来る雑誌約四万	最近の読書界について。退屈しのぎなどの必要から、在米日系人の読書率は日本より高い。1ヶ月に日本からくる雑誌が200種類、四万冊前後である。
155	1929	2月7日	各学園に理想的小図書館の設置進む	アイルトン学園の記念事業として児童図書館の設置を計画している。アメリカ出生児童に適すると思われる333冊、児童の雑誌、新聞10数種を日本へ注文した。
156	1929	2月8日	各学園に理想的小図書館の設置進む	カーネギー図書館、市立図書館が無い地域には日本語図書の他、アメリカの著名な児童図書2,300冊加える。図書館設置理由：読書の趣味を陽性、文化の中心、図書室を中心として児童の集会を実施、自学自習
157	1929	2月9日	各学園に理想的小図書館の設置進む	日本語を習得するため、日本の文化を理解するため。これらを授業中で行うのは不可能のため、図書館を利用する。
158	1929	2月10日	各学園に理想的小図書館の設置進む	読書の趣味はどのような職業に従事してても必要な趣味。子どもに取って健全な趣味。児童の自由閲覧を目標。
159	1929	3月5日	『赤い夕陽』七百冊	『赤い夕陽』がセラーになっており、日本から700冊届く予定
160	1929	3月16日	親として必読の物	サンフランシスコ美以教会牧師は『家庭に於ける父母の態度』というパンフレットを作成、配布。2世問題に役立つ。
161	1929	3月26日	男子より婦人がかえって愛読する	『赤い夕陽』の売り上げ状況。地方からも申し込みがある。
162	1929	5月30日	総領事館内に図書館を新設	日米問題研究のために、総領事館では、日本及び日本人の研究資料となる数百冊の書籍などを一カ所にまとめ図書室を設置した。
163	1929	6月7日	図書館設置は当分握潰に一致	図書館及び社交室設置は必要なことだが、経費がかかるし、他に必要な施設／事業があるため延期する。
164	1929	6月19日	総領事館図書室に集する新聞雑誌	総領事館図書室に新聞雑誌の保管所を設置。総領事館に送付された各種新聞と雑誌を配架。何事かを知りたい人は総領事館に訪れ、借用してみることができる。

付録5:新世界新聞における図書館などに関する記事（1906年-1929年）

no	年	月日	タイトル	内容
1	1906	5月26日	書籍館の損害	サンフランシスコ市立図書館に関しての損害状況についても記述あり
2	1906	9月9日	読書力と人物	書籍、新聞に書かれていることが真実なのか判定する読書力をつけるべし。
3	1906	12月22日	米国新帰化法出版	翻訳書、シアトル古屋商店において発行
4	1907	2月15日	英語学校	フィルモア街のガッフェリースは自宅にて日本人に英語を教えている。
5	1907	3月16日	英語学校の開始	佛教会の英語学校は仕事後にはまにあわないので、聖公会ないに英語夜間学校を設置する予定。ジェフェリース他2,3人の外国人と日本人によって教授。
6	1907	7月31日	英学校の開講	佛教会付属英学校のお知らせ。昼夜２部行われる。美以教会は昼夜３部で行う。
7	*1907	8月12日	書籍店合同の協議	サンフランシスコ市内に日本書籍店8軒あり。
8	1907	8月21日	英和学校の学級新設	美以英和学校初学者のために今回新たに学級を設けて教授
9	1907	8月28日	佛教会公開図書部	佛教会は公開図書館設置を決議。寄付金、雑誌寄付を募集する。
10	1907	8月29日	『米亞』雑誌の配布	職合協議会にて米亜雑誌（日米貿易に関する記事掲載）を米国議院や図書館へ配布
11	1907	12月12日	寄贈冊子	『米国新帰化法』の紹介
12	1908	3月7日	文学の新傾向	アメリカの文学傾向についてのまとめ
13	1908	3月15日	英語を習へ	排日感情払拭の一手段として白人に接近しなければならない。そのためには英語を話せるようにならなければいけない。

14	1908	5月3日	商業雑誌の合同	オークランドとサンフランシスコで発行されている雑誌会社を合併し、商業機関雑誌を作成する。
15	1908	7月21日	大成丸へ新聞雑誌寄贈	大成丸の乗組員が日本文字の読み物を欲する旨を聞き、日本文字の読み物を提供。
16	1908	7月25日	大成丸へ寄贈	雑誌、移民問題、学童問題、桑港商業会議所年俸を大成丸図書室へ寄贈
17	1908	8月29日	白人の東洋雑誌	リーブスは日米貿易に関する英和両文の月刊雑誌を発行するため作成中
18	1908	9月17日	オリエンタル雑誌	ソートンが対日感情の誤解を解消するために雑誌を発行予定。
19	1908	10月24日	小説界の近況	アメリカ小説界の近況についてのまとめ
20	1908	11月25日	寄贈冊子	『英文米国民権論』の紹介
21	1908	12月23日	オリエンタル雑誌の第八点	オリエンタル雑誌と言う賛日英字雑誌の主筆であるソーントンは日本人街を視察し、医業と題して日本人医師の必要性を雑誌で訴えた。
22	1909	1月8日	桑港英語学校開校	町田はポスト街の鹿児島屋のフロントホームをかり、英語学校を開く。毎日開講1ドル50セント。
23	1909	1月10日	雑誌東洋の正月号	白人が発行している雑誌。排日案に対する反駁論が掲載。
24	1909	1月19日	婦人雑誌と迎妻準備	写真花嫁を迎えるために婦人雑誌で勉強する日系人がいる。
25	1909	1月23日	読む可きの新書	アメリカ社会を知るための良書が発行された。
26	1909	2月19日	図書館設立の計画	五車堂（書店）が企画人となり、小規模の図書館を設立する計画。日本人会の庇護のもとに設立予定。

27	1909	3月20日	図書館設立に就いて	在米日系人の知識向上は重要な点である。そのため、図書館設立はすばらしく、知識を与える、娯楽を与えるために重要な施設である。
28	1909	5月6日	加州物産陳列場参観	加州産物陳列場には図書室が設けられており、実業及び商業方面に関する欧米各地の書籍、欧米各国の新聞が並べられている。
29	1909	6月18日	日本人会の備附図書	在米日本人会はできるだけ内外の有益な図書を収集している。同会執務場の参考にするとともに一般の在米日系人に利用してもらうことが目的。現在までに集まっている図書に就いて具体的にあげられている。アメリカの情報、移民情報に関する図書多い。
30	1909	7月22日	英仏語の教授	英仏語を日本人に教授する語学学校開講。3ヶ月10ドル。
31	1909	8月23日	日本人会の会報発行	在米日本人会は会報を発行。排日案に関する勧告や移民に関する内容の小冊子。会員、商業会議所などに配布。
32	1909	9月9日	『北米の日本人』発行	農業、商業、工業そのた雑業等などの事業に関する情報について記した『北米の日本人』発行。
33	1910	6月16日	読詩力の欠如	白人家庭は必ず2、3の詩集がある。日系人は詩に触れていないため、知識がない。
34	1910	8月21日	児童教育の方針	講演、読書から同化を促すのも重要だが、実際の経験も重要である。児童は米国の教育方針に乗っ取って教育されるべきである。
35	1910	8月21日	桑港案内出版準備	サンフランシスコ市は排日感情が強いと言われているため、サンフランシスコ市を避けて日系人が移住してくる。しかし、現在市民の間に悪感情などはない。現在のサンフランシスコ市を紹介する書籍を出版する。
36	*1910	11月21日	基督教青年会館開館	基督教青年会館開館の報告。全ての人が活用出来るようにという方針。体操場、教室、理髪店、消費店、倶楽部室、寄宿所あり。
37	1910	12月9日	議院図書館	議院図書館の利用状況。世界3位（蔵書？）。9万3千部以上の蔵書。

38	1911	2月5日	文明堂の英文雑誌取次	ニューヨークで日系人間にも人気の英文雑誌『ザ・オリエンタル・エコノミック・レビュー』はサンフランシスコ市でも販売されることが決定した。
39	1911	2月16日	領事館の新参考書	領事館の新参考書の紹介。移民に関する報告書が多い。誰でも閲覧可能。
40	1911	8月2日	在米同胞の読書	在米の日系人は学術、人心道心を向上するために読書をすべき。しかし、在米では良書を選択する情報が少ないため注意が必要。
41	1912	12月31日	同化と文学	日本人同化の問題は文学を通して解決する。同化を諭す図書は少ないが、文学から趣味思考を学ぶことができる。
42	1912	3月13日	読書と静思	静心と読書は多忙な人に最も必要である。娯楽、教訓、指導などの側面がある。同胞社会を健全にする要素の一つである。
43	1912	5月9日	本を読む道楽	読書は趣味の中で最も高尚なものである。読書をすることによって古今東西の視点を得る。
44	1912	5月10日	本を読む道楽	研究のための図書をそろえることが重要。書籍はよい物を選択しなければならない。書籍は師友のようなものである。
45	1912	5月11日	本を読む道楽	活版事業が発達したため新刊書の出版が非常に多くなった。世俗の評価によって図書の善し悪しを決定してはならない。読書は全年齢層に楽しめる。和漢のみではなく、英、佛などの文学もたしなむべき。つまり語学が必要。
46	1912	5月24日	要求する本	日本では毎月多くの図書が出版され、新聞にも新刊紹介欄があるが、何が出版されたかのみにとどまっている。アメリカだと専門家が批評して紹介しているので、日本でも取り入れるべき。
47	1912	5月31日	要求する本	学生は雑誌を好む傾向にあるため、秩序だった知識が得られていない。専門家が秩序のある図書選択を行い、提供することが重要。
48	1912	10月14日	ストージ図書館開館式	日本人長老教育総理哲学博士医学博士ストージ氏は日系人の共用指導に熱心に取り組んでいた。有益な蔵書を長老教会に寄付し青年館内に図書館を開設することとなった。一般希望者の観覧に供しつつある。

49	1912	10月29日	ストージ図書館	ヘート青年会内のストージ図書館は開館式を行う。
50	1912	11月2日	ス図書館開館式順序	開館式の式内容。英書1245冊、和漢書799冊、日本雑誌38種、英文雑誌25種、新聞10種、保管150冊。
51	1912	11月3日	図書館開館式	ストージ図書館開館式が盛況に終わった。
52	1912	11月11日	西洋人と読書	日本人は忙しさを理由に読書をしない。西洋人はちょっとした時間を利用して読書をする。巡回文庫（年いくらか料金をはらうもの）を使って多くの図書を読む。
53	1912	11月16日	読書の経験	ただ図書をざっくばらんに読むのではなく、目的を持って読まないと読んでいないのと同じことになる。
54	1912	12月7日	婦人の読書	雑誌は良書もあるが悪書もある。子どもの好きに読ませるのではなく、親や先生に許可を得てから読むべき。
55	1912	12月14日	新日本を配布	大隈氏が主催する『新日本』という雑誌を在米日系人問題に関する機関誌として発行され、日本人会に寄贈された。日本人会は各地の日本人に送付した。
56	1912	12月14日	英語の学び方（週間新世界）	英語を学ぶ際には、好きな本を多く読むとよい。趣味に関する物など何でも読みたい物を読めば分かるようになる。
57	1912	12月14日	通俗の良書	アメリカは図書館が充実しているが、日本は図書館が貧弱、書籍も少ない。俗本ではなく、内容の充実した物を廉価で発行することが大切。
58	1913	1月31日	いわゆる低級趣味とは	文芸をたしなまない人に対して低級趣味というのは間違っている
59	*1914	4月1日	書籍郵送料改正	書籍は第三種郵便物として扱っていたが、小包郵便として扱われる。
60	1914	10月14日	図書館拡張演奏会	パイン街青年会館にて演奏会が行われる

61	1914	11月14日	図書館費募集演芸会	佛教青年会図書館費募集演芸会のプログラム。入場料10セント。
62	1915	5月15日	図書館費募集演芸会	佛教青年会図書館費募集演芸会のプログラム。入場料11セント。子ども無料。
63	1915	5月16日	図書館に寄贈	佛教青年会図書館に図書の寄贈有り。
64	1915	6月5日	参考書送付	加州大学内太平洋沿岸歴史教会より在米日本人会宛に日本人に関する参考書類を送付するよう依頼があった。寄贈予定。
65	1915	6月6日	ストージ図書館に	ストージ図書館に寄付された図書と人名一覧
66	1915	6月9日	在日会に参考書続々	在米日系人の啓発運動に要すべき様々な種類の参考書を収集している。内容一部紹介している。
67	1915	6月13日	参考書送付	学務局に日本から参考書が到着したため、大学図書館に寄付するために発送した。
68	1915	6月20日	米国でも思想問題の本が一番売れる	日本では思想書が売れているが、アメリカでもどうようにタゴールが注目されている。婦人世界、実業の日本、軽い講談物がよく売れている。読書力は近代著しく進歩している。
69	1915	6月24日	日本の参考書を欲す	イリノイ大学にて『日本の佛寺とその財宝』という活動写真フィルム及び参考書についての問い合わせが大博教育館にきた。
70	1915	7月4日	ポテート耕作参考書	加州中央農会にて加州のポテト耕作業に関する冊子を発行し、アメリカに於けるポテト算出と需要などを生産費の節約など詳細に説明した。
71	1915	10月16日	図書館拡張演劇	パイン街佛教会にて図書館拡張演劇が行われる。
72	*1915	12月4日	盲人図書館	小石川雑司ヶ谷の東京盲学校は盲人図書館を設立する予定。現在の図書室は10坪、400冊ほどの図書（教科書含む）が所蔵されている。

73	1916	2月19日	図書館拡張演芸会	パイン街佛教会にて図書館拡張演芸会が行われ、プログラムを紹介。
74	1916	2月19日	婦人の読書は家政を妨害せず	婦人が読書を行うと、家政から遠ざかると言われているが、アメリカの婦人はバランスよく行っている。家事などをだらだらするのではなく、その時間を読書に与えるとよい。
75	1916	2月26日	今後の婦人に男の読み物が必要	女の読み物として描かれた図書を読むのは自分を低能化する行為である。できるだけ男の読み物を読み、男性並みの知識をつけるべき。娯楽としてではなく、科学的、社会的知識を供給する図書を読むべき。
76	1916	3月7日	雑誌の値上げはどう影響する	雑誌の値上がりを受けて、定価が上がったらその通りに販売する。日本で売れている物は婦人物、少年少女物、修養物、娯楽雑誌など。アメリカでは講談物、実業物など軽いものが売れている。
77	*1916	3月16日	雑誌値上げは今月１冊	日本で雑誌の値上がりがあったが、アメリカでその影響を受けたのはわずか1冊のみだった。
78	1916	3月16日	図書館拡張演芸会	佛教青年会では図書館拡張の寄付演芸会が行われる。
79	1916	7月3日	図書館拡張演芸会	佛教青年会館にて図書館拡張演芸会が行われる。プログラム紹介。
80	1916	8月6日	どんな本が読まれる	最近の図書の売れ行きについて。婦人物が多く売れ、男性も買う。実業系の図書、講談物などもよく売れている。軟らかい物の売れ行きがよい。
81	1916	9月11日	基督教会紛糾の内容について	日本基督教会移転後には、ストージ図書館及び小児図書館を設ける計画である。
82	1916	9月16日	図書館寄付浪花節	佛教青年会館にて浪花節を披露。
83	1916	11月6日	移民書籍寄贈	ワシントンの議会図書館から在日会へ移民に関する書籍を寄贈された。

84	1916	12月26日	新移民書寄贈	人種、宗教方面からアメリカに於ける移民問題を研究している人の著書が在日会へ寄贈された。
85	1917	1月28日	新図書館二月半ば改装	シビックセンター内に設けられた新図書館は2月15日に開館一般の読者の閲覧を開始する。現在のヘース・フランクリン図書館の書籍を全て移転する。蔵書は98,769冊。
86	1917	2月21日	子供図書館開館式	ポスト街とオクチビヤ街の過度にある日本基督協会にて子どもの図書館を新設した。
87	1917	2月23日	図書館開館式順序	子供図書館の開館式プログラム紹介。
88	1917	6月6日	東洋汽船の新雑誌	日本行き航海案内及び一般外国人に日本及び東洋紹介を目的として、東洋汽船会社は『ジャパン』という雑誌を発行した。
89	1918	1月3日	児童文学の教育的価値	児童文学は子供の教育に対して4つの影響を与える。1）美的感覚を高める2）子供の趣味を広める3）知力を高める4）想像力を高める
90	1918	1月4日	児童文学の教育的価値	どんな趣味でもまずどのような趣味があるか読書を通して知ることができる。童話から道徳を学ぶ。
91	1918	1月5日	児童文学の教育的価値	想像力は児童の間に発達する。読書は児童にとって様々な効果があるが、図書の選択を間違えないようにすることが重要。
92	1918	2月24日	新著書日本より	ニューヨークヘンリー・ボルト社から『日本より』という本が発売された。アメリカ人が日本に数ヶ月滞在した時のことを書いている。日本への好意を持って書かれた図書。
93	1918	4月29日	小冊子無代進呈	米国労働及び共和主義同盟会は日本人職業会議所に小冊子10部を送付、希望者には無代にて配布する。
94	1918	5月20日	記念の金	ストージ博士が資金援助をし、家を借り受けストージ図書館を移転し、一般日本人のように供する予定である。

95	1918	6月4日	科学工芸の本が売れだした	最近の図書の売れ行きについて。日本人は比較的読書をする。田舎の方が図書が売れる。婦人子供の図書が増加。工業科学、電気工業の雑誌が増加、文学物の売れ行きが悪くなった。
96	1918	6月23日	日本紹介新書	日本人博士とアメリカ人博士が協力して歴史及び文明発達を記述した『日本の発展』が発行される。
97	1919	2月24日	青年の新傾向	最近の図書の売れ行きについて。自動車に関する書籍がよく売れる。青年が修養に関する図書を求める（新傾向）。雑誌は婦人物、男性には実業物が売れる。
98	1919	3月13日	英語教育	父兄向けの英語教育。ワシントンアービング団体。
99	1919	4月3日	英語教育開始	カトリック教会で英語教育。1時間半の講習、週五回、月謝2ドル
100	1919	5月21日	女子青年会英語教授	女子青年会に英語科を設け講習を行う。アメリカ人講師を採用。
101	*1919	5月27日	読書の傾向が一変した	日比谷図書館の利用状況。試験準備の学生が多く利用。社会問題、労働問題、デモクラシーに関する図書が多く読まれる。
102	1919	6月17日	英語教授	ストージ宅の裁縫教授所にて英語教授。白人教師を採用。
103	1919	6月24日	児童読本送付	在米日会にて児童教育委員の編纂による児童読本を書く日本人英語学校に参考用として送付
104	1919	10月8日	白人家庭労働者は主人に書籍を贈れ	排日問題の解決に向けた実行可能な働きは、白人家庭につとめている日系人が日本及日本人について紹介することである。直接会話ができなかったら日本について書かれている図書を贈るとよい。
105	1919	10月8日	桑港図書館で邦字紙	サンフランシスコ市立図書館は領事館に、日本語新聞の寄贈を求めた。領事館は、日本について知ってもらう機会をつくれるとして新聞社に依頼。

106	*1920	1月5日	法政の校舎を理想的図書館に	法政大学の改築に合わせて、図書館も法律に関する貴重書を無料公開し、研究者に便宜を図る予定。利用者が求める図書ごとに閲覧室を分ける予定。
107	1920	1月？	加州大学の英語課外授業	加州大学の英語授業が青年会館で行われる。白人教師。15回／5ドル
108	1920	1月31日	白人に日本の近状を知らしむるため各地の図書館に日本の書籍を寄贈しては如何	排日運動に対する方法として、白人図書館内に最近の日本事情を記載する出版物を寄贈する案がある。
109	1920	2月5日	万人最高の完成	多読はしなくてもいいが、ある程度読書すべき。家庭を持つ人は月給の30分の1、独身は1ヶ月に1日の働き高の半額の割合を図書費にあてることが理想。
110	1920	2月18日	ニューヨーク図書館より申し込み	NYPLから在日会へ日米問題に関する刊行物の寄贈申し込みがあった。
111	1920	3月12日	基督青年会英語教授	日本人講師のもと英語教授。一回2時間。
112	1920	3月29日	シカゴ図書館より依頼	シカゴ市立図書館から在日会へフロリンに於ける日本人というタイトルの小冊子の寄贈申し込みがあった。
113	1920	4月30日	白人図書館より	プロミデンス公立図書館の依頼により日本人移民時候に関する各種の刊行物を寄贈、丁重な礼状が送付されてきた。サンマテオ日本人会、ビスカデロ日会支部にも移民事情刊行物寄贈を依頼
114	1920	6月19日	旅行と読書	読書は「精神を運ぶ旅行」である。偏見から新しい世界を見ることができる。そのためには選書と、どのように読むかが重要である。自分の偏見にとらわれず観察、考察することが重要である。
115	*1920	6月30日	一般民衆に公開の図書館不足の現日本	日本には図書館がすくない。増設したい希望があるが、市立の方が資本家と共同して資金を出せる。労働者階級を教育するためにも各地に民衆に公開の図書館を設置したい。
116	1920	7月7日	華府図書館から邦人統計注文	華府のコングレス図書館より在米日会へ日本人人口統計の寄贈申し込みあり。

117	1920	8月13日	書籍寄贈申し込み	カーネギー国際平和会館図書部より在日会に日本移民及び加州日本人統計、日本人問題に関する公刊物寄贈申し込みあり。
118	*1920	11月4日	点字の図書館	盲人のために神戸盲唖教育会が点字図書館を準備予定。一般趣味の展示新刊書、マッサージなどの専門的図書などを収集する予定。日本において最初の試み
119	1920	11月13日	佛教青年会図書館拡張寄付演芸	パイン街佛教会にて図書館拡張演芸会が行われ、プログラムを紹介。
120	1920	11月23日	家庭と文化	大人になるほど忘れやすくなるので、幼少期に読書癖をつけることは重要。在米日系人は多忙で児童に読書を勧める環境が無いが、心を豊かにするために読書環境を作るべき。
121	1921	12月31日	生徒作文:私の好きな本	2世児童の好きな本。娯楽と考えものが掲載されている雑誌
122	*1921	1月22日	時事短評	日本では、思想の自由、言論の自由などの影響からいかがわしい図書が多く発行されている。そのため市民に悪影響を及ぼしている。
123	*1921	4月9日	墨国と南米同胞に巡回図書館を設立	メキシコ、南米に巡回図書館をつくるという計画が進行中。メキシコ南米に移住している6万の日系人は日本に思想文化に接する機会がきわめて少ないため。第一期の計画は5千冊送付する予定。
124	*1921	5月5日	米国図書千八百寄贈	カーネギー平和財団は1800冊を日比谷図書館に寄贈。日本学生に一般米国文明及び米国人生活を紹介する目的。
125	*1921	5月18日	南北米図書館が静洋丸で	南米図書館計画で収集していた図書が一万冊二上ったため南米へ送付。南米の全同胞32箇所にわけ、巡回させる。
126	1921	6月6日	商業英語の講習会	加州大学が商業で用いる英語の講習会を行う。
127	*1921	8月8日	在米同胞寄付の記念文庫設置	帝国飛行協会は、飛行機建造の目的で寄付金を募集し、それを記念して記念文庫を設立することとなった。

128	1921	9月25日	宗教味の書籍売れる	最近の図書の売れ行きについて。思想問題、労働問題に関した出版物が売れている。知識階級、学生は宗教系の図書が人気である。読書界がまじめになっている。講談、落語を集めた雑誌が一番売れている。教育上優れている物が多く、子供に買い与えるから。
129	1922	2月2日	日本婦人の読書趣味	日本婦人には詩集物が一番好評、在米婦人は雑誌類が主な物。
130	1922	10月12日	文化事業	日系人が教育の重大さを知っていれば現在至る所に図書館が設置されている。
131	1922	11月19日	読書会移転計画	読書会が聖公会の一部だと誤解を受け、図書館建設のための寄付にも影響を与えているため、移転する計画がある。
132	1922	11月27日	特志な某氏読書会へ寄付	読書会に対し同胞文化生活のための活用費用として189ドルの寄付を受けた。
133	1922	12月4日	新しい趣向の雑誌図書館	パイン街で、日本の雑誌を全部取り寄せ希望の人に5日間に1冊づつ、1ヶ月に6冊づつを持ち回って交替で各戸で読ませるようにする。雑誌の種類は政治文学宗教娯楽なんでもあり、買って読む必要をなくさせる考えである。
134	1922	12月26日	桑港読書会員文化講習会	在米日本人の文化生活のために組織された読書会が、文化講演会を催すことになった。プログラム紹介
135	1923	12月31日	私の趣味	19人中7人が読書を趣味にあげている。その他活動写真、運動、音楽など。
136	1923	1月14日	太平沿岸で桑港が第一の読書子の多数なところ	ニューヨークの出版社社長がサンフランシスコが最も有力な顧客だと述べている。つまり、サンフランシスコは読書人口が高いといえる。
137	*1923	4月12日	藤山工業図書館	商工業に関する民衆の常識を向上する、新業界に貢献するため東京に藤山工業図書館を創設することとなった。参考書籍をアメリカより収集する。日本人商業会議所にも依頼があったので、同種書籍をできるだけ多く取り揃えて寄贈する予定。

138	1923	6月5日	趣味の問題	家庭の読み物は多少改良され、アメリカの平易な雑誌も読み始められている。しかし、日本の婦人雑誌がまだ多く読まれているため、アメリカの婦人雑誌を読んでアメリカの知識や趣味を取り入れるべき。
139	1923	10月11日	各大学の図書館	サンフランシスコの図書館を少しのぞいてみても良書を選択するのは難しい。
140	1923	11月11日	子供のための図書週	子供図書週間であるため、親達は子供用の書籍を購入して知識増進を図る。選択の方法、指標を記述している。
141	1923	11月18日	商業会議所で著書配本	白人商業会議所はクリスマスの配本として『桑港』と題する書籍を発行。支那人町、日本人町、外国人の状態を詳しく記している。
142	1924	2月26日	児童に与える読み物明るい物がよい	児童に与える読み物に対して研究者の視点から紹介。おとぎ話の中でも明るい読み物がよい。敬愛の念を起こさせるような物。
143	1924	2月27日	児童に与える読み物明るい物がよい	講談や探偵小説等のおおい少年少女雑誌を読ませることは控えた方がよい。この種の麻酔的読み物が不良少年をつくると考えられる。
144	1924	3月29日	新しい叫び	文学を通して人生などに対して新しい理解を生みたい。/アメリカにいるのに日本本、日本食で通し、日本人のみとつきあうのはおかしい。
145	1924	4月4日	米国児童用図書日本紹介	児童のための図書を発行し、世界格好の風俗習慣地理等を掲載している。10年前に出版された物のため、出版会社から日本の風俗習慣地理などの現状を通知してほしいという依頼があり、在日会が請け負っている。
146	1924	5月19日	桑港日本人村の図書館という格	日本町の書籍店は図書館のような品揃えである。多くの日系人が利用している。読書会を10年前と比較すると、知識階級の増加があげられる。以前は暇つぶしのための読書だったのが、自ら研究する人が増えている。
147	1924	11月11日	羅府人士の読書欲	ロサンゼルス図書館の貸出冊数が過去1年n50万冊の増加をした。昨年の合計は約432万である。需要が最も多かったのは哲学・宗教、次いでビジネス、3位が小説・娯楽ものである。

148	1924	12月14日	支那町の日本書店	新刊書が多く置かれ、日記類各種雑誌も年末を見込んで仕入れられている。田舎からの注文も多い。
149	1925	8月31日	大祭日と日本人町	サンフランシスコで一番古い日系人の書籍店である青木大成堂が販売しているものについて。日本で発行している雑誌はほぼそろっている。図書以外にもレコード、ハーモニカ、琴などの楽器類も取り扱っている。
150	1925	10月16日	児童に関する大著述	米国児童協会の理事長が児童研究の集大成を一冊の本にまとめた。原価5ドルだが、普及を目的とし、児童協会会員に限り1ドルで販売している。
151	1925	10月30日	子供の絵本は子供に選ばせよ	現在発行されている絵本に害のあるものは少ない。子供の年齢に合わせて絵本を選ばなければならない。大人の基準でよいものが必ずしも子供が好きとはいえないので、子供たちに選ばせるのが一番良い。
152	1925	11月8日	布哇同朋間の社会問題	男性労働者に教育がないのであれば、世間話や噂話をするのではなく、新聞や図書を読むべき。
153	1925	11月20日	日本と米国を跨いだ雑誌	日米両国をまたいだ『活躍』という雑誌を発行。時事問題からスポーツまで扱う
154	1925	11月30日	南加日本人商業会議所月報	南加日本人商業会議所は月報を発行した。代表的な図書リスト。
155	1926	1月18日	完備に近い加州図書館	5千万の住民が公立図書館のない地域に住んでいるが、カリフォルニア州は図書館が充実しており、4百万の人口がいるが、図書館がない地域に住んでいるのは1万2千のみ。
156	*1926	3月14日	青木大成堂雑誌売り切れ	雑誌が到着しないので、到着次第報告する。
157	1926	3月21日	日本詩歌の好英訳書	日本の代表的な短歌や俳句を英訳した図書が発行された。日本の文化をアメリカに紹介するチャンス。日系人2世に対しても日本文化を知ってもらう機会。

158	1926	4月5日	米国の外字新聞と沿岸邦字紙の将来	日本語新聞に関する見解。毎年約千人が日本語新聞を読むが、2世は英語を利用するため日本語離れが起きる。
159	1926	5月16日	雑誌大海一周年記念号	雑誌『大海』が刊行されて1周年記念のため、記念誌が発行された。その内容の紹介。
160	*1926	6月22日	来る10月費府で図書館の記念大祭	米国図書館の基礎が確立、図書館令が発布されてから50周年であるため、記念祭を催す。日本も招待されており、3名の日本人が渡米予定である。図書館の視察も兼ねている。
161	*1926	7月7日	費府図書館記念祭	渡米する3名の日本人が決定した。
162	*1926	9月17日	米国図書館協会の創立50年記念会	50年記念会で渡米した日本人が話す予定の内容について。図書館における一般人の読書趣味は向上している。設立当初は乱読していたが、現在は専門的なものを通読するようになってきた。
163	1926	9月26日	基青へ寄付	ホームクリニングの中村はインターナショナル・アンサイクロペディアを基督教青年会図書部へ寄付
164	1926	10月18日	同胞婦人のための特別英語教室	イマーソンスクールにおける日本人婦人のための特別英語教室。
165	1926	10月21日	三日目の学園協議会	北加学園教会の協議会で児童文庫設置についての議論を行った
166	*1926	10月24日	盛大な米国図書館五十年記念祝賀会	米国図書館50年記念祝賀会の様子について。日本も招待され、祝辞を述べた。
167	1926	11月6日	授業料なしで英語教授	サター街青年会英語学校で教師をしていたニューマン夫人が、米化運動の一環として無料で日本人へ英語の授業を行う。市教育局の事業
168	1926	11月9日	英文雑誌大海は	日米国交、在日青年男女の指導を行う目的で英文雑誌『大海』を発行する。展覧会を開き資金を集める。

169	1927	1月24日	北加学園教会が児童文庫を設置す	北加学園教会は学園教師の参考になる書籍や教育雑誌、書籍が少なかったため、各方面より参考書を集め、児童文庫を設置することを決定。費用600ドルは会長が支援する。
170	1927	4月1日	坂部式裁縫ぎょうしょ	サンフランシスコ市ウェブスター街坂部裁縫女子校、裁縫に関する約600ページの書籍を発行する予定
171	1927	6月1日	同法の読書界に北米評論が台頭す	オークランドの池田氏によって発行された『訪米評論』について。日系人の教育に関して言及している記事あり。
172	1927	8月30日	美以英語学校新学期開始	美以教会内の英語学校授業開始。ラージャーが初歩および高校程度の英語を教授。
173	1927	8月30日	英語活法の第三版発売	吉野正三郎氏の英語活法は最も適当な会話書として好評である。
174	1927	9月12日	大沢氏寄付の児童文庫	北加学園協会長が協会の40校へ寄付することを目的として、日本から取り寄せた児童文庫558冊がサンフランシスコへ荷揚げ、送付される。
175	1927	9月23日	日本は世界で第二の読書国	日本の出版書籍はドイツに次いで二位。そのため、日本は世界で二番目の読書国だといえる。
176	1927	10月12日	大沢氏寄贈の児童文庫	558冊の目録を作成し、各学園へ配布予定。
177	1927	11月3日	実業界の案内冊子	サンフランシスコ日本人実業会が地方顧客に配布する『桑港日本人町案内』作成。商店案内図、移民事項の注意、遊覧案内など。
178	1927	11月18日	米国基督学生雑誌を発行	活動の一部として既刊雑誌を改善。英文雑誌『ニュー・ジャパン』を発行。
179	1927	12月9日	最近米国における進歩発達の諸現象	図書館はアメリカの至る所にある。娯楽の設備は十分。アメリカ家庭の愉快度が高い。
180	1927	12月10日	お人形歓迎の英文書籍	アメリカから日本へ人形を送ってもらったお礼に『人形歓迎』という書籍を発行。英文で日本を紹介する内容であり、アメリカ内で配布される。

181	1928	1月5日	子供等の読む本	日本の子供とアメリカの子供の相違；図書館から本を借りて読むかどうか。アメリカは図書館に行くことを学校で奨励している。図書館は子供の教育にとって重要。
182	1928	3月2日	母達のために英語講習会	日系人に親しまれているグルトン女史は日本人母親に英語を教授する。ラフェール・ウェイル校において。
183	1928	3月17日	下町の小学校で日本紹介の催し	下町の日本人学童多数進学しているジェーンバーカー小学校で日本紹介の催しあり。
184	1928	3月17日	大毎日英文出版の日本紹介書	大阪毎日新聞発行のジャパントゥデーエンドトゥモローはアメリカ内の各地商業会議所、学校、図書館に寄贈され、賞賛された。
185	1928	3月23日	海員慰安の図書館興行	海員図書を寄贈するため、市内の銀行や図書館内で図書寄贈のあっせんを行う。
186	1928	4月11日	教育的な講演	教育的な図書を巡回文庫として親子の了解を図る資料とするべき
187	1928	4月22日	外人に読ませる合衆国便覧	移民や外国人に読ませるためにドーターオブザアメリカンレボリューションが発行した『合衆国便覧』日本語の部がサンフランシスコ日本人会にて各地方へ発送。
188	1928	4月29日	市公会堂で東洋の夜	ナイト・オブ・コロンブス主催で東洋の夜というイベントが行われた。日本は天主教会が中心となり、多数の婦人、少女参加
189	1928	5月20日	読書の指導は小さい中から	児童への読書指導の方法。選択せず手当たり次第に読ませるのは悪い。情操方面、知識方面をのばす図書を与える。
190	*1928	6月27日	思想の混乱と近頃の読書界傾向	一般の読書傾向についての考察。出版物の大衆化により、一般知識の実用時代を現出。社会思想に関する図書がよく読まれる。
191	1928	7月3日	書籍館	2世の作文。学校に図書館があり、よく利用する。学外にも図書館があるので学校に行かない人も本が読める
192	1928	7月17日	キャンプの図書部	2世の作文。自分の地域の図書館について。日本児童文庫1組あり。

193	1928	8月9日	養老院の設置や児童遊技場を	桑港日本人会は児童遊技場、図書館など設置の件は調査研究委員を設置する。
194	1928	11月7日	桑港の日本人町に図書館を置く運動	桑港市民協会の会議。日本人町に青年の適当な遊び場および教育の目的で図書館の設置を運動することが決定。
195	1928	11月17日	ラ校母の会から校旗や図書を寄付	ラフェイル・ウエイル・スタールの母の会は学校へ図書を寄付した。
196	1928	12月2日	平和の答弁使お人形	日本からアメリカへ贈られた人形の一つがデンバーの図書館に置かれた。
197	1928	12月18日	お金がなくては図書は買へませぬ	サンフランシスコには市設の図書館があるが、日系人のための東洋の書籍を蔵する図書館を持つべき。しかし、お金がかかるため現在は見送り。
198	1928	12月19日	図書館設置の秘訣	2世の教育を考えるなら図書館を設置すべき。まず委員会の設置、次いでホールに倉庫を購入し、寄付の図書を集める。
199	1928	12月25日	店頭を飾る書籍に早くも新年気分	現在流行している雑誌の新年号について。
200	*1929	1月5日	日本支那の書籍三万巻	ボストン博物館には三万巻の日本及び中国の書籍が蔵されているが、美術に関する本、仏典が中心。
201	1929	1月20日	エ、ラ良好で英語教授	ラファエルウイール及びエマーソン学校では邦人婦人のために無料で英語を教授する
202	1929	4月4日	図書館公開	アイルトン日本語学園内にある図書室、約300冊の書籍完備。児童の図書中心だが、一般にも公開し、自由に閲覧出来る。
203	1929	4月6日	学童を持つ親達へきかせたい話	子供の教育のための親への注意。子供に対してできるだけ図書館利用を奨励せよ。
204	1929	6月1日	日本紹介の講演会を	日本人基督教会で日米人親睦を目的とした「日本の夜」を開催予定。講演、日本の映画上映を通して日本紹介。

205	1929	6月3日	米国人は何を読む	アメリカ読書組合で七千人のアメリカ人会員から愛読書投票を行った結果。現代作家の割合少ない。
206	1929	6月29日	東洋ナイトの催し	社会事業家開催の東洋ナイト。日本舞踊、音楽、ほか中国、トルコなどの国の文化が集まっている。入場無料。
207	1929	8月31日	桑港の日系市民が英文機関誌を出す	日系市民の言論を発表するため英文で機関誌を発行する計画有り。
208	1929	10月17日	日常英語会話無料教授	佛教会にて、桑港学園幼稚部のショークを招聘して日常英語の教授を始めた。無料教授。
209	1929	11月19日	日本文化の紹介	サター、フランクリン街角にある加州セントリー倶楽部という婦人団体主催の下に「日本の半日」が開催、日本文化の紹介される。